
秘密の退魔師

夕顔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の退魔師

【Nコード】

N6987M

【作者名】

夕顔

【あらすじ】

退魔師——それは歴史の闇に身を置き、物の怪を退治する者たちの総称。主人公の天音紫音もまた退魔師である。だが、普段は普通の高校生。

そんな彼が織りなす現代ファンタジー。ただ今開演。どうぞごゆっくりご堪能ください。~~~~~この作品は処女作です。生温かい目で見守っていただけたらと思います。また、非常に更新が遅いと思いますので、あまり更新には期待しないでいただきます。現在、第一話から加筆修正を行っております。話の本筋に

は影響はありませんが、もし、影響が出るようならば、事前に通知いたします。

第一話 廃校舎にて（前書き）

こんにちは／こんばんは。

初めまして、夕顔と申します。

駄文ですが、皆さんを少しでも楽しませることができればなと思います。

いろいろ至らない点があると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

生温かい目で見守っていただけたらなあと思います。

では、第一話をどうぞ。

第一話 廃校舎にて

ひとり、ひとり、ひとり、ひとり。

ここはとある廃校舎。長年放置された校舎の外壁はひび割れ、月明かりに照らされて不気味にその姿を浮かび上がらせている。

外も外なら、中も中である。

長年積もった埃が廊下の隅に溜まり、天井に目を向ければ、蜘蛛が至る所に巣を張っていた。学び舎としての責務を果たした教室は、黒板を除いて何も無く、何処となく寂寥感と、そして不気味な雰囲気を感じさせる。

その本来なら誰もいないはずの教室に、学生らしき2人の人間の姿があった。

1人は、その高い背丈をセーラー服に身を包んでいる。跳びぬけて美人というわけではないが、何か引き付けるような顔つきで、人を圧倒するような、姐御肌に近い空氣の少女だ。こんな状況にも臆すことなく周囲をきよきよと見回していた。

もう1人はまるで中学生の様な背丈だが、高校の制服を身に着けている。優男と言ってしまえばそれまでだが、なんとなく頼り無さげで、頼れると言うよりは守ってあげたいと感じさせる。その雰囲気通り、その少年は少女にくっつくようにして離れようとせず、表情も半泣きに近かった。

少女は、少年がくっついてくるのを嫌がる様子もない。姉弟なのだろうか、2人は、目や口もとが何処か似通っていて、雰囲気は恋人同士というよりも、家族に接するものに近かった。

「ねえ、やっぱ帰りうよ……。なんか変だよ……」

少年が、その容姿に違わず、やや高い声を震わせて少女に言う。

「はあ、男のくせして情けないな勇樹は。勇つていう字が入ってるんだからしっかりしろよ……」

と呆れ声の少女。その男口調が妙にしっくりきていて、違和感が無い。

「うっ……。だって怖いものは怖いんだもん。姉ちゃんこそ優末って名前なのに優しくないし……」

後半はボソッと、少女に――姉に聞こえないように言っただつたのだから、ばつちり聞こえていたらしく、

「何か言ったか？ 勇樹？」

と、凄みのある笑みでそう返された。

勇樹と呼ばれた少年は、にっぎた拳を鳴らしながら、笑顔で尋ねる姉の姿を見て慌てて眼をそらす。

「べ、別に何もい、言っていないからね……」

「そうか、あたしの名前がどうかいってた気がしたが、何もしやべってないんだよね？」

姉が――優末がグイッと顔を近づけながら、笑顔で尋ねる。

「そ、そうだよ。空耳なんじゃないのかな。は、ははは……」

取り敢えず笑ってごまかす勇樹。

「全く……」

はあ、とため息をついて拳を納める優末。

「でも、ホントに幽霊とか出そうだね……。嫌だなあ……。イタッ

！ もう何するんだよ……。暴力反対ー」

しかし、その拳が再び形作られ、勇樹の脳天に直撃した。

勇樹は迷惑そうな顔をして、殴られた頭をさすりながらいう。優末のげんこつは恐ろしく痛い。多分、同世代の男でも悶絶するだろう。それを痛いと言うだけで済ましてしまうのだから、慣れとは、げに恐ろしきものである。

「あたたちの目的は、その幽霊が実際に居るのか確かめることだろうが。あんたはオカルト研究会の部員だろう」

「だって……」

そのオカルト研究会と言う部は、2人の通っている霧原高校の数ある部の一つである。部員は5名。部長は長瀬優末。恐ろしく胡散

臭いが、霧原高校の創立からある由緒正しい（？）部なのである。

「霧原さんとか文弥君とか天音先輩はどうしたのさ」

「ああ、あいつらなら、多分、東校舎のほうに居ると思うぞ。0時にこの学校の正門に待ち合わせているから、あと45分ぐらい余裕があるな。ついでに南校舎まで足をのばしとくか……」

「ええゝ。嫌だよう、あっち変も感じがするもん」

「はいはい。つべこべ言わずさっさと行くよ！」

「あ、ちよつと置いてかないでよお……」

教室をでる姉の姿を追いかけて、勇樹も慌てて廊下へ出る。こんな所、大人数でも来たくない勇樹にとっては、地獄でしかないのだ。わざと、走って勇樹を1人にさせようとする優未を、勇樹は必死に追いかけた。

姉ちゃんは絶対僕をからかって楽しんでる。勇樹は内心ため息を吐きながら走った。途中、寒気がして後ろに誰かいるような気がしたが、振り返っても誰もいなかった。気のせいだろう。そう思うことにした。

しかし2人は知らない。そのあとをつける、不気味な影があることを……。

ひとり、ひとり、ひとり、ひとり……。

南校舎は先ほどの西校舎と殆ど変わりはないかった。ただ、理科室や音楽室など、怪談話に事欠かない教室が多い。優実によく追いついた勇樹は、姉に連れられ、理科室へと歩みを進めていた。

「南校舎には理科室も音楽室もあるからな。きっと楽しめるだろう……。ぐふふふ……」

優実はや地悪そうな笑みを浮かべる。

「気持ち悪っ。変な笑い方しないでよ……どうせ、僕が怖がるのを見ただけなんだろう、姉さんは」

迷惑そうな目で姉を見る勇樹。

「なに、心外だな。あたしは幽霊が見ただけなのに……。うわあああ！ あ、あそこに何かいる……！」

しらを切る優実だが、急に、指を教室の方に向けると、わざとらしく勇樹の方を見ながら叫ぶ。

「ぎゃああああああ！ た、助けて……」

勇樹は夢中になって姉の後ろに隠れた。そして、そおつとその方向を見る……が何もなかった。あるのは、教室の壁に掛けられている、古びた黒板だけだ。

「もう、騙したね……！ そんなに笑わなくてもいいじゃんか」

「だ、だって……。くくく、あはははは、ひー、ふふふふふ、はー

はー、げほっ、げほっ」

静寂が支配する廃校舎に、陽気な笑い声が響き渡った。

一人で大笑して、むせている姉の姿を尻目に勇樹はため息をついた。ふと、後ろに振り返ったとき、彼は見てはいけないものを見してしまった。白いワンピースを着た、髪の毛の長い女性。軽くうつむいているせいで長い髪が邪魔をして、顔は見えなかった。

「え……。だ、誰……？」

こんなところに、人がいるわけがない。しかも、女性なんて。だって、部の女子は部長である姉を除いて、全員東校舎に居るはずなのだから。それに、白いワンピースなんて誰も着ていなかった。そのの意味することに気付いた勇樹は、腰が抜けてしまった。

「ね、姉ちゃん。あ、あれ……！」

思わず、へたり込むのを防ごうとして、優末の方へもたれかかる。急に喉がからからに乾いて、上手く声が出ない。

「んー？　なんだよ。あたしを驚かせようとしたって無………！　誰だよ！」

弟が芝居を打っているのだと勘違いして、緩慢な動作で振り返る優末。しかし、勇樹が指さす女の姿を見て、流石に表情が変わった。硬い表情で怒鳴る。

「あゝあゝあゝあゝあゝ」

女が奇声を発する。その声はまるで、喉が焼け付き、声が掠れてしまったかのようなだった。地の底を這うような声。大して低くもなはずなのに、腹の底に響く太鼓のように、全身を震わせた。

鈍い動作で此方へ向かってくる。動いたときに髪が揺れ、その長い髪に隠れた双眸がチラリと覗いた。それを見てしまった優末は、全身を寒気が覆い、歯の根が合わなくなった。

これはヤバイ。普段感じたことの無いような猛烈な危機感が襲う。本音を言えば、勇樹もここにおいて自分だけでも逃げ出したかった。「ひっ」

勇樹も、あの瞳を覗いてしまったのか、小さく息をのむ声が聞こ

えてくる。

その間にも、謎の女がまたも奇声を発しながら、おぼつかない足取りで向かってきた。

「ね、姉ちゃん、ヤバイよ。早く逃げようよ……」

「あ、ああ。そ、そうだな。逃げないと……」

だが、彼らの足は一向に動く気配を見せなかった。否、動かないのではない、動かせないのだ。足が石のように固まっていて、ピクリとも動かない。

「な、なんだよこれ！ う、動かねえ……」

見ると、弟の勇樹もまた、足を動かせないようだ。

その間にも、女は刻一刻と近づいてくる。もう後、6メートルを切った。

ひたり、ひたり、ひたり、ひたり。

「勇樹！ 手だけで這って行くぞ！」

幸いにも、手は動く。優未は這っていくことにした。

「う、うん……」

手だけで這って行くが、女のほうがわずかに早い。少しずつだが、着実に差は縮まっていた。

ひたり、ひたり、ひたり、ひたり……。

もう、差は4メートルを切った。

「くそ……！ どうすりゃいいんだ……」

その時、突如謎の女が奇声をあげて苦しみだした。

「あゝあゝあゝ――！！ ぎゃあ――！！」

「えっ……」

微かにいい匂いがした……と思った次の瞬間、彼らの視界が暗転した。

突然、勇樹達の後ろから、人影が飛び出した。背丈からして、勇樹達と同年代の少年だろうか。黒い学生服に身を包んでいる。

少年は、一瞬で女に肉薄すると、額に手に持った長方形の紙の様な物を張り付けた。

「あゝあゝあゝあゝ――！！ ぎゃあ――！！！」

紙が貼られた瞬間、女が何故か苦しみ出す。

と、その叫び声に交じって、ドサツ！ と言う人が崩れおちる音がした。少年が振り返ると、2人は固く瞳を閉じて、すやすやと寝息を立てている。

「ふう……あぶねえ。あと少し遅れてたらどうなったか……」
危機的状況に登場した、ヒーローはそうつぶやいた。

「私のおかげね。感謝しなさいよ紫音」

その呟きに、答えるようにして、明らかに少年の声ではない、女

性の声がした。見ると、寝ている2人の上に、何やら小さな人型の生き物がいる。何か着物の様なものを着ていて、身長があまりにも小さすぎるのを除けば、まさしく大和撫子のようなものである。

少年は、その生き物の傍によると、言った。

「ああ、今回はマジで助かったよ。おかげで、同級生を救うことができた。サクラ、ありがとな」

学生服に身を包んだ背の高い少年は、天音紫音。その隣に居る、ヒトと呼ぶには小さすぎる着物を着たモノはサクラと言う、精霊だ。彼女は紫音が使役する精霊の中の一柱である。探知能力、妖術——特に幻術に長けている。おそらく、彼女がいなければ間に合わなかっただろう。

「あゝあゝあゝあゝあゝ——!!」

見ると、優未達を寝かせるときに女に貼った護符が焼き切れたところだった。

怒り狂った女は、ギロリと自分の動きを奪った張本人を睨むと、怒りの咆哮を上げた。

「ちいっ！ もう動けるのか……！ 厄介な……。上級の護符だぞこれは！ 高かったってのに……」

厄介と言う割には、それほど焦っている様子ではなく、何処かハタ迷惑そうな、面倒事に巻き込まれたような口調である。

「こいつ、相当霊力が高いわよ！ 気をつけてっ」

それだけ言うと、サクラは何やらぶつぶつと何かを唱え始めた。

女は、それを無視し、紫音に跳びかかる。

「ああ。分かってるさ……！ よっと」

紫音は女が繰り出したひっかく様な一撃をバックステップでかわす。だが、女はそのまま倒れこむようにして突っ込んできた。

紫音はそれを横に体を捻り、紙一重で回避する。

「うおおっ！ あ、あぶねえ……」

勢い余って突っ込んできた女はさらに跳躍し無防備なサクラに襲いかかる。

「きゃああ！」

「さ、サクラ大丈夫か!？」

女がサクラに馬乗りになろうとした瞬間、その姿がふっと掻き消え、吹っ飛ばされた。

「あゝあゝあゝ!？」

「馬鹿が。もうお前は幻術にはまってるんだよ。一度はまったら、もう抜けだせないぜ。退魔師舐めんなよ！」

そう、サクラは女が紫音に突撃した時点で、幻術を完成させていたのだ。

「あゝあゝあゝあゝ!!」

激昂した女が紫音に突撃するも、またもや姿が掻き消えてしまう。そして次の瞬間、銃声が響いた。

女の額に穴が開く。

紫音の手にあるのは一丁のリボルバー式拳銃。銃身が月明かりに照らされ、鈍い銀色に輝いている。

「あゝあゝあゝ……あゝあゝ……あゝ」

驚愕に染まった顔で、後ろへ後ずさりする女。

「安らかに逝きな……。穢れた魂に救済を。浄化」

しかし、紫音が口を開いた瞬間、まばゆい光が女を包み込み、そして跡形もなく消し去った。

紫音は、光の粒子となって消え去った女を見届けると、サクラに振り返って言った。

「ふう……。終わったな……。一瞬ひやりとさせられたが、無事浄化できたし帰るとするか。こいつらを起こすから、じゃあな」

「ええ、分かったわ。じゃあ、また今度ね」

そういうとサクラは消えてしまった——否、帰ったのだ、精霊界に。通常、精霊たちは精霊界に住んでいる。術者は、契約した精霊を精霊界から呼び出し使役する。これが一般的に言われる精霊術である。

「おい、こら、起きろ。じゃないと置いてくぞ」

優未をゆすって起こそうとするが、全く起きる気配がない。

「おい、起きろって！……仕方がない、アレを使うとするか」

紫音はどこから取り出したのか、置時計を取り出した。見た目は普通の置時計だが、中を改造してあり、ベルが鳴ると鼓膜が破れるぐらいにけたたましい音が鳴り響くのだ。だが、音が大きすぎてつかった方が気絶するという恐ろしいブツである。

「くくく……。今回は、こんなことがあると、耳栓を持ってきたのだ。その音、じっくり味わえよ……」

悪そうな笑みでそう呟くと、現在の時刻の一分後にセットし、耳

栓をつけて待つ。

ジリリリリリリリリリリ！！！！！！

けたたましいというか、もう凄まじいといしか言いようがない音に2人とも目を覚ました。

「のわああああ！！　う、うるさいからやめろ！　耳がおかしくなる！」

「うわああああ！！　び、びっくりした……。う、うるさいから天音先輩止めてください！」

殆ど同時に跳び起きる2人。流石姉弟だ。見事なシンクロ率である。

「えー、なんだって？　耳栓してるからよく聞こえないなー」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら聞き返す紫音。

「このくそ天音……」

「ふーん、女の子がくそとか言っちゃ駄目だねえ」

「ばっちり聞こえてるじゃねえか！」

思わず怒鳴り返す優未だったが、そのせいで頭が痛くなったようだ。

「はて、何のことやら……」

そんな様子を笑いながら見て、とぼける紫音。

「しらばっくれやがって……。もういい、頼むから早く止めてくれ！」

「お、お願いします……。ほ、ホント……。も、もう無理」

そう言つと勇樹はバタリと倒れてしまった。

「おお！？　だ、大丈夫か！」

慌ててスイッチを切るがもう遅い。もう勇樹は永遠の眠りに着いたようだ。

「おお……。なんということをしてしまったんだ俺は。勇樹を殺してしまうなんて……」

がっくりと、芝居がかった動作で膝をつく紫音。

「はいはい、ふざけるのはここまでにして、なんで、こんなところ

で寝てたんだ？　というか、寝る前の記憶が全くねえ」

不思議そうに尋ねる優未。

良かった。ちゃんとサクラの幻術は効いているようだ、紫音は心の中で胸を撫で下ろした。

「いや、俺に聞かれても。俺はただお前らをおどかさうとしてここに來ただけだから。こんなとこで寝てるなんて反則だぜ。俺のほうが驚いちまった」

紫音は真顔でそう返す。

もちろん、嘘である。自分たち退魔師の存在は決して公にしてはならない。常に、歴史の闇の部分に身を置く退魔師たちのルールだ。「取り敢えず、もう時間だから正門のところに帰ろうぜ」

「そうだな。勇樹はお前が背負って行けよ。あたしは知らねえからな」

無駄に冷たい優未。ちよつと怒っていらつしやるようだ。

「え、ちょ、ちよつと待てよ！　なんで俺が……」

「お前が気絶させたんだろ。なら、責任持て」

そう言つて優未は紫音に勇樹を押し付けさつさへ行つてしまった。「普通は自分が背負って行くって言っんじゃないか……？　俺がいなかったらどうなっていたと思つていやがる……」

ぶつくさ文句をたれながらも、結局は背負って行つた紫音だった。

「遅いですよ天音先輩。いいとこなんて一つもないんですから、時間にだけはきちつとしてください」

校門に着いた紫音に、きつい一言を浴びせかける少女が1人。今のはちよつと傷つくなあゝと紫音は心の中で呟いた。

「ちょ、ちよつと霧原！？ 言いすぎだって……！ 先輩もいいとこなしじゃないですよ！ きつと探せば見つかるはずですよ！」

と、慌ててフォローしたものの、フォローになっているかどうかあやしい少年が1人。

「要は、今のとこ天音いいとこは見当たらないってことだろ」と、的確な突っ込みを入れる少女――改め優未が1人。

「あ、い、いやべ、別にそんな意味で言ったんじゃ……」

「へえ、じゃあどういう意味だよ。ほかの解釈があるなら言ってみな」

Sっ気を全開にして、少年を追い詰める優未。

「え、ええつと、そ、それは……」

答えに窮する少年。

見かねた紫音が、少年と優未の間に割って入った。

「おい、そのぐらいにしといてやれよ。優未」

「へいへい、相変わらず蓮にはあまいねえ……」

勇樹を背負って正門まで来た紫音に、きつい一言を浴びせかけた

のは霧原舞。髪を腰まで垂らしており、吊り目でややきつい印象を受けるが、それを差し引いても十分整った容姿をしている。しかし、その毒舌のせいで、ごく一部の特殊な性癖を持つ男子以外には敬遠されがちだそうだ。

そして、それをフォローしようとして、結局自爆しているのが文弥蓮。肩のあたりまで髪があり、自身の女顔と背の低さも相まって、女子にしか見えない。2人ともオカルト研究会に入っている。2人の立ち位置的には、蓮がマスコット、舞が……舞は……舞ってどんな立ち位置だろう。割と本気で悩む紫音を舞が毒舌で遮った。

「ちよつと先輩（笑）、早く勇樹様を下してください。穢れます」
「おい！（笑）ってなんだよ！（笑）って！」

妙なニュアンスを感じた紫音は、思わず声を荒げる。

「おお、流石先輩（笑）。言葉の裏まで読むとは……」

おちよくっているかの様に、大げさに返す舞。別に否定はしないらしい。

「否定しろよ！ なあ！ そこは否定するか、しらばっくれるかのどっちだろう！」

「いえいえ、偉大なる先輩（笑）には隠し事などできませんから」

「はあ……もういい、それより勇樹様っていうのやめろ。俺らが変な眼で見られる」

紫音は、この不毛なコントに終止符を打つべく、話題を変えた。

「まさか、変な眼で見られるのは先輩のせいでしょう。私には何の非もありません」

馬鹿なのこいつ？ みたいな目で見られる紫音。

本気で、自分に非は無い思っているらしい。

舞は勇樹に傾倒していると言えば分かりやすいだろうか。まあ、勇樹は怖がりな奴だが根はしっかりしているやつなので、惚れるのも分らないわけじゃないが、こいつの場合は少々度が過ぎる。ほっておいたら、何をしだすかわからない。要注意人物である。

「さっさと降りしてくださいって言うてるんです。とうとう、耳ま

でおかしくなりましたか？」

「分かってるって……。おい、起きろー」

紫音が背中の勇樹の頬をペチペチ叩くと

「うつん……。ここどこ……？」

起きたようだ。

「正門だよ。大丈夫か？」

「あ、天音先輩！？ は、はい。大丈夫です」

紫音は勇樹を降ろすと、前触れもなく繰り出された飛び蹴りかわした。

「あぶねえなあ……。俺じゃなかったら今のもろに食らってたぞ」
呆れたように呟く紫音。

「さっさと離れろって言うてんですよ。それに、別に当たるとも思
ってませんでしたから」

けんか腰な舞に、紫音は若干顔を顰めながらも、立ち上がった。

「さて、諸君。どうだった？ なにかいたか？」

場を仕切り直すように優未が言った。おかげで、やや険悪な空気
になりつつあったのが解消された。彼女の声には力がある。こうい
うところに関しては、紫音も素直に尊敬する。決して自分にはでき
ないことだ。

「うつん。なにもいませんでした。この校舎に『恐子さん』がいる
って噂、本当だったんですかね」

蓮が訝しげに言う。

『恐子さん』……さっき紫音が倒した怨霊のことだ。詳しい話は
割愛するが、鏡子という女性の怨念があのような形になって現れた
ようだ。

「あたしらも何も見なかったよ。なにかあったとすれば、いつの間
にか寝てたってことぐらいかね」

ちなみに余談だが、実は『恐子さん』の発する瘴気に誘われて、
かなりの量の怨霊や妖怪がいたのだが、すべて紫音の涙ぐましい努
力により、浄化され蓮たちの目に付くことはなかった。

「今回もダメだったねえ。今度こそはと思ったんだけど。じゃあ、帰ろうか」

「じゃあね〜。バイバイ霧原！」

そう言っていると蓮は急ぎ足で帰ってしまった。

「それでは勇樹様。私も失礼しますね。では」

舞も蓮とは反対方向に帰っていく。

「勇樹帰るよ」

「うん。さようなら天音先輩。また明日」

「おう。じゃあな」

もう12時過ぎだ。明日も学校がある。早く帰らなければ寝不足になってしまう。紫音は職業上、一日、二日徹夜したぐらいではびくともしないが、民間人である彼らは違う。こういうときに、何とも言えない寂しさを覚えてしまう。退魔師の連中は素手で人を殺せるだけの力がある。民間人から見れば化け物に見えるだろう。自分では気付かないが、やはり、自分もまた化け物だろう。もし、自分の正体が皆にばれたら……。蓮や舞、勇樹や優未は受け入れてくれるだろうか。それとも、化け物と恐れられるだろうか……。かつての両親の様に。

「ふう……。駄目だな。感傷的になりすぎる。もう4年も前のことなのに……。帰ろう……」

そうつぶやいた紫音は自分の家がある方向へと歩いて行った。

第一話 廃校舎にて（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

大体、これぐらいの分量で続けていきたいと思っています。

ちなみに、警告タグについてですが、今はまだ関係ありませんが今後、そう言った描写を出すつもりなのでつけておきました。

誤字、脱字の報告がございましたら、御手数ですが知らせていただきたいと思います。

第二話 師匠と弟子1（前書き）

こんな小説を読んでくださる方がいるのかはさておき、お待たせしました。

途中、説明がグダグダと続くと思いますが、作者が力量不足のためこんなに長くなってしまいました。本当はもっと短くて済む話だったんですが……。

読むのめんどいという方は軽くスルーしてください結構ですの
で。

それでは、第二話『師匠と弟子1』どうぞ！

第二話 師匠と弟子1

「ただいまー」

誰もいない家に帰宅を知らせる声が響く。別に、一々言う必要はないのだが、13年間で染みついた習慣はなかなか治らない。

玄関で靴を脱ぎ、クーラーのスイッチを入れるとそのままりビングのソファアーに倒れこむ。夏はやっぱり、クーラーだろう。これがないとやっていけない。

マンションの最上階、6LDKという、一人暮らしにはいささか豪華すぎる家だが、部屋の大半は物置と化している。

家賃も馬鹿みたいに高いのだが、退魔師という職業上収入はかなり高い。命をかけて戦っているのだ、これぐらいの収入がないとやっていけない。また、武器の整備代や紫音のように銃を使う場合は、弾代もばかにならない。

まあ、それを差し引いても、一般のサラリーマンの何倍もの金額が手元に残るのだが。

「ああ。換金所に行かなきゃならねえのか……。めんどくせえ。明日でいいか……」

換金所とは、退治した妖怪や怨霊などを換金する所だ。倒した数や相手のレベルによって金額が決まる。場所は家から自転車です10分ほどの所。退魔師は、多機能のブレスレットを付けることを義務付けられており、それに何をどれだけ倒したかなどの情報が記録されるため、証拠品などを持ち帰る必要はない。

だが、寝る前に銃の整備もしなければならぬ。一発しか撃つてないとはいえ、整備を怠ると暴発したりという不具合が起きるのだ。

そうしているうちに、1時、2時になっていたりしてあまり寝られないことが多い。もちろん、その程度じゃびくともしいとはい言

え、やっぱり睡眠は欲しい。精神の疲労を取るには、睡眠が一番なのである。

「よしつ。さつさと整備して、換金所行つて、寝るか」

そう言つと、着ていた学生服を脱ぎ、私服に着替える。

そして、整備を始めるのだが、これがまた面倒なのだ。紫音が持っているのはリボルバー式拳銃。だが、一般に普及しているものは構造が少し違う。

通常、リボルバー式では弾の雷管（火薬が詰まった部分。火薬が湿気るのを防ぐために存在する）を撃鉄で直接叩き、弾を発射する。しかし、この銃は元々魔力を固めて作った弾を発射するために作られているので、銃本体に、所有者の魔力を使い爆発を起こす機能が備わっている。その爆発で、弾を飛ばす仕組みになっているのだ。ちなみに、反動は銃に彫られた魔術により、かなり抑えられていて、撃つても殆ど感じない。

だが、紫音が使っているのは多少手を加えてはいるが、雷管も普通についている弾だ。そのため、二回爆発を起こしかなり威力が跳ね上がっている。とはいえ、二回もの爆発が銃に起こるのだ、きちんと整備しておかないと暴発どころか、撃ったら銃がバラバラになりましたなんてことになりかねない。一応、かなり頑丈なのだが、用心にするに越したことはないだろう。

紫音は銃を手際よく分解していく。

シリンダーラッチという弾倉を取り外すための部品を親指で押すと、銃身の付け根が折れ、回転式弾倉から、ばねの力を利用して空の薬莖が排出される。空になった回転式弾倉の内部を掃除していく。次に、銃身を小さいたわしのようなもので、煤を落とす、きれいにしていく。この部分は、きちんときれいにしておかないと、弾詰まりの原因にもなってしまう。

そして、銃把を取り外す。

オートマチックマガジン
自動拳銃の場合、ここは弾倉になっていて、ため取り外すことができないが、リボルバー式の場合は回転式弾倉があるため取り外しが

可能なのだ。ほかに、握りやすいように交換することもできる。外した所から内部を掃除すれば、一通りの整備は終了である。

分解した銃を再び組み立てて元に戻していく。

紫音は、銃を組み立て終わると、ホルスターに戻した。

「さて、銃の整備も終わつたし、換金所に行くか」

今は夏なので半そでを着ているのだが、それではホルスターを隠せない。したがって普通は置いていくしかないのだが、このホルスターには隠蔽魔術が彫りこんであり、一般人の目をごまかすことができるのだ。ホルスターを右の腰に下げて準備完了。

「行つてきまーす」

やはりこれも習慣になっており、誰もいない家に出発を知らせる声が響いた。外に出ると、生温かい風が紫音の頬を撫でる。

玄関に鍵がかけて、階段へと向かう。

その間に、肉体強化の魔術を構築し、行使した。対象は足。この魔術は、読んで字のごとく対象者の肉体を強化するものだ。わずかに、自身の魔力が消費されるのを感じた。

そして、一気に階段を飛ぶように駆け下りていく。むしろ、飛び降りていくと言ったほうが近いだろう。この方がエレベーターより速いのだ。人に見られるとまずいが、今は深夜1時過ぎである。誰もいないはずだ。

1分ほどでエントランスに到着する。魔術を解除すると、エントランスの隣にある、自転車置き場から自分の自転車を出して、それに乗る、漕ぎだした。

マンションの前の大通りに沿って、進んでいく。

しばらく進んだ後、右に曲がり、人気のない路地に入る。そのまま4、5分ほど進むと雑居ビルが見えてきた。

もう深夜だが、3階に煌々と明かりが灯っている。

紫音は、自転車をビルの前に停めて、中に入って行った。

3階にある『換金所』と書かれた扉をあけて中に入ると、クーラーの効いたひやりとした空気が紫音を包んだ。

床には絨毯が敷いてあり、高級そうなソファが置いてある。リビングの様な光景だが、部屋の中央に置かれた重厚な木製のカウンターがすべてをぶち壊していた。

「いらつしゃい。6日ぶりね」

「こんばんは。学校が忙しくてなかなか仕事ができなかったもので出迎えたのは大人の色香漂う女性だった。燃えるような赤い髪をしていて、人を引き付けずにはいられないような顔のつくりをしているが、彼女には両足がなく、車椅子に座っていた。

名前は姫川早苗。年齢不詳。元A＋ランクの退魔師だったが2年前、両足を失い退魔師を引退した。

A＋ランクというのは退魔師に付けられるランクで、A～Fまでの6ランクに＋、無表記、－の3段階、つまり、18ランクに、Sランクという最高のランク、そして一般人を表すGランクの、合計20ランクがある。

A＋ランクというのは最強とは言わないまでも、準最強ぐらいはある。まあ、簡単にいえば、馬鹿みたいに強いということだ。

ちなみに紫音はと言うと、B＋である。

「じゃあ拝見させてもらうわよ」

「どうぞ」

プレスレットを渡す。早苗はそれを解析機に掛けた。

「えーっと……あつた、これね。うわあ、下級の霊が123体って……。よくこんなに浄化できたわね。でもなんで、こんなにいるの？　一ヶ所でこれだけの霊が集まるのはかなり珍しいのに」

「それは、東町の廃校舎での記録ですよ。『恐子さん』とかいう怨霊が発する瘴気に誘われて、かなりの量の霊がうるついていたので大変でしたよ……。もう、あんなのは二度とごめんです」

紫音は、数時間前のことを思い出して、うんざりした表情で言った。

「『恐子さん』？　何それ？」

「ああ。知りませんでしたか。うちの学校で流行っていた怪談とい

うか噂みたいなものです。あの廃校舎に木皆鏡子という女の子——
——うちの生徒じゃないんですが——が仲のいい同級生6人で肝試
しに行ったそうです。ですがそこで鏡子さんはそこで行方不明にな
ったそうです。一緒に回っていた女の子も気付いたらいなくなつて
いたとか。そこで、残りの五人も手分けして探そうとするのですが、
結局見つからず、警察も動き出すのですが、やはり見つからなかつ
たそうです。その後、こんな噂が流れました。仲が良かった、と思
われていた5人は実は鏡子さんに恨みを持っていて、事故に見せか
けて鏡子さんを殺したのだと。警察も馬鹿じゃありませんから、当
然、その線は考えたはずです。根も葉もない噂なのですが、何故か
再び廃校舎に向かった5人が、忽然と姿を消してしまったのです。
警察が、調べるとそこには『助けて』と床に血で書かれた文字が見
つかりました。ですが、肝心の生徒たちの姿はなく、別の教室であ
きらかに4、5人ぶんの致死量の血が発見されたそうです。DNA
鑑定の結果、その5人のものと一致したとか。今度は、うちの生徒
が、肝試しにいくと、白いワンピース姿の少女がその教室に居るの
を見たそうです。それで真偽を確かめようと我らがオカルト研究会
が向かったというわけです」

事の顛末を語り終えた紫音は、ふーっと息を吐いた。

「ふーん。で、実際に居たんでしょ？」

「ええ。まあ、それほど強くはありませんでしたが。それよりも、
下級の霊の浄化のほうが大変でしたよ。なぜか、うちの部員全員が
見鬼の才があるので、下級の霊でも見えちゃいますし。ばれないよ
うにしなければならなので大変でした……」

そう。そうなのだ。

大体、5パーセントぐらいの確率で発現すると言われている見鬼
の才。退魔師には必須のものだが、一般人で見鬼の才があると言っ
るのは非常に珍しい。

そのはずなのに、何故か部員全員が見鬼の才を持っているのだ。
一体どれほどの確率か、間違い無く天文学的数字だろう。

まるで、神様が自分だけに意地悪をしている様な——そんなことあるわけが無いのだが——気さえするのである。

「ふふふ。お疲れ様。えーと、報酬は1021万ね。あなたの口座に振り込んでおくわ」

そんな紫音の様子を見て、ふふふとおかしそうに笑う早苗。

「ええ。お願いします。それじゃあまた来ますね。さようなら」

「え、ち、ちよつと待ってよ。もう帰るの？」

早苗が慌てたに言うが、勤めて無視する。疲れているのだ。さつさと家に帰りたい。

「明日、学校なので。それに、ここ数日あまり寝れてないんですよ。だから、久しぶりの睡眠を邪魔しないでください」

「う……。分かったわ。その代わり、明日、ここに遊びに来てくれる？」

紫音の気だるげな口調に、流石に引きとめるのは悪いと感じたのか、あっさりと引き下がった。しかし、しっかりと次の日に約束を取り付けようとしてくる辺りに、転んでも唯では起きない早苗の性格がよく表れている。

「遊びに……ですか」

「そうよ。だって、この地区には退魔師が3人しかいないし、残りの二人も、良平は依頼でしばらくいないし、沙耶は昨日来たところから、後一週間は来ないし……。ね、お願い！ わたしの話し相手をするだけでいいからさ」

このとーり、と拝むようにお願いしてくる早苗に、まあ、別に断る理由もないか、と紫音は了承することにした。

「かまいませんよ。ただ、さっき言ったように学校があるので、ここに来れるのは6時半頃になると思いますが……」

「いいのよ。昼は、本局から監査の役員が来るから。その人に、話し相手をしてもらうわ」

実にうれしそうに話す早苗。

可哀そうに。それでは監査も何もあつたもんじゃないだろう。

紫音はひそかに心の中でその役員に合掌した。なーむー。

「そうですか。では、また明日」

しかし、そんなことはおくびにも出さず、そうですか、と頷くだけ。

「うん。楽しみに待ってるわ」

紫音は別れのあいさつを済ませると、ドアを開けて外に出た。

ガチャリ、とドアを開けると、今度はムツとした湿度の高い空気が、肌に纏わりつく。

ふと、何かの気配。

振り返ると、そこには少年がいた。いや、いたというのはおかしい。なぜなら、その少年は猛スピードで紫音に突っ込んできたのだから。

「うわああああああー！」

少年の叫び声がこだまする。

衝突を避けられないと悟った紫音は、慌てず目の前に魔術障壁を作り出した。相手の攻撃を受けとめるためにあるので、かなり頑丈な代物である。

それに猛スピードでぶつかるといことはつまり……。

ゴンツ、と痛々しい音が、辺りに響いた。

「おい。大丈夫か？」

魔術障壁を解いて、足もとでびくびく痙攣している、哀れな負傷者を足でつつきながら尋ねる。まあ、自業自得である。そんなスピードで突っ込んでくるほうが悪いのだ。この場合は正当防衛だろう。若干、過剰防衛の様な気がしないでもないが。

その音を聞きつけた早苗が外に出てきた。

「どうしたの？ って、気絶してるじゃないのこの子。中に入れるから、手伝って頂戴」

「ええ。言われなくてもそのつもりでしたよ」

紫音は気絶した少年を抱き上げると、部屋の中のソファーに寝かせる。まだ、10、11歳ほどだろう。将来は美形になるだろうと

思わせる顔だちをしていて、人目を引く、きれいな亜麻色の髪をしている。

「で、何があったの？ 頭にたんこぶができてるけど」

少年の頭には遠目で見ても分かるほど、大きなたんこぶができていた。

「ドアを開けたら、いきなりこの少年が突っ込んできたんです。それで、魔術障壁を作り出して止めたんですが……」

「あなたね……。自分の体で受け止めるとかできたでしょうに」

早苗は呆れたように言った。チクチクと非難するような目線が紫色に突き刺さる。

「いや、痛い嫌なんで」

「はあ……。もういいわ。あなた、治癒魔術は使えたわよね？」

「これぐらいなら、治せますね。光よ、彼の者の傷を癒したまえ。
『キュア
癒しの光』」

紫色が彼の頭に手をかざし、呪文を詠唱すると、手から淡い光が放たれ、瞬く間にたんこぶを治してしまった。

「へえ、光属性の治癒魔術か。珍しいわね」

「ええ。治癒魔術の大半は水属性ですからね。それに、光属性に適性のある魔術師はそんなにいませんから」

光属性、水属性というのは、魔術の属性のひとつで、火、水、風、土の四大元素と光、闇、無の上位元素の7つがある。
ハイエレメント

四大元素はそれぞれに作用しあっており、火は土に対して優位であり、土は風に対して優位であり、風は水に対して優位であり、水は火に対して優位である。このように、円を描くようになっていくのだ。

そして、上位元素は、光は闇に対して優位であり、闇は無に対して優位であり、無は光に対して優位である。また、光、闇、無は四大元素に対して優位である。
エレメント

また、四大元素同士を組み合わせることにより分素を発生させる。風と水を組み合わせれば氷。火と風を組み合わせれば炎。風と風

を組み合わせれば雷。土と火を組み合わせれば鉄。というふうになる。

「おい、起きろ」

紫音が少年の頬をぺちぺち叩くと、

「う、うつん……。あれ、ここどこ？」

少年は目を覚ましたようだ。

「ここは、みおせ遷瀬市の換金所だ。おまえ、退魔師だよな？　なんでこんなところに居る？」

紫音は険しい顔で少年を問い詰める。

「ちよつと、この子一般人かもしれないじゃない」

慌てて早苗が遮るが、紫音は一般人じゃないことは確認していた。

「大丈夫です。こいつもブレスレットを持っていますから」

「あ、そうなの」

「名前は？」

厳しい顔で問い詰める紫音だが、

「え、えええ？え、えつと……」

相手の少年はただ混乱するばかりで、埒が明かない。

早苗はため息を一つつくと、紫音と交代することにした。

「ほら、混乱してるじゃない。私に任せて。……えーと、あなたの名前は？」

「九湯川幸です」

「九湯川くん、あなたは退魔師？」

「はい。C-です。えつと、お姉さんは……？」

早苗はお姉さんと呼ばれたことに気を良くしたのか、先ほどよりもやや、やわらかい声音で答えた。

「その年齢でC-はすごいわね。私は姫川早苗。早苗お姉さんでいいわ。こつちの、お兄さんが天音紫音」

「えつと、よ、よろしくお願いします。じ、じつは、これを天音紫音って言う人に渡せっておじいちゃんから……」

幸がおずおずと取り出した封筒を見て、紫音は眉を寄せた。

「俺に？ それに、そのおじいちゃんって誰なんだ？」

「あ、哀川潤也ですけど……」

「……あのジジイ……」

紫音は何か恨みでもあるのか、憎々しげにつぶやく。そんな彼に向かつて早苗が尋ねた。

「哀川潤也ってあのスクラスの？」

「ええ。そして俺の師匠でもあるんですよ。……しかし、孫がいるなんて聞いてないぞ。あのジジイなら俺に話してもおかしくないんだが」

紫音は首を傾げる。

「僕はおじいちゃんに拾われたんです。僕の両親は、もう死んじゃってて」

「あ、ごめんなさいね。この子が無神経で」

早苗はすまなさそうにして、紫音の頭をつかんで強引に下げさせた。

「な、何するんですか早苗さん！」

「どうもこうもないでしょ。あなたは、他人のことに無頓着すぎるわよ。謝りなさい」

強引に謝らせる早苗に、幸が恐縮したように首を横に振る。

「い、いや、いいんですよ。どうせ師匠には御話ししなければなりませんでしたから。それにあんまり気にしてませんから」

「いや、すまない……って師匠！？」

紫音がいつも冷静な彼には珍しく、素っ頓狂な声を上げる。

「はい。これから一人前になるまで御世話になります。あ、それとこれがおじいちゃんから預かった手紙です」

紫音は渡されたそれをひったくるように受け取り、目を通した。

第二話 師匠と弟子1（後書き）

いかがでしたでしょうか。

最後の途切れ方がおかしいのは、これ以上書くとかかなりの文字数になるため断念した結果です。……要は作者の力量不足というわけです。こんなことにならないよう精進しなくては……。

さて、銃の件についてですが、二回爆発すると言ったこと以外は、調べて書きましたので、大体はあつてるかと思います。もし間違っている記述があれば、御手数ですが知らせていただければと思います。

設定：紫音の銃について

銘：コンビクシヨン（紫音が勝手につけた。特注のため元々銘がなかったため。意味は『断罪』）

タイプ：リボルバー式のシングルアクション

口径：38口径

装填数：7発

射程距離：1キロ（魔術が使われているため、かなり強力）

備考：紫音の愛銃。なんでも、駆け出しの時から使っているらしい。

第三話 師匠と弟子2（前書き）

お待たせしました。

今回はいつもより文字数が少なめです。

それでは、第三話 師匠と弟子2 どうぞ！

第三話 師匠と弟子2

よう、元気にやつとるか？

お前がわしの元から独り立ちした時からもう3年になる。

わしのところに居たのはほんの1年足らずじゃった。

が、わしの教えはきつと伝わっておるはずじゃ。

さらに飛躍することを願っておるぞ！

さて、幸の奴に話は聞いておると思うが、よろしく頼んだぞ。

お前はきつと『教えるのなんて柄じゃない』とか言つて、断るじやろつ。

じゃが、幸には断られてもしつこく言えば了解してくれると言つてあるからの。

幸は、わしの言うことを盲目的に信じておるから、きつとしつこく言うじやろつ。

紫音よ、もうそろそろ自分を許したらどうじゃ。

あれは事故だった。お前は何も悪くない。最善を尽くしたんじゃ。それに、お前は未熟ではないぞ。

きつと、日向も恨んではおるまいて。

いつまでも過去に囚われていてはならん。日向はもういないのじゃ。前を向け、紫音。きつと日向もそれを望んでおる。

お前には、人を教える才能がある。だから、この子を弟子にしてほしいのじゃ。

この子はまだまだ伸び白がある。うまく伸ばせばきつとSランクも夢じゃないはずじゃ。

それに、お前にとつても悪い話ではなかつた？

他人にものを教える事は決してマイナスにはならぬはずじゃ。

あと、人との接し方を幸から学ぶがよい。あやつは純粹だからの。

まだ、退魔師の表しか知らないんじゃないよ。

いつか、裏を知る時がやって来る。きっと幸は悩むはずじゃ。

その時は、お前がそばにいてやって、道を踏み外さんように支えてやってくれ。

お前の師匠、哀川潤也より。

PS、養育費は幸の報酬から引いておいてくれ。必要な分だけ引いておいてくれればいい。

手紙を読み終えた紫音は悪態をついた。

「あのくそジジイ……。余計なことしやがって……。事情は分かった。だが、お引き取り願おうか」

「だ、駄目ですか……？」

若干涙目の幸が聞き返す。

「ああ。そもそも、俺は教えるなんて柄じゃねえ。だが心配すんな。引き受けてくれるような奴に心当たりはある。そいつに聞いてやろう。それぐらいはしてやるよ」

手紙に書いてある通りの返答に、紫音は何だか悔しくなる。

「そう言う問題じゃないでしょう。師匠の頼みなんですよ。断るってどういうことよ」

早苗がやや怒ったように言う。

だが、早苗は知らないのだ。潤也が修行の一環と称して、紫音に料理、洗濯、掃除など家事全般をやらせていたことを。この当時、紫音は14歳。このころは学校に通っていなかった。ある事情により、心を閉ざした紫音にとっては頭を使わずに済む作業はありがたかったものの、毎晩、酒に酔いつぶれてそのまま寝てしまう師匠の後で、一人黙々と片づけをしていた紫音の身にもなってほしい。

だが、それでも、紫音は今の自分は師匠なしではありえなかったであろうと思っている。彼の暖かい心があつたからこそ、紫音はま

た立ち直れた。

独り立ちした後、紫音は弟子を一人取った。名前を戸宮日向と言う。だが、ある事件が起きた。その事件で日向は帰らぬ人となった。それ以来、紫音は弟子をとっていない。

「俺は人に教えるにはまだまだ未熟です。いくら師匠の頼みでも、こればかりは譲れません」

紫音はあくまでも頑なに拒む。

その頑なな姿勢に幸はとうとう折れたようで、

「分かりました……。でも今晚、泊るところがないんです」と困ったように言った。

「家に泊めてやるよ。それぐらいは当たり前だ」

「あ、ありがとうございます」

紫音の、冷たいのか、優しいのかわからない態度にしどろもどろになりながらも、幸は礼を言った。

「それじゃあ、帰らせてもらいますね。さようなら」

「ええ。明日、楽しみにしてるわよ」

早苗に別れを告げると、紫音は幸を連れて階段を下りる。

「そう言えば、お前、ここまでどうやってきたんだ？」

「走ってきました。師匠はどうやって？」

「師匠じゃねえよ。自転車で来た。俺の家はここから4、5分のところにあるからな」

「へえ、そうなんですか。ところで、師匠は適性はなんだったんですか？」

幸が紫音の後ろから尋ねる。

「だから師匠じゃねえって……。魔力の全属性だよ」

「すごいですね師匠！ 僕も同じ魔力に適性がありましたけど、火と風と土しかないのに」

適性とは、その退魔師が使える力のことで、魔力、霊力、氣、妖力、神力がある。魔力は7つの属性があり、霊力には五行——すなわち金、水、木、火、土の5つがある。ほかの力には属性の様な

ものはないが、それぞれ特徴を持っている。

「師匠じゃねえ言ってるだろう！　ったく……。いいじゃねえか、それだと、お前の分素は炎と鉄だろう。理想的な組み合わせだよ」
「えへへ、そうですか？　でも、まだ分素を発生させられないんですよ……」

ほめられてちよつと嬉しそうな幸が言う。

「当たり前だ。お前ぐらいの歳で分素を発生させることができたら苦労しねえよ」

紫音でさえ、分素を発生させられるようになったのは14歳の時だったのだ。

階段を下りて、置いてある自転車をとる。

「お前、走ってきたんだったな。じゃあ、歩くか。どうせ10分ぐらいで着くだろう」

自転車を引きながら紫音は言う。

「師匠は武器は何を使っているんですか？」

「だから……。はあ、もういい。師匠でいいよ……。銃だよ。ジジイに教えてもらわなかったのか？」

いくら訂正しても、聞かない幸に紫音もとうとう折れたようだ。

「はい。特に何も。あ、ちなみに僕は刀です」

そう言うものの、紫音には幸が帯刀しているようには見えない。

「どこに隠してるんだ？」

「五月雨よ来い」

幸がそう呟くと、何もなかった手に一本の鞘に収まった刀が握られていた。

「ほお、転移術式を鞘に組み込んであるのか。かなり貴重な品だな」
「母さんの形見なんです。銘は『五月雨』。死ぬ前に僕に残してくれた」

幸が愛おしげに鞘を見つめる。『五月雨』……。紫音の記憶の底で何かが囁く。

「ちよつと刀を見せてもらってもいいか？」

そんな幸に紫音が聞いた。やはりその刀、どこかで見覚えが……。いいですけど……」

幸の了承をとると、紫音は『五月雨』を抜いた。わずかに反りが入り、独特の刃紋がある。

刃渡りは2尺（約60センチ）ほど。

間違いない。これはあの人の持ち物だ。

「なあ、お前の母親の名前は橘伊織か？」

ある程度の確信を持って尋ねる。

「えっ！ な、なんでそれを……」

「やはりそうか……。お前の母親は、俺の恩人なんだよ」

慌てる幸に紫音は告げる。そして、自らの銃『コンビクション』を取り出した。

「この銃は、俺の愛銃だが、これは、お前の母親にもらったものだよ」

「そう、だったんですか……」

「もう、亡くなってしまったんだな……」

紫音は考え込むそぶりを見せた。しばらくしてこう切り出した。

「お前の弟子入りの件について考えてやってもいい。橘さんへの恩は返し切れてないからな」

「えっ！ ホントですか！？」

喜ぶ幸に紫音は釘を刺す。

「ただし、俺と一度戦え。その結果次第だ」

「し、師匠とですか……？」

驚く幸に紫音はにやりと嗤った。

「全力でぶつかってこい。場所は……：：：：：そうだな、マンションの屋上だ。日時は、これから帰ってすぐ。分かったな？」

その獰猛な笑みに思わずといったふうに幸が後ずさる。

「言っておくが、俺を失望させるなよ？」

「は、はいっ！」

そうこうしているうちにマンションに着いたようだ。

無人のエントランス——今時高級マンションには珍しく、オートロックではない——を通り抜け、エレベーターに乗る。

グンとGで体が引つ張られるのを感じる。このマンションは20階建てで、エレベーターもかなり速い。

やがて、最上階の20階に着く。

「うわっ。すごいですね師匠。高級マンションの最上階なんて……」

「退魔師の報酬は税金で賄われてるんだぞ。だから、それを世の中を潤すために使わなくてどうする」

「え、そうなんですか？ 知らなかった……」

驚く幸に、紫音が呆れた声で続ける。

「いいか、俺たちは非公式だが、国家公務員なんだぞ。いわば、警察と一緒に公僕だ。だから、一般人の安全を第一に考える……というのが、建前というやつだな」

「建前ってことは、本音は別にあるってことですよな？」

「どうやら、無知ではあるものの、馬鹿ではないらしい。紫音は幸にそんな評価を下す。」

「ああ。それはまた別の機会に話すでしょう。ほら、中に入れ」

「あ、はい。おじゃまします……」

紫音は家に幸をあげる。

「部屋を用意するから、ちょっとリビングでくつろいでくれ」

「あ、ありがとうございます」

紫音はそう言うのと、物置と化している部屋に向かった。

物置と化していると言っても、紫音の掃除スキルが幸いして、埃一つ落ちていない。そのため、幸の寝泊まりする部屋が埃っぽいという事態は避けられそうだった。

部屋の大半を占めている、弾丸の材料を他の部屋へ運び込み、押し入れから簡易式ベットを取り出し、組み立てる。しばらくはこれで我慢してもらうほかないだろう。

最後に、念のため掃除機で部屋を掃除する。これで完了である。

「おい、出来たぞ」

「はい。今行きます」

廊下走って幸がやって来る。そんな幸を紫音は注意した。

「おい、今は夜中だ。足音が下に響くだろ。走るな」

「は、はい。すいません」

近所付き合いとは大切なのである。まさにく遠くの親戚より近くの他人>なのだ。

「10分後までに用意を済ませとけよ」

「了解しました」

紫音は扉を閉めた。

10分後、2人は屋上で向かい合っていた。

むろん、周囲には転落防止と、見られるのを防ぐための結界が張ってある。

紫音は、私服の上からコートを羽織り、もうすでに銃に手をかけている。

幸はと言うと、先ほどの服装とは違い、動きやすいTシャツと半ズボンだ。その手も、同じく刀——『五月雨』にかけられてはいるものの、鞘から出さず、鯉口を切っている。恐らく、居合を使うつもりだろう。

辺りに、ぴんと張り詰めた空気が漂う。

「では、始めるぞ」

「はい」

やはり、緊張しているのか、幸の声は固い。

「いざ、尋常に、勝負！」

紫音の掛け声を合図に、2人は激突した。

第三話 師匠と弟子2（後書き）

いかがでしたでしょうか。

次回には、バトルが控えているので、少なめにしました。

次話をお楽しみに！

誤字、脱字報告、感想待ってます。

第四話 師匠と弟子3（前書き）

お待たせしました。

それでは、第四話 師匠と弟子3をどうぞ！

第四話 師匠と弟子3

SIDE：紫音

「いざ、尋常に、勝負！」

紫音が試合開始を叫んだ。

それとほぼ同時に二つの魔力を掌握。

“風よ風よ、雷となりて、我が身体に雷電の如き速さを与えよ”
ライトニング・ドレス

“雷の衣”

“風よ、千里を見通し、電光すらも捉える目となり、我を助けよ”
ホーク・アイ

“千里眼”

詠唱により二つの魔術式を構築する。そして、完成した魔術式に掌握した魔力を注入。魔術式は注入された魔力により具現化する。詠唱を心で行うため、平均的な魔術師で3、4秒かかるこれから工程を、わずか1秒足らずで終了させる。もちろん、それ以外の、魔力の掌握、注入にかかる時間が早いということもあるのだが。

見ると、幸はまだ身体強化の魔術を掛け終わっていないようだ。

このあたりの差が、B+とC-の実力を如実に表していると言えるだろう。

紫音はこれを好機と見て、『コンビクション』を素早く——身体強化により、まさしく雷電のような速さで——ホルスターから抜き出し、頭を正確に狙い、引き金を引く。銃声の後、紫音はわずかな反動を感じた。無論、あくまで試合なので、魔力を固めて作られた模擬弾を使っている。たとえ、命中したとしても、あざやたんこぶができる程度の威力だ。また、弾切れの心配もない。

幸がぎりぎりのところでそれをかわす。

今の弾に反応できたということは、銃を撃つ直前に術式が完成したということだ。

弾をよけた幸は、刀の鯉口を切ったまま、紫音に向かって爆走してくる。

試合の開始時、10メートルほど離れていた2人の距離は、わずか1秒以下でゼロになる。勿論、紫音も黙ってそれを見ていたわけではない。

約1秒間に4発という驚異的な早撃ちでそれを迎え撃ったが、すべて最小限の動作でかわされる。

恐らく、弾はすべて見きられている。最初の1発にしても、いつもの実弾ならば話は違っただろうが、今は模擬弾なのである程度弾速が落ちるのは仕方がない。その代わりに、弾切れの心配がないのでどっこいどっこいだろう。

一気に懷に潜り込んだ幸だが、紫音はもうそこにはおらず、代わりに、弾丸が5つ、両手、両足、頭の位置に飛んできた。

相手がいきなりいなくなった幸は、やや、体勢を崩す。弾丸をよけられないと悟ったのか、両手と頭を狙って放たれた弾を居合で切り、両足に飛んできた物は、わずかに足を移動させることで直撃を回避した。

通常、弾丸を切った場合、切られた弾は二つに分かれる。だが、切られた弾丸はいきなり消えてなくなった。

どうやら、あの刀には対魔力か何かの特性があるらしい。紫音は、一度に位置の違う弾を3つも切ったことに感心しつつ思考した。

~~~~~

SIDE：幸

一方、幸はと言えば、紫音の懐に入る前に居合を使わされたことに驚いていた。紫音は<銃使い>で自分は<剣士>である。相性だけで見れば、圧倒的に自分のほうがいい。しかし、今の状況は互角どころか自分が劣勢なのだ。幸は、どれだけ自分が紫音を見くびっていたかを思い知らされた。

「ハアッ!!」

短い掛け声と共に幸は再び爆走する。刀は抜刀したままだ。また、一瞬で距離を詰めると、左から右に袈裟がけに切る。

だが、紫音はまるでその攻撃が来るのを知っていたかのように、わずかに上半身を反らすだけで回避した。

完全に見切られている。そう感じた幸は即座に距離をとる。が、紫音は飛びすさる幸にやりと笑ったかと思うと、次の瞬間には幸の真後ろに立っていた。

「なっ……!」

「チェックメイトだ小ぞ……つと、あぶねえ……」

驚く幸に紫音は、試合終了を告げ……ようとした。

しかし、幸は紫音の気の緩む一瞬の隙を突いて真後ろに切りかかる。

それは後ろに飛んで避けられたものの、幸は紫音との距離を離すことに成功した。

「まだ、続いてますよね、師匠?」

してやったりというような表情の幸に対して、紫音は苦々しい顔で答えた。

「ああ、勿論だ……。では、此方から行かせてもらうぞ」

そう言うとき紫音は一瞬で幸の後ろに回った。しかし、幸は驚異的ともいえるスピードで紫音に切りかかった。あっさり避けられたものの、幸は自分に何が起きたのか分からない。

「ほお、対応するか……。なるほどアレが発現したのか……。おもしれえ」

紫音が意味深な発言をする。

幸はそれを見殺し、紫音に突っ込んでいった。

~~~~~

SIDE：紫音

幸が抜刀したまま紫音に突っ込んで来た。凄まじい速さだが、今の紫音にはスローモーションで見える。

紫音は右から左に袈裟がけに切りかかってくる幸をわずかに上半身を反らしていなす。

どうやら、見切られていると気づいたのか、幸は即座に距離を取ろうとした。

しかし、紫音にしてみれば甘い。距離を取ろうとする動作も、紫音にはゆっくり見えるのだ。あのまま攻撃を続けていけば、少なくとも紫音には距離をとり攻撃するしかなかったはずだ。

まあ、幸はまだ12歳程度。致し方ないだろう。紫音はそんな年齢の子供と戦っていることに思い当り、思わず笑ってしまった。

ひとまず距離をとることに成功したと思っている幸の真後ろに、紫音は一気に跳躍する。

すぐに幸は気づいたようだが、もう遅い。

「チェックメイトだ小ぞ……つと、あぶねえ……」

いきなり幸が真後ろの紫音に切りかかったのだ。慌てて紫音は幸から距離をとる。

「まだ、続いてますよね、師匠？」

してやったりという幸の表情を見て、紫音は己の未熟さと、幸を見くびりすぎていたことを自覚した。

さっきの出来事は、完全に紫音のミスだ。こんなことでは、Aクラスには程遠いなど自嘲する。

「ああ、勿論だ……。では、此方から行かせてもらっぞ」

そう言うが早いか、紫音は幸の後ろに再び跳躍する。これには反応できないはずだ。

そして、そのまま銃口を突き付けようとした紫音に、いきなり幸が切りかかった。

一瞬、驚いたものの、紫音は慌てず半歩下がり避ける。

一方の幸は何が起こったか分からないと言った様子だ。だが、紫音にはおおよその見当がついていた。

以前、幸の母親の伊織と一緒に仕事をしたことがあるのだが、その時、彼女は明らかに相手の動きを予知しているとは思えない動きをしていたのだ。

後でそのことについて聞くと、彼女は、これは橘家に代々伝わる血統能力で、先読みと似たような動きを可能に言ったのだ。

恐らく、簡単に言えば、戦闘中にのみ発揮される予知能力の様なものだろう。幸が、伊織の子だとすれば、その血統能力を受け継いでいてもおかしくはない。

それに、伊織はこんなことも言っていた。この能力は、11、12歳ごろに発現すると。

今まで眠っていた能力が、幸の危機に発現したのだろう。この能力はかなり厄介だ。だが、今はまだ使いこなせていない。

「ほう、対応するか……。なるほどあれが発現したのか……。おもしれえ」

なら、一気に片を付けるのが一番いいだろう。

そう考えた紫音は、銃声がほとんど重なるほど早く、5発弾を撃った。これはさすがに避けられないはず。そう思った紫音だが、幸はあっさりとかわし、紫音に切りかかった。能力の恩恵か、意識すらしていない様子だ。

さすがの紫音も、これは想定しておらず、慌てて10メートルほど離れた。

お互い、全く動こうとしない——否、うかがっているのだ。相

手の隙を。

次にお互いが動いた時、勝負は決しているだろう。両者とも、そう感じていた。

そうして、3分が過ぎたころ、膠着状態の2人が同時——実際には、幸のほうがわずかに後で——動いた。

~~~~~

# SIDE：幸

紫音は、突っ込んできた幸になぜか驚いて10メートルほど距離をとった。

そのまま、紫音は動かない。幸は、紫音が自分の隙を窺っているのだと理解した。

下手に動いたら、自分がやられてしまう。隙を見せないようにしなければ。

幸は紫音の隙を窺うが、全くと言っていいほど隙がない。幸は、そんな紫音に焦りを感じる。

しばらく——3分ほど経過したとき、ついに焦りが頂点を迎えた。それにより、ほんのわずかな隙ができる。紫音が幸に突進してくる。しまったと思い、幸は慌てて迎え撃つために走った。

幸は、紫音に対して刀の切っ先を垂直に向けて走った。

爺雲流剣術・初めの舞・壺の型——『一鎧』。

爺雲流とは、幸の母である伊織の家系に代々継承されてきた剣術で、幸も幼いころから学び、免許皆伝とは行かないまでも、すべての型を習得していたのだ。

特徴としては、一つ一つの技は大した威力ではなく、連続的に技を繰り出すということが挙げられる。初めの舞から宮の舞、社の舞、そして終の舞へとつながり、それぞれ、壺の型から壺拾の型まであ

る。それらの型は、どの型にもつなげることが可能なのだ。

特に初めの舞は、攻撃の起点ということもあり、かなり強力なものがそろっている。

『壱鎧』は、刀をまるで槍で突くようにして相手に対して突進するというものだ。

幸と紫音が交差する。

刀の切っ先はしかし、紫音に届くことはなかった。

今までとは比べ物にならない速さだったが、まだ足りなかったらしい。

紫音はあっさりとその一撃をかわすと、銃口を幸の後頭部に当てた。

「今度こそ、チェックメイトだ」

わずかな隙もなく、紫音が宣言する。

こうして、2人の試合は幕を閉じた。

~~~~~

SIDE：紫音

わずかな隙を見せた幸に向かって走り出す。半瞬にも満たない間の後、幸が『五月雨』を紫音に向けて走り出した。

幸は今までのスピードとは比べ物にならない。しかし、紫音の目を超えるにはあと少し速さが足りなかった。

スローモーションとまでいかないまでも、十分対応できる速さ。

紫音は身体を捻り、切っ先をかわし、幸の後頭部に『コンビクション』を当てた。

「今度こそ、チェックメイトだ」

気を緩めずに試合終了を宣言した。

~~~~~  
~~~~~

SIDE：紫音

紫音に負けたことが悔しかったのか、幸は若干涙目だ。

「おい、そんなに気落ちするな。C-がB+とここまで接戦を演じることができたってのはかなり凄い事だぜ。お前は絶対強くなる」

そんな幸に紫音は慰めるようにして声をかけた。

「で、でも、師匠に勝たなきゃ弟子入りさせてくれないんでしょう？」

「おいおい、いくらなんでもそれはないぜ。B+がC-に負けたら、教えることがねえじゃねえか……。俺が認める強さなら弟子入りさせてやるっていう意味だよ」

どこかずれたことを言う幸に、紫音は呆れ声で返す。

「え……じゃ、じゃあもしかして、いいんですか!？」

「ああ。お前はジジイの言うとおり、Sクラスも夢じゃねえほどの実力を持っている。これは世辞じゃねえ、保障してやる。俺もつかうかしてたら、あつという間に抜かされちまいそくだ。出藍の誉れなんて言ってられねえよ」

「や、やったあ!」

「ただし、みっちりしごいてやるから覚悟しろよ」

喜ぶ幸に紫音は釘をさす。

「はいっ!」

紫音はこの時日向のことを思い出していた。

自分の力が足りなかったから……。潤也はそんなことはないと言ったが、自分にもっと力があれば、彼女を失うことがなかったのも確か。

ほんの1時間ほど前まで、断る気でいたのに、不思議なものだ。もしかしたら、幸の雰囲気はどこか日向と似ていた所為かもしれない。

今の紫音には以前とは比べ物にはならないほどの実力がついた。もう、同じ過ちを犯すことはないかもしれない。もしかすると、幸の世話をすることが日向への供養になるのかもしれない。それが本当かどうか、分からないが取り敢えず未来に向かって歩いてみようと思った紫音だった。

第四話 師匠と弟子3（後書き）

いかがでしたでしょうか。

視点がころころ変わったため、見にくかったらスイマセン……。
そうでもしなければ、あっさりと終わってしまったので……。

銃対剣なので、あまり迫力ある展開にはなりません。

それに、紫音が幸に苦戦してもおかしいですし。

誤字、脱字、感想お待ちしております。

設定：紫音が使った魔術について

ライトニング・ドレス

『雷の衣』

身体強化の魔術の一つ。

ウインド・ドレス

『疾風の衣』の強化版。

効果は、使用者の行動を速くする。

分素を使うため、難易度は『疾風の衣』よりも高いが、その分効果も高い。

ホーク・アイ
『千里眼』

身体強化の魔術の一つ。

使用者の視力と動体視力を大幅にアップさせる。

第五話 転校生（前書き）

えー、遅くなり申し訳ございませんでした。

言い訳をさせてもらいますと、旅行に行ったり、その準備で忙しかったり、帰ってきた後にも思うように時間が取れなかったり、といったことがあったので大分遅れてしまいました。

本当にスイマセン。

今度からはこんなことが無いようにしなければ。（とか言っても多分同じようなことが起こる可能性が高いです。生温かく見守ってください）

では、第五話 転校生をどうぞ！

第五話 転校生

天音家の朝は早い。

基本的に独り暮らしなので、学校がある日は弁当を作ることになる。

学校までは電車で20分、そこから徒歩で10分。学校の門限は8時30分なので、必然的に8時前には出る必要がある。

そこから弁当を作る時間と朝食をとる時間を考えると、最低でも7時には起きる必要がある。

6時45分。紫音はジリリリリと鳴る目覚ましの音で目を覚ます。
「ふあああ……」

昨日のうちに、魔術で疲れをとっていたので身体はすこぶる良好だ。それに、紫音は朝は低血圧ではないため、寝起きは良い。

紫音はベッドから出ると、朝食を作るためキッチンに向かった。

「うわあ……しまった……。食材がほとんどねえ……。これだと朝食分しかねえな……」

冷蔵庫を開けて悩む紫音の耳に、ジリリリリという音が聞こえてきた。

「あれ……止めたはず……。あ、そうか幸がいたな……。となると、朝食すら足りねえかもしれないねえ……」

再び悩む紫音に、いつの間にか起きてきた幸が声をかける。

「師匠おはようございます！」

幸も寝起きがいいほうなのか、清々しい声であいさつしてきた。

「ああ、おはよう。……悪いが今日は朝食はなしだ。食材がねえ。ついでに言つと弁当も……って言うかお前学校はどうするんだ？」

紫音のあまりにも今更な問いに幸は笑って答えた――

「僕も師匠と同じ、霧原高校に行きますよ。同じ学年になると思います」

爆弾発言とともに。

「は……？ いやいやいやいや。二つほど突っ込むところがあるんだが……。お前いま何歳だ？」

頭がフリーズする紫音。

「12歳ですけど……。大丈夫ですよ、おじいちゃんに勉強を仕込まれましたから。十分着いていきます」

「12歳ってことは、飛び級か？」

「はい」

平然と答える幸に紫音はため息をついた。紫音自身、学年でいつも10番以内の成績をとっているが、ここまでではない。

幸が学校に来たら大騒ぎになるだろう。その光景を想像してげんなりした。

「分かった。お前は転校生の扱いのはずだから、学校に着いたら職員室に行けよ。……って言うかこの時期に転校生ってどうよ」

「分かりました師匠。それに関しては大丈夫ですよ。なんでも両親が死んで、急きょ転校してきたことになってるみたいですから」

「……まあ、突っ込まないでおこう。それと師匠って言うのは学校ではやめろ。じゃないとややこしい事になる」

なんとか師匠と呼ばれることは避けたい。同棲しているのはいずればれるから仕方がないにしても（いや、仕方なくないのだが）、変な関係と勘繰られたらたまったもんじゃない。

何せあのゴシップ魔のことだ、どんなことを噂にされるか分かったもんじゃない。

「えー、嫌です。師匠は師匠ですから」

「頼む。じゃないと同級生から何を言われるか……」

嫌がる幸を何とか説得する紫音。

「嫌です。言わせておけばいいじゃないですか。別に困ることも無いんですし」

いや、困るんだよ！ と心の中で叫びつつ、紫音は粘る。そして、とうとう奥の手を使うことにした。

「いいか幸。これは師匠命令だ。逆らうことは許されないぞ」
あまりにも大人げない事をする紫音に幸からの軽蔑の視線が刺さる。

だが、負けてはならない。負ければ俺の平和な学園生活が亡くなるのだ！

「分かりました。じゃあ、何て呼べばいいんですか？」

紫音は視線に耐えきった。

「紫音って呼んだら怪しまれる。だから天音さんって呼べ」

「分かりました。ところでもう7時30分ですよ？」

話し込んで、時間が過ぎるのに気がつかなかったようだ。

「あー。弁当ないから、今日は食堂が売店で食うぞ。悪いな」

「師匠、今日は短縮授業では？」

「あ……そうだったか。忘れてたな。まあ、ちょうどいいか」

そう、今日は7月9日。水曜日。期末も終わり、夏休みまですべて短縮授業なのだ。紫音はそのことを失念していた。

2人とも顔を洗い、身支度を整える。

家を出るときには7時45分になっていた。

「行つてきまーす」

紫音はドアを閉める。

エレベーターに乗り、エントランスを抜ける。2人はマンションから出て行った。

さて、ただ今の時刻は7時50分。

紫音たちは今電車の車内に居た。

「なんでこんなにすいてるんですか？」

不思議そうに幸が紫音に尋ねる。本来ならば、通勤ラッシュという地獄にもまれていてもおかしくないのだ。

「ああ。この車両は学生車両って言うてな。学生しか乗れないんだ

よ」

「へえ、面白いですね。珍しいんじゃないですか？」

「全国でも実施しているのはこのあたりだけらしいぞ」

と、電車が駅に停まり、この車両にも何人かの学生が乗ってきた。

紫音はそこに見知った顔を見つけ声をかける。

「よお、勇樹、優未。おはよう」

紫音が声をかけたのは、勇樹と優未だった。

向こうも気付き声を掛けてくる。

「おう、おはよう」

「おはようございます、天音先輩。あれ？この子、天音先輩の知り合いですか？」

勇樹が幸に気付き紫音に問いかける。

「いや、俺と優未の同級生だよ。名前は九湯川幸。今日、転校してくるらしい。さつき偶然会ったんだ。なあ、幸？」

「ハイ。初めまして、九湯川幸と言います。よろしくお願いします」
「え、ちよっと待てよ。同級生って、どう見ても小学生ぐらいだろう。１８歳には見えねえぜ」

優未が不思議そうに言う。

「ああ、飛び級だよ。１２歳だそうだ」

「そ、そうなんですか……。僕より年下なのに……」

落ち込む勇樹に紫音が言う。

「まあ、割り切ることだな。天才ってのはいるもんだ」

「うっ、分かりました。でも、何て呼べばいいんですか？ 幸君？

幸？ 幸さん？」

「幸と呼び捨てで構いません。皆さんより年下ですし」

礼儀正しい幸に感心したように優未がつぶやく。

「このぐらいの年の子は、やんちゃなのに……。従弟と大違いだな」
「従弟？」

聞き返す紫音に勇樹が答えた。

「えーと、僕らの従弟で俊秋君って幸君と同じ年の子がいるんです

けど、やんちゃで、やんちゃで……。会ったびに大変なんですよ」
そう言っただけ息を吐く勇樹。よほど迷惑を被っているようだ。
「そう言えば幸。お前、オカルト研究会に入らねえか？」

紫音が幸に言う。

「オカルト研究会ですか？ 名前から大体想像付きますけど……。UFOとかには興味がないですね」

「いや、オカルトって言っても、殆ど心霊研究会みたいなもんだから」

優未が慌てて付け加える。

そう、我らがオカルト研究会はここ数年、心霊研究しかやっていないのだ。そのうち、心霊研究会と名を変えるかもしれない。

「心霊研究ですか……。うーん……」

渋る幸に紫音はそつと耳打ちをした。

「実はな、部員全員が見鬼の才を持つてるんだよ。しかも、行くところ全部がいわゆるつきの場所ばかり……。そろそろ、俺でも手が回らなくなってきたんだ、修行だと思って入ってくれないか？」

「全員ですか……。分かりました。入ります」

「お、入部してくれるか。歓迎するぞ幸。顧問の先生にはあたしから話を通しとくから。放課後に紫音と一緒に部室に来てくれよ」

「部員は何人なんですか？」

「幸を入れると6人だな。それで、こいつが部長だよ」

紫音が優未を指して説明する。

「顧問の先生は？」

幸の質問に今度は勇樹が答える。

「梓山先生。確か、天音先輩の担任でしたよね？」

「ああ。やる気のない社会科の教師だよ」

本名梓山^{わくやま いわう} 賀。担当は社会科の歴史。年齢37歳。身長185センチ。体重52キロ。髪の毛はぼさばさで、ひよろひよろの木の様な印象を受ける。御世辞にもかっこいいとは言えない。ちなみにヘビースモーカーなので運動は大の苦手。恋人、家庭なし。先生方か

らはあまり人気がないが、生徒からはとても人気がある。が、良識のある人間とは言い難く、むしろ、変人の部類に首まで突っ込んで
いる感じた。このあたりが先生方にもあまり人気がない所以だろう。
それからしばらく話していると、目的地——君島駅に着いた。

「おい、幸、下りるぞ」

紫音が幸に声をかける。

時刻は8時7分。この駅から徒歩で10分ほどの距離にあるので、
着くころには丁度いい時間になっているだろう。4人は学校へと歩
き出した。

ただ今の時刻、8時35分。

朝のHRの真っ最中である。丁度今から、転校生の紹介に移ろう
としていた。

「おい、今日は何と転校生が来るぞ」

気だるげな賀の声に教室が一瞬シーンとなる。そして数秒後、ガ
ヤガヤと普段よりも騒がしくなった。

「先生！ 転校生は男子ですか？ 女子ですか？ って言うか女子
であってほしいんだけど！」

紫音の左隣に座っている、貴志きし一が質問した。彼はいわばクラス
のお調子者だ。ムードメイカー 気さくで、誰とでも仲良くなれる。紫音の親友の一
人でもある。

「残念ながら転校生は男だ。一、残念だったな」

賀の声に一が撃沈した。一方で女子のほうはさらに盛り上がる。
だが、彼女たちは知らないのだ。転校生はわずか12歳のちっちゃ
い男の子だということを。ショタコンなら別だが、まあ、ときめく
こともあるまい、せいぜいマスクott扱いが落ちだろう。

「入ってきな」

賀の声に幸が入って来る。

その瞬間、教室の空気が凍った。さっきの比ではない。まあ、誰

だつて茫然とするだろう。自分たちよりもはるかに年下の男の子が入ってきたのだから。

「えーと、九湯川幸です。よろしくお願いします」

幸は茫然とするクラスメイトを尻目に、黒板に自分の名前を書いていく。

丁度書き終わつたところ、ようやく凍っていた空気が溶けだした。

「せ、先生？ この子はなんなんや！？ まさか、先生の隠し子じや……ブゴッ」

一が茶化すように言った瞬間、賀が投げたチョークに当たり再び撃沈した。衝撃で、チョークの粉が辺りに舞う。

紫音は迷惑そうに自分の下敷きでチョークの粉を飛ばした。

「先生、投げるなら粉が飛び散らないようにしてくれませんか？ 迷惑です」

紫音の心配するそぶりもない対応に、一が三度復活した。

「し、紫音！？ もうちょっと心配してくれてもええんちゃうか！？」

「いや、お前殺しても死なないだろ。前に、100キロのダンベルが頭に当たった時も、一週間で学校に戻ってきたし」

「違う！ あれは運が良かっただけや！ 俺かて死ぬか思たわ！」

2人の漫才にしか聞こえないやり取りに、クラス中が笑う。

「はいはい、静かに。その漫才コンビ、漫才の練習もいいがもうちょっと静かにしろ」

賀の声に、やっとクラスが静かになった。

「……転校生の九湯川君は12歳で、飛び級だそうだ。はつきり言つてお前らよりも頭いいから、敬うことだな」

「い、いや、九湯川って呼び捨てで呼んでください。敬わなくていいですから」

幸が慌てたように言う。だが、頭がいいの件は否定しないらしい。まあ、行き過ぎた謙遜は嫌みになるから、逆にいいのかもしれないが。

「九湯川の席は天音の右隣だ。知り合いみたいだからいろいろと教えてもらうといい」

幸は紫音の右隣に座った。

「はい、これで朝のHRは終わりだ。言っても無駄だと思うが、質問はほどほどにな」

そう言つと賀は教室から出て行つた。

そして、紫音の想像した通りにクラスメイトからの質問攻めが始まつた。

「ねえ、誕生日はいつ？」

「血液型は？」

「どの辺に住んでるの？」

「好きな食べ物？」

「何座なの？」

「どうしてこんな時期に転校してきたの？」

「好きな女優は？」

「え、ええっと……」

幸はあまりの質問攻めにかなり面食らっているようだ。

見かねた紫音が間に割つて入る。

「おい、その辺にしとけ。もうすぐ1時間目が始まるぞ」

時計の針は8時38分を指していた。

それに気づくと皆授業の用意を始めた。

キンコーンカーンコーン

授業開始を告げるチャイムが鳴り響く。

確か1時間目は数学だっけ。宿題出てたよな……。

授業が始まつた。

ただ今の時刻12時35分。

放課後。

あれからあの質問攻めを何とか切り抜け、今、部室に向かつてい

た。

オカルト研究部の部室は2階にある。

部室に着き、ドアをノックして中に入る。

そこには賀と勇未がいた。

「あ、先生こんにちは」

紫音があいさつすると賀が振り向きこう言った。

「九湯川。お前ここに入るのか？」

「は、はい。そうですけど……」

「悪い事は言わないが、やめとけ。こんな変人ばかりのクラブ。ほかに沢山クラブがあるじゃないか」

「変人筆頭の先生が何を言ってるんですか。別に個人の自由なんだからどこに入ろうと関係ないでしょう」

賀に紫音が反論する。

「俺が変人筆頭？ ないない、ありえないね。俺は普通の人だ」

どうやら自覚が無いらしい。

「とにかく、幸は入部しますから」

そんな言い争いをしていると、他のメンバーがやってきた。

「こんにちはーって、だれ？」

蓮の様だ。

「あ、もしかして、噂の転校生君ですか？」

どうやら、1年にも話が広がってるらしかった。

そのあと、勇樹、舞が入って来る。

「よし、これで全員そろったな。さて、この子は噂の転校生九湯川幸君だ。なんと、この部に入部することになった。そこで自己紹介というか顔合わせ的な意味で皆に集まってもらった」

ここまでずっと黙っていた優未がしゃべりだす。

「——まずは蓮お前から」

優未は蓮を指名する。

「え、僕ですか。ま、まあいいですけど。初めまして文弥蓮です。気軽に蓮って呼んでください」

蓮が自己紹介を終えると、次は舞だ。

「初めまして。霧原舞です。できれば名前ではなく名字で呼んでください」

そっけなく終わると次は賀だ。紫音は勿論、勇樹と優未は電車の中で済ませているので自己紹介は必要なかった。

「初めまして……というか朝に教室で会ってるよな。ここの顧問をやってる梓山賀だ。賀先生でいい」

そして幸が自己紹介をする。

「初めまして。九湯川幸です。飛び級なので皆さんより年下です。だから幸って呼び捨てで呼んでください」

全員が自己紹介を終えると優未が口を開いた。

「昨日行った廃校舎は何もなかったからな。今度は今週の日曜日に歓迎の意味も込めてここに行こうと思っている」

そう言うつと優未は地図を取り出した。

優未の指先にはこの高校の近くにある、廃病院を指していた。

「——ここは去年、屋上から飛び降り自殺をした患者がいた病院だ。幸は知らないかもしれないが、お前らは知ってるだろ？」

覚えている。その患者の名前は確か……軸火千夏だったか。珍しい名字だったので良く覚えている。

「賀先生も来ますよね？」

と蓮。

「ああ。今回は行けそうだな」

前回……というか廃校舎の時は、親戚が死んで葬式に出なくちゃならないとかで同伴はなしだったのだ。普通に考えたらありえないんだけど、このあたりは割とルーズなのだ。責任問題になったらどうするつもりなんだろうか。

まあいい。今回はもうすでに退魔師が浄化したところなので、俺の出る幕はないはずだ。

そんなことを紫音が考えていると、幸が誰にも聞こえないようにそっと聞いてきた。

「この場所は大丈夫なんですか？」

「ああ。今回は運よくもう浄化済みの所だ。出る幕はなさそうだな」
紫音たちが小声で話し合っていると優未が言った。

「詳しい事は後で連絡するから、今日はもう解散だな」

その言葉を聞いた紫音は「お疲れー」と言つとさっさと出て行つてしまった。

幸も「お疲れ様でした」と言い残し、慌てて後を追った。

第五話 転校生（後書き）

いかがでしたでしょうか。

賀の名前はある小説のキャラをどうにかアレンジして出せないかと作者が四苦八苦した結果でございます。基本は名前を反転させているだけです……。

多分、元のキャラが分かる人はほとんどいないだろうな……。

誤字、脱字、感想待ってます！

第六話 異世界（前書き）

お待たせしました。

前回、大幅に遅れてしまったので最速でお届けします。
それでは、第六話 異世界、どうぞ！

第六話 異世界

そこには何もなかった。

あるのは、はるか先の地平線まで続く荒涼とした大地だけ。

そんな中で2人の人間が対峙していた。背が高い青年と背の小さい、子ども。

長身の片一方は、表面に幾何学模様の様なものが織り込まれている漆黒のコートを羽織り、その手には杖が握られている。頭にかぶっているフードが邪魔で顔は見えない。だが、その風貌は異国の魔術師と呼ぶにふさわしい。

もう一方はジーンパンにTシャツ。まさしく現代っ子といった服装で、この世界にはどうやって馴染まないだろう。

だが、その手には一本の刀。この空の様な蒼穹を湛えるその刀は、どこまでも澄み切っていて、同時にどこまでも血に塗れている。子供には恐ろしく不釣り合いだ。

対峙した2人——紫音と幸は、紫音が投げたコインが落ちた瞬間、動いた。

~~~~~

その後、2人は誰にも会うことも無く校舎を後にした。

「師匠。この後何をするんですか？」

周囲に誰もいないのを確認して、幸が紫音に尋ねた。

「そうだな、まずは帰る前にスーパーによって買い物しなくちゃなんねえな。そのあとは昼飯食って、夕方には早苗さんとの約束があるから、それまでは自由だが……。あ、そうだ。昨日は剣技しか見

てないからな、今日は魔術を見ることにしようか」

そう、昨日の戦いでは、さすがに魔術まで使ったガチの戦いはで  
きなかった。結界が張ってあったとはいえ、マンションの屋上なの  
だ。それにその結界も紫音が維持していたため不可能だったのだであ  
る。

そのため自身の身体強化の魔術しか使わずに、純粹な肉弾戦の実  
力を見たのだ。

「分かりました。でも、そんなことができる場所なんてあるんです  
か？」

幸が聞く。

「あるんだなこれが。まあ、行つてからの楽しみだ」

そう言つと紫音は鞆から携帯を取り出し、何処かへかけた。

「もしもし、紫音だ。久しぶりだな。実は頼みがあるんだが……」

…そうだ、頼めるか？ 弟子の実力を見なくちゃならないんでね。

……ああ、昨日からなんだよ。……おう、それは勿論だぜ。たつぷ  
り吸わせてやるよ。……そうだな……大体、2時半頃に来れるか？

……構わねえよ。じゃあ、後でな」

紫音は電話を切り、鞆の中に仕舞う。そして、後ろを歩いている  
幸に向かって言った。

「さて、準備も済んだし、買い物して帰ろう」

買い物をして家に帰ると、もう1時40分だった。

「師匠。お腹空きましたね」

「ああ。後20分ぐらいしたらできるから、それまでの辛抱だ」

紫音は食材を必要な分だけ残り冷蔵庫に仕舞うと、早速調理を開  
始した。

——20分後、2人の前にはおいしそうな焼きそばが置かれて  
いた。

「いただきます」

2人の声が重なる。

「お、おいしいです!」

一口食べた幸が感嘆の声を漏らした。

「当たり前だ。俺を誰だと思っている」

2人は黙々と食べ続け、20分ほどで完食してしまった。

幸はやや、物足りなさそうにしているが、この後は戦闘が控えているのでほどほどにしておくべきだろう。

食器を洗いながら、紫音は幸に向かって言う。

「準備しとけよ。あと30分もしたら迎えが来るからな」

「迎えですか?」

「ああ。あいつがいないとあそこまで行けないからな」

「あそこってなんですか? さっきから聞いてもはぐらかしてばかりだし……」

「着いてからのお楽しみだよ」

食器を洗い終わると、紫音は自分の部屋で準備を始めた。

——30分後、幾何学模様の真っ黒なコートに身を包んだ紫音が現れた。しかもその手には見たことも無い奇妙な杖が握られている。

素材は木の様だが、表面にはコートと同じような幾何学模様が刻まれていて、一番上の飾りが奇妙だった。梟だろうか、木彫りというようなものではなく、全体がアメジストか何かの翡翠色の宝石でできているようだ。右目にルビー、左目にサファイアが埋め込まれており、左の羽を広げた恰好をしている。

「師匠、なんですかそれ?」

幸が杖を指さし聞く。

「これはな、ウィスタムハーツ『智の守護杖』つーもんだ。俺が作ったんだぜ」

幸が何か言おうとしたが「ピンポン」という音が響き、遮られてしまった。

「お、丁度来たみたいだな」

そう言うつと紫音は玄関まで行き、ドアを開ける。入ってきたのは、

ちっちゃい女の子だった。幼女と言ってもいいかもしれない。金髪碧眼で、年齢は6、7歳ぐらいに見える。傷一つない柔肌は雪のよう<sup>に</sup>白い。女性からは羨望の眼差しを集めそうだ。

「は……？」

思わず幸の口から間抜けな声が出た。

いつから師匠は犯罪者になったのだろう……。なんて呆けたことを幸は考えていた。

どうやら、頭がフリーズしているようだ。開いた口が塞がらない幸を尻目に紫音は幼女を案内する。

数十秒後幸は我に返り、紫音の後を追った。

「ちよつ、師匠！ この子は誰ですか！？」

「うるさいのお。その口を閉じる。妾の名はアリカ。おぬしが紫音の弟子か？」

幼女が発した容姿からはかけ離れた言葉使いにあっけにとられる幸。

代わりに紫音がアリカと名乗る幼女に返事をした。

「ああ。九湯川幸だ。それでも見込みはあるんだぜ」

「ふん……。まあ良い。それで、今回はどこに飛べばよいのじゃ？」  
「そうだな……。なるべく遮蔽物無いようなところにしてくれ」

紫音のリクエストにアリカは了承したようだ。

彼女は懷からシートの様なものを取り出し、敷いた。縦、横が2メートルの正方形のシートにびっしりと魔法陣らしきものが描かれている。あまりにも細かいソレは恐らく、ミリ単位で刻まれているのだろう。2人がその中に入る。

「おい、呆けてないでさっさとこっちこい。お前が来ないと始まらないだろ」

紫音はそう言つて幸をシートの中へ入れる。

「準備はいいかの？ では行くぞ！」

そう言つと彼女は厳かに呪文を唱え始めた。先ほどまでとはまるで別人の様な威圧感<sup>プレッシャー</sup>を放っている。

「wind wind wind. The reason for irrationality is untied, and it doesn't recur to the great one's neighbourhood of the got which knows everything. It is untied from fettered in the world, and know the world that. eternality. becomes it. I am those which transcend it. It does exceeding the omniscience Almighty God and the one. Therefore, it reduces to the one with meaningless fettered and reason. Now I go over! Let, transcend the world! (風よ、風よ、風よ。不条理の理を解き放ち、すべてを知る神のひざもとへと回帰せん。世界の枷から解き放たれ、悠久なる世界を知れ。我は超越者。全知全能の神を超えし者なり。故に枷も、理も無意味なものへと成り下がる。さあ、我は渡ろう！世界を超越しよう！）」

「すごい……！」

幸は思わず呟く。呪文自体は理解できなかったものの、高度に洗練された呪文は魔力が込められていて、もうすでに周りの空間に影響を与えていることは幸にも分かった。

「――『The world path』――『世界行路』」

「<sup>キワード</sup>アリカが始動語を唱え終わると同時に、膨大な、軽く空間そのものを歪めてしまうぐらいの魔力が魔法陣へと注がれる。魔力を注がれた魔法陣は眩いほどの光を放ち始める。

そして、今度こそ空間が「ぐにやり」と歪んだ。唯一正常なのは魔法陣の中だけだ。

「うわっ」

「この中から出るなよ。世界の狭間に落ちたら、死ぬぞ」

紫音が幸に忠告する。

その間にも歪みはどんどん大きくなっていく。最初は辛うじて周りの風景は認識できたが、今はもうぐちゃぐちゃに色を混ぜた絵の具を塗りたくったような景色しか見えない。長い間見ていると酔って気持ち悪くなりそうだ。

歪みが最大に達した時、突然パアッ明るくなったかと思うと、次の瞬間にはまるでサバンの様な荒涼とした大地が広がっていた。サバンナと違うのは、草木も何もないところだろう。

「えっ……。な、なんですかこれ!？」

仰天する幸。数分前は部屋だった風景は跡形もない。

「ここは異世界じゃ。紫音から何も聞いてないのか？」

「ああ、教えてねえからな。着いてからのお楽しみってやつだ」

「悪趣味じゃの。全く……」

「い、異世界……?」

「そうじゃ。そなたらは妾の魔法により世界を渡ったのじゃ。貴重な体験じゃぞ」

「世界を、渡った……」

幸が茫然と呟く。

「アリカは世界で3人しかいない魔法使いだよ」

魔法。それは魔法の原型。その力は魔法よりもはるかに強力だ。

なにせ魔法は“魔”の“術”であるのに対し、魔法は“魔”の“法”なのだから。魔法は魔法の劣化版。劣化版であるが故に、広く普及した魔法とは違い、魔法は難解であるが故にごく一部のものにしか継承されなかった。

魔法使いとは、魔の律法に則り現象を引き起こす者たちのこと。魔術師とは比べ物にならない能力を持ち、神の域にまで達した者もいるという。

「さて、幸、お前の魔法を見せてもらおうか」

紫音がいまだ茫然とする幸に呼び掛ける。

「は、はい！」

その声で我に返った幸は勢いよく返事をする。

「ふむ。妾は遠くで観戦させてもらうとしようかの」

そう言つとアリカは何処かへ飛んで行ってしまった。飛行魔術でも使っているらしい。

紫音と幸はお互いに十メートルほど離れる。

「いいか、俺がコインを投げるからそれが地面に落ちたら試合開始だ。ただし、それまでは魔術の詠唱をしないこと。いいな？」

「はい」

幸が刀を――『五月雨』を抜く。対して紫音はロープのフールドをかぶり、杖を構えたまま。2人の間に張り詰めた空気が漂う。お互い微動だにしなかった。風が吹く。

「ピイン」とコインをはじく音。紫音が投げたコインが地面に衝突する。

「チャリン」という音が響き渡った。

魔術師の戦いが始まった。

「さて、幸とやらの実力はどの程度かの……」

遠くで魔法使いが呟いたが、2人には聞こえなかった。

## 第六話 異世界（後書き）

いかがでしたでしょうか。

ロリで最強はもはや定番ですね。作者もそれに乗っかってみました。

英語の詠唱を書くのに2時間ぐらいかかりましたが……。

次回は魔術がバンバン出てきます（多分……）、お楽しみに！  
誤字、脱字、感想お待ちしております。

## 第七話 魔術師VS魔法使い（前書き）

お待たせしました。

あまり魔術は出ませんでした。期待してくださっていた方は（いるのかな？）ごめんなさい。

それでは、第7話 魔術師VS魔法使い、どうぞ！

## 第七話 魔術師VS魔法使い

「チャリン」とコインの落ちる音がする。

その音を認識した紫音は、魔力を掌握、即座に詠唱を開始した。

「すべてを飲み込む虚無よ、四象を包括し、何人たりとも侵せぬ聖域を作り出せ！」  
エレメンタル・スクエア  
「四象結界」

詠唱を終えると同時に紫音の足元に正方形の魔法陣が現れる。四隅に火、土、風、水を象ったもので、中心には何も描かれていない。そこから立方体の形をした無色透明の結界が形成された。この間わずか4秒。この結界はかなり高レベルの結界で、一般的な魔術師だとそもそも使えないか、使えても15秒近くかかる。それをわずか4秒ほどで行使して見せたのは紫音だからこそだろう。

だが、それでもぎりぎりだった。

結界が形成された瞬間、間一髪のところまで火弾が衝突する。あと一瞬でも遅ければ、火弾は紫音にあたっていただろう。

紫音が詠唱をしている間、幸は何もせず、ぼーっとしていたわけではない。

自身が持つ、最高の早さで攻撃魔術のための詠唱をしていた。

「火よ、その身に宿せし破壊を解き放ち、辺りを蹂躪せよ！」  
ファイアー・バレット  
「火散弾」

幸の目の前に魔法陣が浮かび上がる。中心に炎を象ったソレは無差別破壊を繰り出す炎の散弾銃。その銃口から火の散弾がばら撒かれた。

だが、一瞬足りない。寸前で構築された結界に阻まれ、紫音に届かなかった。

幸は「ファイアー・バレット火散弾」への魔力供給を止め、紫音に対して円を描くように左に走り出した。強化していない身体ではそれほどスピードは出

ないが、それで十分だ。体内の魔力を掌握し、詠唱を開始する。

「土よ、眠れる大地を騎士の槍と成せ！」  
クロード・ランス 『土撃槍』」

紫音の足元の魔法陣に重なるように別の魔法陣が現れる。中心には岩が描かれていて、そこから土の槍が何本も飛びだそうとするが、すべて結界に阻まれた。

「駄目か……。なら、これで！」

幸は走るのをやめ、再び詠唱を開始する。

「火よ、吹き荒れる嵐に乗せて、破壊の限りを尽くせ！」  
フレイム・トルネード 『火竜巻』」

これは幸にできる最高の攻撃魔術。風と火を分素を発生させずに使う複合魔術というものだ。分素よりも難易度は低いものの、かなりの集中力を必要とする。

魔法陣が現れ、魔力を注入する。炎をまとった竜巻が紫音に向かっていった。

「くっ……」

幸は苦悶の声を漏らした。自身の魔力を根こそぎ持っていける感覚。身体中から力が抜け、意識が一瞬朦朧となる。さらに、その意識の中で魔力を暴走させないように制御をしなければならぬ。この技は幸の魔力保有量では魔力が満タンの時に使わないと、途中で魔力切れを起こしたり、暴走させたりしてしまう。だが、今は7割程度の魔力しかない。本来なら、やっては行けない行為だ。魔力切れを起こすならまだしも、暴走させたら命の危険がある。それでも、幸は使用に踏み切った。持てる力を全力で相手にぶつける。手加減はしない。たとえどんなに格下でも相手を侮辱することになるから。

「いっけええええ！」

炎の竜巻が紫音を襲う。結界とぶつかり激しい音を立てた。突風が幸の頬を撫でる。

「これでやったはず……」

余波で、もうもうと砂塵が舞い上がる。1メートル先も見えない

ほどだ。

やっとおさまった時、そこにあっただのは――

「そんな……」

傷一つない結界に身を守られた紫音の姿だった。

「こんなもんか……。分素を使えないのは痛いな。魔力保有量はそこそこ。改善の余地ありつてとこだな。まあ、気にすんな。肉弾戦はともかく、魔術で上回られたら俺の立つ瀬がないからな……。って、おい！　大丈夫か！？」

気が緩んだのか、幸は眠るように気絶してしまった。

「――つたく、魔力がすっからかんじゃねえか……」

幸の寝ている姿は、同世代の子供らしいあどけない姿だ。それを見て紫音は思わず笑ってしまった。

「幸せそつに寝てんじゃねえか……。一体誰が、こんな血なまぐさい世界にあどけない子供を引きこんだかねえ……。そう思わねえか、アリカ？」

「ふん、気付いておったか……。さすがじゃの。完璧に気付かれないようにしたのじゃが」

いつの間にか、紫音の近くまで来ていたアリカが答える。今、彼女が言ったように気配も、音も、魔力もすべて隠してきたのだ。それを見破る紫音は只者ではないという査証だろう。

「――おぬしの言う通りじゃ。だがの、きれいごとばかりでは世の中は回らんのも分かっておるじゃろう。それに、おぬし自身もこれぐらいの年でこの世界裏の世界に入ったのじゃろう？　幸のことは言えないじゃろうに……」

「それは……「自分は関係ないとか言うでないぞ？」うつ……。分かった、分かった。降参だ」

紫音が降参だと両手をあげると、アリカは満足げに言った。

「ふん、妾に勝てるでも思っただか。……。そうじゃ。一つ、余興といこう」

思いついたようにアリカが言う。

「余興？」

「うむ。おぬしのアレをもらう前に、試合でもしようではないか」

「アレって……。試合？ いや、まあ、いいけどさ……」

訝しげにアリカを見つめる紫音。経験上、こう言った場合はいつも紫音が割を食うのだ。

「アレと呼ぶしか無かるう。作者の都合で「やめる。メタ発言はやめる。割とお堅い小説を目指してるんだよ」……おぬしのほうがメタな発言をしてるような気もするが……。まあ良い。それで、じゃ。おぬしが全力で死合いをしてくれば、妾も興が乗るでの」

「あのー、アリカさん？ 字違いませんか？」

恐る恐るといった様子で紫音が尋ねる。

「違わないぞ。妾が本気を出せる（出して死なない）数少ない相手だから。まあ、せいぜい死なん程度に頑張るのじゃの」

あつさりとアリカは言うのと、紫音から距離をとり、こう言った。

「さあ、早くするのじゃ。それとも、いきなり襲われたいのかの？」  
アリカがぞつとするほど妖艶な笑みで紫音に語りかける。

紫音は目の前のアリカが、ライオンに見えた。いや、ライオンですら生易しい。ティラノサウルスぐらいの迫力だ。草食恐竜大好物を前にした肉食恐竜の笑み。紫音の背を冷や汗が滝のように落ちていく。

「わ、わかった。分かったからその笑顔をやめろ！」

紫音の心の叫びを気にするそぶりも無く、アリカが言った。

「早くせいと言っておるじゃろう。早くいたぶ……死合いをしたくてしょうがないのじゃ」

「今いたぶるって言いかけたよな！ はあ、分かったから……」

紫音はため息をついて離れると、深呼吸をひとつ。

それだけで雰囲気が変わった。

今までののほほんとした雰囲気はどこへやら。

そこにあるのは歴戦の戦士の空気。

研ぎ澄まされたその気配は、対峙するものに強烈な威圧感と恐怖プレッシャーを与える。

紫音が本気になった証拠。それは逆に、本気になれば魔法<sup>ア</sup>使いを倒すどころか、自分が殺されるということ。それだけで、ア  
リカがどれほど強いのが把握できる。

「行くぞっ！！」

紫音はそう言うが早いか、その場から消えた。

魔術による加速、ではない。文字通り消えたのだ。

「転移術式……か。ふん、転移のエキスパートたる妾に<sup>本領</sup>転移で挑もうなど愚の骨頂！ 身の程を思い知らせてくれるっ！！ そこお！」  
膨大な魔力の集束。直後アリカの手には直径30メートルはある  
うかという巨大な火球が現れていた。

アリカの丁度真後ろ、100メートルの場所に紫音は転移して  
いた。だが、すぐに感知され、その火球が飛んでくる。プロ野球並の  
速さで。

「ちいっ」

余裕を持つて転移してかわしたつもりだが、ロープがわずかに焦  
げていた。そのまま火の玉は飛んでいき、地面にぶつかりクレータ  
ーを作った。通った後の地面は溶けてマグマのようにドロドロにな  
っている。

「『太陽球』の完全詠唱破棄……。どんだけでたらめなんだよ！  
最上位魔術の一つだぞ！？」

紫音は転移魔術は得意ではない。今までの転移はすべて手に握つ  
た、杖の効果だ。この杖が無ければ、今頃紫音は三途の川で水浴び  
を楽しんでいるところだろう。

『<sup>ウィスタムハーツ</sup>智の守護杖』は紫音自らが手がけたものだ。杖に転移用の術式  
を組んであり、持ち主の魔力を使い使用者を中心とする半径300  
メートルの範囲を、魔力を通し場所をイメージするだけで転移する  
ことを可能にする。

アリカの攻撃はかわすことができるが、魔力を消費する。このま  
まではジリ貧だ。

「仕方ねえ、一気に決める！」

紫音は腹をくくると、アリカに気づかれぬよう右斜め後ろに転移する。

そして、詠唱を開始した。

「——水よ、風よ、そこは静止した世界。何人たりとも動くことを許されぬシヴァの領域。我が魔力を食らいて、その糧と成し、氷の女王に逆らうものに永遠の静止を与えよ！」  
「シブリートフリース 絶対零度」

紫音を中心とした半径200メートルの魔法陣が形成された。あまりの大きさに、紫音からでは全体を把握できない。アリカが気づいて紫音のほうへ向くが、もう遅い。

紫音は持てる全魔力をそこに注ぎ込んだ。

魔法陣がひときわ大きく輝いたかと思うと、次の瞬間、地面が氷で覆われていく。

「こんなもの、転移すればしまいじゃ！」

アリカが転移しようとした瞬間、紫音は叫んだ。

「『智の守護杖』、解放！」

杖から魔法陣が展開される。直径が1キロメートルはあろうかというそれは、当然のごとくアリカも呑み込んでいた。

「なっ！ 転移ができぬじゃと!？」

異変に気付いたアリカが声をあげる。

「——ぬっ、しまっ——」

その瞬間、アリカは氷の彫像と化していた。紫音の魔術にやられたのだ。

『ウィスタムハーツ 智の守護杖』の能力は、何も転移だけではない。その逆、つまり転移を阻害する能力も備わっているのだ。

「これで……終わりだ……」

紫音も幸と同じように、魔力を消費した疲労から気絶してしまった。直後、魔法陣が掻き消え、異様な冷気が無くなった。

——数秒後、氷の彫像に一筋のひびが入った。そこからだんだんひびが大きくなっていく。そして、ついにひびが頂点に達し、中から人の形をしたナニカが出てきた。ソレはまるでゾンビのようで、

いたるところに致命傷を負いながらもまだ生きていた。

ソレが地面に身を投げ出すと、まるで巻き戻しのテープを見ているかのように傷が塞がり始めた。筋肉や、神経、果ては脳みそまでが少しずつ治っていくのは相当グロテスクだ。

やがて、すべての傷が塞がった時、そこに居たのはアリカだった。ただし、全裸である。

彼女は、服を作り出すと、こう呟いた。

「かかった。久しぶりに死んだぞ紫音。やはりおぬしは最高じゃ」  
そして、気絶した紫音と幸を抱きかかえると、この世界から消えた。

## 第七話 魔術師VS魔法使い（後書き）

いかがでしたでしょうか。

幸との戦いでは、紫音が圧倒的すぎるので攻撃を控えてもらいました。

アリカとの戦いはあっさりしすぎたかな？と反省です。

でも、長引けば長引くほど紫音が不利になるので、仕方がないんですけどね。

今回は、限りなく露骨に匂わせてきたアリカの正体が暴かれます。

お楽しみに！

誤字、脱字、感想待ってます！

設定：今回出てきた魔術について

エレメンタル・スクエア

『四象結界』

結界魔術の一つで、上級魔術。

術者を中心とした正方形の結界。

属性は『無』だが、『火』、『土』、『風』、『水』の属性を扱うため、使える魔術師はほとんどいない。

上位魔術だが、最上級魔術を防ぐほど結界は強固。

ファイアー・バレット

『火散弾』

攻撃魔術の一つで、中級魔術。

属性は『火』。

魔法陣から火を散弾のようにばら撒く。

かなりポピュラーな魔術で、威力は折り紙つき。

1対1よりも、1対多の場面で重宝する。

クロード・ランス

『土撃槍』

攻撃魔術の一つで、中級魔術。

属性は『土』。

任意の場所の地面から、土でできた槍を生やす。

防御系統の魔術が多い土属性の中で、数少ない攻撃魔術。さらに、威力も高いため、『土』しか適性がない魔術師に重宝される。

フレイム・トルネード

『火竜巻』

攻撃魔術の一つで、上級複合魔術。

属性は『火』と『風』。

炎をまとった竜巻を出現させる。

複合魔術とは、二種類以上の属性を分素を発生させずに使う魔術のことで、飛躍的に威力が高くなっている。だが、魔力消費が激しいため、使いどころが難しい。

コロナ  
『太陽球』

攻撃魔術の一つで、最上級魔術。

属性は『火』と『風』の分素である『炎』。

巨大な太陽の様な火球を放つ。

その中心温度は10万度を超え、表面部分の温度も優に2万度を超える。

ファイアー・ボール

『火球』系統の魔術では最強で、かすっただけで、消し飛ぶほどの威力。

コンブリートフリーズ  
『絶対零度』

攻撃魔術の一つで、最上級魔術。

属性は『水』と『風』の分素である『氷』。

術者を中心とする魔法陣内の領域を絶対零度まで下げる。ちなみに、術者には影響はない。

氷の精霊女王シヴァの住む山を再現したもので、魔法陣の大きさは、術者の魔力量で決まる。

過去には、都市を丸ごとこの魔術で壊滅させた魔術師もいるとか。

## 第八話 吸血鬼（前書き）

本当にお待たせして申し訳ありません。

ただ今夏期講座中として、思うように時間が取れず、大幅に遅れてしまいました。

それでは、第八話 吸血鬼、どうぞ！

## 第八話 吸血鬼

「おい、起きんか。起きんか！」

頬をぺちぺちと叩かれる。だんだん激しくなっていき、ついに頭をげんこつで殴られて、ようやく紫音は覚醒した。

「ここは……」

「おぬしの部屋じゃ。わざわざ妾が運んでやったのじゃぞ」

辺りを見回すと、確かに、紫音の家だった。あの殺風景な光景はどこにもない。

「そうか、ありがとな。えーと、幸は？」

「あやつならソファに寝かせておいた。今もまだ眠っておる」

「そうか……。そう言えば、勝負はどうなった？ 魔力の使い過ぎで、気絶したのは覚えてるけど」

「ふん。おぬしの勝ちじゃ。妾は1度死んだからの」

苦々しいといった様子でアリカが言う。

「それで、吸うのか？ 俺の血」

「勿論じゃ」

「今は勘弁してほしいんだけどな。魔力なくてふらふらだし」

紫音はベットから身を起すが、妙な倦怠感が身体中を重くしている。あれからしばらく時間がたったため、多少なりとも魔力は回復しているものの、しばらくはあまり動きたくない。

アリカは吸血鬼だ。それも真祖クラスの。そのため、日中に歩いても全く問題はない。そればかりか、ニンニク、銀、十字架その他もろもろの吸血鬼に効くとされるものが全く効かない。

だが、吸血鬼なので、定期的に血を吸わないと死んでしまうのだそう。血を吸うだけなら誰でもいいのだそうだが、血にも良し悪

しがあるらしく、一般人の血はまず過ぎて飲めないらしい。魔力を持つている人間の血が一番美味なんだとか。魔力が多ければ多いほどいいらしい。そこで、アリカと仲のいい紫音の血を欲しがるというわけである。

アリカは吸血鬼と言っても、教会に無害指定されているので、魔術師や退魔師に狙われることはない。

無害指定とは、西洋の退魔師を統括する組織である『教会』や、東洋の退魔師を統括する『寺院』から魔物や妖怪に対して出されるもので、この指定を受けた魔物や妖怪は人間に対して無害である、ということを経明してくれるものだ。

これを持っていると退魔師から狙われることはなくなり、同じ退魔師として扱われる。その代わり、人間を傷つけた場合は容赦なく追われることとなる。

「それなら、妾お手製のポーションをやろう。使ったことがないから分かんが、かなりの魔力を回復してくれるはずじゃ」

「はあ！？ ポーションを作った？ おいおい、レシピは公開されてないはずだぜ？」

ポーションとは魔力を回復してくれる魔法薬のことだ。複数の材料を調合して作り出すのだが、その配合の比が恐ろしく細かい。2対1の様な整数比ではなく、小数第10位近くまで綿密に計算せねばならないのだ。そのため、レシピを知らないと作ることすらできない。

ごく一部のものしかその調合のレシピは知らず、そのため、非常に高価なのだ。

「妾を誰だと思っておる。1000年の時を生きし吸血鬼じゃ。レシピぐらい知っておるわ。第一、そのレシピを考えたのは妾じゃ」

「……マジですか……」

開いた口が塞がらない紫音。改めて、目の前の吸血鬼がどれだけ規格外なのか思い知らされた。

「さあ、飲め。ただし、味は保証せんがの」

アリカが試験官に入った水色の液体を紫音に押し付けてくる。  
紫音は言われるがままに差し出されたそれを飲み込んだ。

「——ッ!? お、オエエエ!!! ま、まずっ!」

口の中に入れた瞬間、鼻を突く腐敗臭。吐き出しそうになったソレを、慌てて嚥下する。と、同時に強烈な苦みが紫音を襲った。

「み、水っ! 水をくれ……!!」

アリカがさつと水の入ったコップを差し出す。こういう事態を見越して用意していたらしい。やたらと用意のいい吸血鬼である。

紫音はコップを一気飲みした。口元から、あふれた水がツツと顎を伝ってベツトにしみを作る。だが、気にするそぶりも無く、紫音は水を飲み干した。

「はあ、はあ、はあ……。うええ。まだ味が残っていやがる。何を混ぜたらこんな味になるんだ……? 決めた。俺はもう一生ポーシヨンは買わない!」

「心配せんでも、お目にかかる機会はなかるうて。それで、どうじや? 妾お手製のポーシヨンの効果は。普通のものより、1/5ほど効果が高いはずじゃ!」

紫音は魔力が8割がた戻っているのを確認した。なるほど、まずいだけあって効果は相当高いらしい。

「ああ。もう大丈夫だ。魔力も8割ぐらい回復してる!」

「そうか。それでは、遠慮なくそなたの血を頂くことにしようかの!」  
アリカは、カカカツと笑うと紫音の首元に近寄り、口をアーンと開けた。みると、犬歯が異常なほどがっついてる。

「いただきます!」

西洋の魔物の総大将ともいうべきものが、「いただきます!」なんておかしいような気もしなくはないが。

とにかく、アリカは紫音の首筋に「ずぶり」と牙を刺した。

「くっくっ!!」

紫音の口から思わず声が漏れた。

ただし、痛みから来るものではない。

むしろ真逆である。それは快楽から来るものだ。紫音の顔が恍惚とした表情に包まれる。

それはなぜか。

吸血鬼の吸血には3種類ある。

生殖を目的としたものと、食事を目的としたもの、そして、攻撃を目的としたものだ。

前2つは、吸血時に相手に対して性的な快感を与える毒素を注入する。これは、相手に苦痛を与えないようにするための配慮であるといえよう。だが、その威力たるや凄まじく、大人の女性でも失神する者もいるとか。ちなみに、身体には毒素は悪影響を及ぼさない。最後の一つは、おもに人間に害をなす吸血鬼が食事をとるとき行うことが多い。

攻撃と食事。一石二鳥というわけである。

今度は逆に、苦痛を増加させる毒素を注入するのだ。この毒は人体に有害な神経毒で、身動きを取れなくさせる。

当然、アリカに紫音を害しようという意思があるはずもなく、そして、紫音にはその快感に流されるほど精神が弱くはないので、アリカに血を吸われるたびに生殺しの目に遭っているのだった。

「ごくつ。ごきゅつ」

いつもなら、紫音がせいぜい貧血になるまでぐらいしか吸わないものの、今日は勝手が違うらしく、中々血を吸うことを止めない。

「お、おいっ！ そろそろやめろ！ 俺が死ぬわ！」

慌てて紫音が止めようとするが、中々止めないアリカ。よく見ると目が完全に闭っていた。

ついには引きはがそうとするも、今の状態では力が出ない。

「——い い か げ ん に し る——！」

このままでは死ぬ。

そう悟った紫音は全速力で魔術を行使する。

「火よ、破壊の衝動を解き放て！ ファイアー・ボール 火球」

紫音の前に現れた魔法陣から、人の顔面ほどの大きさの火の玉が、

密着しているアリカに放たれる。

アリカは勢いよくノーバンでぶっ飛び、部屋の壁にあたって停止した。火球が直撃したところは、酷い火傷になっている。だが、ものの数秒で完治してしまった。

吸血鬼恐るべし、である。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

この魔術は下級魔術だが、至近距離で放ったのと紫音の力量が高かったため、軽く中級魔術並の威力になっていたようだ。

どうやら、アリカは気絶してしまったらしい。静かな寝息を立てて、すやすやと眠っている。

「なんで、暴走したんだ？　そういや、一回死んだって言ってたな……。そのせいかな？」

もし、紫音の考えている通りだとすれば、紫音に非があるわけだ……。どうにも非難しづらい。

「——まあいい。取り敢えず運ぶか……」

と呟き、アリカを運ぼうとするが、紫音は貧血。それも重度なのである。紫音にアリカが運べるはずもなく、強烈なめまいと、頭痛にアリカを抱いたまま気絶しそうになる。薄れゆく意識の中で、紫音は呟いた。

「幸に見られたら、絶対に誤解されるよな……。嫌われるのは勘弁したいな……」

結局、最後に親馬鹿ならぬ、師匠馬鹿を見せる紫音だった。

「う、うん……」

どこからか、おいしそうな匂いが漂ってくる。そんな匂いにつられて、紫音は目を覚ました。

一瞬、ここが何処だか分からなくなるが、すぐに気絶する前のことと思い出した。

「——この匂いはカレーか？」

「そうじゃ。幸が作っておる」

返事するのはアリカ。紫音は彼女がいるとは思わず、驚いて振り返った。

「もう大丈夫なのか？」

「うむ。すまんかったの。あまりにも腹が減っていたもので。ついつい夢中になってしもうた」

アリカが申し訳なさそうに言う。

「いや、別に気にしなくていいよ。もう、別に何ともないから」

そうは言うものの、紫音はまだふらふらである。

「今夜、予定がなければ、とっておきの場所へ連れて行きたいのじやが……」

「確か、今晩は……駄目だ。早苗さんの所に行かなきゃならない。って今何時だ!？」

昨日の約束を思い出して、紫音はアリカに慌てて尋ねた。

「今は5時過ぎといったところかの」

「はあ。良かった……。あの人約束を破るとめちやくちや怒るからな……」

紫音は、安堵のため息を吐いた。約束の時間は6時半なので、1時間ほど余裕がある。

前に一度、約束をすっぱかしたことがあるのだが、その時は3時間、ずっと正座で説教された。あれはトラウマになっている。さらに早苗は紫音の知る限り、一度も約束を破ったことがないのだ。

紫音は立ち上がると、台所の方へふらふらとおぼつかない足取りで歩いて行った。

奥行きが4メートルほどのキッチンに幸がいた。

「幸。ありがとな」

「あ、起きたんですね！ わっ、ふらふらじゃないですか！ まだ

寝てくださいよ」

「いや、大丈夫だ。何か食ったらすぐに元気になる。最悪、治癒魔術を使えばいいからな」

基本的に、血が足りてないだけなので、何か食べればすぐに良くなるはずである。

「——お前、料理できたんだな」

「はい。師匠ほどじゃないですけど。おじいちゃんの料理の下手さ、知ってますよね？」

「ああ。分かる。ジジイの料理は兵器だよ。本気で死にそうになったことがある」

ジジイ——つまり潤也のことだが、退魔師としての優秀さと反比例するように、家事スキルが0を通り越してマイナスまで行っている。

掃除をすれば逆に散らかり、食器を洗えば皿が割れ、料理を作れば殺人兵器が出来上がる。

そのため、必ず世話係が一人必要なのだ。また、潤也の弟子になれば世話係として扱われるので、家事スキルが上昇するという嬉しい（悲しい？）おまけが付いてくる。

2人は同じ苦悩を味わった者同士、がっちりと握手をした。

「でも、このキッチン、ホント使いこまれてますね……。それでいて、全然汚くない。流石です！ あ、ちよっと味見をしてもらえませんか？」

「どれどれ……。なっ！ 完璧じゃないか……。俺のより旨い……」

紫音が驚いたように言った。

「えへへ。おじいちゃんに唯一誉められたんです。これは『紫音のより旨い』って」

「あー。あのジジイ、俺の料理で妙に舌が肥えてやがるからな……。ほかの料理もできるんだろ？」

「勿論です。中華、和食、洋食なんでもござれですよ」

「今度、作ってくれよ」

「はい！」

2人は気づいていない。こんな会話、普通の男子高校生はしないということ。あまりにも2人にとっては当たり前すぎるので、気付かないのだ。

「あ、そうそう。早苗さんの所に6時半ごろ行くから。だから、カレーもさつさと食っちゃおう」

「そうなんですか。分かりました。アリカさんをお願いしますか」

「おーい、アリカ。御飯だぞ」

「わかった。今行く」

食卓には紫音、幸、アリカ。彼らの前には美味しそうなカレーイス。

「いただきます」

―― 30分後。

三人の前には空になった皿が三つ。

「中々美味じゃった。紫音のより旨いのではないかの」  
アリカが感想を言う。

「そう言えば、アリカ。お前この後どうするんだ？」

「ふむ。明日イギリスに飛ぶ。なんでも、ルーフェンス魔術学院の校長から直々の依頼があるそうなので」

「ルーフェンス魔術学院ってあの……？しかも校長直々とは、流石Sランクだな」

紫音が感心したように言った。

「魔術学院ってなんですか？」

幸が質問する。

「ああ、俺が説明しよう。まあ、簡単に言えば、魔術を学び、退魔師を育成する学校だ。ルーフェンス魔術学校ってのは、その中でも特に優れた魔術師を輩出している学校だよ。丁度、日本の東大みたいなもんだな」

「それじゃあ、すごいじゃないですか！」

幸が吃驚したように言うが、アリカは、日常茶飯事じゃと面倒くさそうに言う。

「校長のハイベルトは、妾の教え子じゃったのじゃよ。いい年していつまでも師匠、師匠と煩くてかなわんわ」

紫音も校長の写真を見たことがある。太ってこそいないものの、頭は禿げており、まさに典型的な中年といった風貌だった。確か、年齢は48歳だったか。

紫音はそんな中年が、見た目小学生低学年の幼女に師匠、師匠と泣きつく姿を想像した。あまりにもシニールというか、見ているものの笑いを誘う。

ただし、事情を知っているものに限るが。一般人が見れば、間違はなく変質者扱いされて、檻の中に直行だろう。

「――すまんが紫音。また部屋を貸してくれんかの？」

「分かった。お前はいつ来るか分からんから、いつも部屋は空けるよ。そうだ、朝食は要るか？」

「そうじゃの……。貰おうか。折角じゃからの」

幸はあまりにも自然にアリカが停まることが決定していくのを見て、こう言った。

「お二人って、恋人なんですか？」

幸は純粹である。もうちょっと上の、紫音ぐらいの年齢なら、あんなことや、こんなことをヤツちゃってるんじゃないかと疑う所だが、幸にはそういった知識はあまりない。したがって、男女が一つ屋根の下で寝泊まりする＝恋人である、という図式が成り立つのだ。

そのあたりの機微を感じたのか、アリカと紫音は口をそろえてこう言った。

「昔、な（のう）」

何も言わないでもシンクロするあたりは、もう恋人と言っても過言ではないような気がするのだが。

「それじゃあ、アリカ、行って来るわ」

「行ってきますね」

その後、  
十分ほどで用意を済ませ、  
幸と紫音はアリカの見送りで  
出発した。

## 第八話 吸血鬼（後書き）

いかがでしたでしょうか。

ちなみに、アリカは吸血鬼なので、1000年どころではなくウン千年生きているという設定です。

次回の更新ですが、前書きに書いた通りあまり時間がありません。ですが、9月1日までには最低一回は更新できると思います。多分……。

誤字、脱字、矛盾、質問、感想待ってます！

### 設定：魔術

ファイアー・ボール  
『火球』

攻撃魔術の一つで、下級魔術。

属性は『火』。

握りこぶしサイズの火球を放つ。

その大きさは術者の魔力に比例するため、最も如実に実力が現れる魔術である。

前話でアリカ放った『<sup>コロナ</sup>太陽球』と同系統である。

## 第九話 危険人物（前書き）

お待たせしました。

なんとか9月まで最低一回は更新と言うノルマを達成致しました！  
ギリギリですが。

しかし、作者自身は今回の話にあまり満足していません。

うーん、なんか微妙だな………っていう感じで、消化不良を起こしております。

それはさておき、第9話 危険人物、どうぞ！

## 第九話 危険人物

ここは、湊瀬市内の廃病院。山の中腹に建っており、市内を一望できる。かつては人の出入りが激しかったこの病院も、今では肝試しに来る若者以外には足を踏み入れる者はいない。

殆どの窓ガラスが割れ、風雨に晒された廊下は夕日に照らされて、まさしく廃墟と呼ぶに相応しい姿を現していた。

だが、直に夜の帳が下りて、その姿を闇が隠すだろう。

そんな廃病院の院長室。

窓ガラスは割れていないものの、やはり廃墟らしく、いたるところに当時の資料が散乱している。

そこに一人の男の姿があった。

日本人はおるか、外国人でもありえない銀髪。その髪は艶があり、染めたものでないことは一目でわかるだろう。

その顔はやはり、外国人らしく彫りの深い顔立ちである。顔について、大層もてるだろう、とだけ言っておく。

ここまででも十分奇妙なのだが、さらに奇妙なことに男は、真っ黒なローブを身に着けていた。夏なのに暑苦しいことこの上ない。

そんな奇妙な男は、懐から白い15センチほどの木の棒を取り出した。そして、一言二言呟くと電話のように顔に押し当てて何やら話し出した。

「My you. It came to the mi o s e  
city in J a p a n a s y o u s a i d . I t  
s e e m s c e r t a i n l y t o b e s e a l e d o

ff on this ground who it is. (我が君。あなたの言う通り日本の瀧瀬市まで来ました。確かにこの地には何者かが封じられているようです)「

「Still, really? It has understood. Please shift up to the second stage of the strategy. Report as soon as it is possible to prepare it. It is good. (やはり、そうですね。分かりました。作戦の第二段階まで移行してください。準備ができ次第、報告をすること。いいですね)」

奇妙なことが起こった。マイクも何も付いていないはず棒から、声が聞こえるのだ。張りのあるその声は妙齡の女性のものだろうか。「My you who consented. (了解しました、我が君。)」

そう言う男は、再び一言二言呟くとその棒を懐の中に仕舞った。「Well, it is not if the examination thing is not first done based on here... It is likely to end on around the fifth. (さて、まずはここを拠点として、調べ物をしなければ……。5日ほどで済むだろう。)」

男はそう呟くと、院長室から出て行った。

太陽が舞台を降り、闇という名のカーテンが引かれた。

男は夜の裏側で、暗躍を開始する。

~~~~~

アリカに見送られて玄関を出る。

丁度、射しこんでくる夕日が眩しくて、紫音は目を細めた。見ると幸も眩しそうに目を細めている。

「幸。行くぞ」

エレベーターに乗り、何時もの様に無人のエントランスを抜けて外に出る。またも射しこんでくる夕日が目に染みた。

早苗のいる雑居ビルへと向かう。

着いたのは10分後だった。半分廃墟の様だが、それでも機能しているらしい。

何時ものように階段を上がり、二階にあるドアをノックした。

「はいはい。少し待ってください！ 今行きますから」

早苗とは違う声。だが、紫音には心当たりがあった。

「ガチャリ」とドアを開ける音。

「あれ、紫音君？ とその子は……」

顔を出したのは小柄な少女。花柄のブラウス、ショートパンツ、ロングブーツという出で立ちだ。

よく見ると、すべてに卍のロゴが付いている。これらは女性退魔師のおしゃれがしたいという願望から生まれたもので、靴底に鉄板を仕込んだり、服自体が防刃の糸で織られていたり、そのままで戦闘が可能なのである。これらの生産は、すべて『寺院』が行っており、その製品すべてに卍のロゴが付いているのだ。

その少女は細いウエスト、ショートヘアで少し日焼けしていて、まさしくスポーツ少女と言ったところか。明るい性格をしているの

が一目で分かる。

「久しぶりだな、沙耶。こっちは俺の弟子の九湯川幸だ」

沙耶と紫音に呼ばれた少女は、乾沙耶という。紫音の同僚——つまり退魔師だ。ランクは紫音と同じB+。紫音より2歳年下で16歳である。

「へー、紫音君も弟子取ったんだ。初めまして、乾沙耶です。ランクは紫音君と同じでB+。よろしくね」

自己紹介しつつ、沙耶は幸の顔をまじまじと見つめた。幸は恥ずかしいのか、ちよつと顔が赤い。

「は、初めまして、九湯川幸です。ランクはC-です。よろしくお願いします」

「紫音君たちも、早苗さんに呼ばれてきたの？」

「呼ばれて？ 俺たちは単に話し相手になってくれって言われたから来たんだが」

紫音は首をかしげる。

「まあ、いつか。取り敢えず中に入って。暑かったでしょ」

2人は沙耶の言う通り、中に入った。

中に入るとクーラーの効いた空気が紫音たちを出迎える。西日で若干汗をかいた2人には丁度良かった。紫音と幸がソファに座ると、沙耶は冷たい紅茶を出してくれた。

「ありがと。早苗さんは？」

紫音が尋ねると、沙耶は、

「ちよつと、出かけてくるって30分ぐらい前に何処かへ行っちゃったよ。もうすぐ帰って来ると思うけど……」

その時、ドアが開き早苗が入って来た。

「あら、もう来てたのね。幸君も一緒なんだ」

「取ったんですよ。弟子」

紫音がいよいよといった風に言う。

「未熟だと言ってたのに？」

とからかう早苗。

「と、とにかく！ 沙耶まで呼んだ理由はなんですか？」

紫音は不利だと悟ったのか、強引に話題を転換させる。

早苗は、そんな紫音の様子を見てくすりと笑った後、急にまじめな顔になってしゃべりだした。

「実は、この街に『敗者の痛み』ロストベインの幹部である、元魔法使いキリフ

ア・カセデが潜伏しているという情報が入ったのよ」

「なっ……………！」

驚く紫音。それとは対照的に後の二人はぼかんとしている。

「『敗者の痛み』ロストベイン？ 元魔法使い？ なんなんですか？」

沙耶がさっぱり分からないと呟いた。

「まず、『敗者の痛み』ロストベインって言うのは、まあ、簡単に言えば反退魔師グループみたいなもんだ。厳密に言えば、『教会』に対してのみ反発しているがな」

紫音がそして、と続ける。

「——元魔法使いってのは、西洋の退魔師、特に魔術師を統括する『教会』から何らかの理由で、魔法使いの資格を剥奪された者達のことだ。魔法が使えなくなったわけじゃない。むしろ、強力すぎて『教会』から迫害を受けると解釈すれば、魔法使いでもかなり強力な者達の称号と取れるだろうな」

紫音が説明を終えると、幸が質問した。

「師匠。なんで『教会』にだけ反発しているんですか？」

「『教会』に反発するグループは、総じて『異端』と呼ばれる。『異端』の構成員の多くは、『教会』から家族、友人、恋人を不当に奪われた者達だ。ああ、自身がつかまって拷問を受けたつてのもあり得るな。……………つまり、『教会』に恨みを持っているということだ。そして、『敗者の痛み』ロストベインつてのはその中でも特に過激なんだ。無差別テロなんて平気でやる。『異端』でもトップクラスの危険度だろうな」

「そんな組織の幹部がこの街に潜伏してるなんてヤバいんじゃないの？」

と沙耶。

「そうよ。だから、今日から夜間に見回りをしてもらうわ。一人じや危険だから3人1組で行動すること。今から大体日付が変わるまで、6時間ぐらいいはみっちり働いてもらうわよ。まあ、あと4日もすれば、大規模な捜索隊が派遣されるから、それまでの辛抱ね」

「なんで、もっと早くにこないんですか？」
幸が質問する。

「それは、この情報の裏が取れてないからよ。信頼できる情報ではあるんだけど……」

ボランディア
結局、3人は強制労働をさせられるのだった。

「それじゃあ、2人とも。改めて自己紹介といこうか」

ビルの前で、紫音が2人に言った。

「自己紹介ですか？ 師匠、さっきやったんじゃ……」

この年で痴呆とか大丈夫かな？と幸がこっそりと紫音に聞こえないように続けて呟いた。

「阿呆。痴呆なんてなってたまるか。そうじゃなくてだな、自分のバトルスタイルとか、どんな得物を使うとかってことだよ」

思いのほか地獄耳だったらしい。

「そうね。じゃあ、あたしから。あたしの適性は霊力で、体術が得意。まあ、接近戦タイプかな」

「僕は、魔力に適性があります。僕も接近戦タイプです。得物は刀です」

そう言うと、幸は自身の愛刀『五月雨』を呼びだす。
いきなり手に刀が現れたのに驚きもしない沙耶。

紫音としては一般人に見られないか心配だったので、早々に刀を仕舞わせる。

「それで、キリファの人相がこれだ」

紫音は1枚の紙を2人に見せた。

そこには、銀髪の外国人らしき人物の写真が描かれている。

ただし、恐ろしく画像が粗いが。せいぜい分かるのは、上にあげた2点だけだろう。

「こんなので探せて、無茶だね……。髪なんて簡単に染められるんだから」

「その通り。まあ、銀髪のままである可能性は無きにしも非ずだからな。それと、これがキリファの詳細な情報だ。

紫音が何やら英語で書かれた文章を2人に手渡す。

「英語は読めないんだけど……」

「し、師匠。僕も……」

おずおずと言う2人に向かって紫音は呆れたように言う。

「お前らな……。沙耶はまあ仕方が無いとしても、幸。お前は魔術師だろう。英語ぐらい読み書きできなくてどうする……」

紫音は、はあとため息をつくとその文章を読み上げ始めた。

「——仕方ない、長いから掻い摘んで読んでやる。……キリファ・カセデ、本名キファ・リーセ。1972年、リーセ侯爵家の三男として生まれる。リーセ侯爵家つてのは優秀な魔術師を数多く輩出していた貴族だ。1986年、『教会』から魔法使いとして認められる。そして、その翌年の1987年、“リーセの悲劇”の折に失踪。その後10年間足取りは掴めず、1997年、“アメドラスの悲劇”の主犯格である、“アリア・サルトー”の傍らに居るのを大勢の魔術師に目撃される。これにより、『教会』は魔法使いの資格を剥奪。さらに国際魔術指名手配犯の最上級ランク——レッドランクに指定した。以後、大々的な活動は行っておらず、また、“アメドラスの悲劇”の折に『敗者の痛み』のリーダーである“アリア・サルトー”の傍らに居たことから、『敗者の痛み』の幹部であると思わ

れる」

紫音は一息つくと、説明を再開する。

「——バトルスタイルは、召喚魔法主体の遠距離タイプ。すべての属性と、ありとあらゆる召喚魔法を操る姿から『ハイフェクトカラー極彩色』の二つ名がついた。ただし、それらの情報は魔法使いだった頃の情報のため、現在の實力は未知数である」

説明を終えた紫音があ、そうそうと付け加える。

「——賞金は10億円らしいぞ」

その言葉に、沙耶が食いついた。

「じゅ、10億！？ 捕まえたらそんなに……」

うふふ、とか、あははとか気味の悪い声を漏らす沙耶。彼女の脳内では妄想劇が繰り広げられているようだ。幸がかなり引いているのにも気付かないほど。

幸の脳内でのさつきまでのキャラがボロボロと崩れ去る。

「おい、沙耶？ そろそろ戻ってこーい」

見かねた紫音が声を掛けるも、トリップしたままなかなか戻ってこない。

結局、戻ってきたのは10分後だった。

その時の幸の目がつらかった、と本人は後で漏らしたという。

第九話 危険人物（後書き）

いかがでしたでしょうか。

半分、説明回なのはご容赦ください。

次回の更新はいつになるか分かりません。

学校が始まるので。

できるだけ早く更新しようとは思いますが、下手したら2週間ぐ
らいは更新できないかも……。

ってこんなこと言ったら、本当に起きそうで怖いですね。
止めとこう。

誤字、脱字、矛盾、感想、批判、ご指摘待ってます！

第十話 遭遇（前書き）

お待たせしました。

なんとか完成したのでよかったです。
それでは、第十話 遭遇 どうぞ！

第十話 遭遇

「待たせたな。準備に手間取っちまって」

エントランスで待つ2人に紫音の声が聞こえた。

あの後、紫音の装備である『コンビクシヨン』を取りに帰るため、3人はマンシヨンの前に来ていた。

紫音は家に取りに帰ってから15分後、ようやく姿を現したのだ。すっかり服も着替えている。

上は普通のシャツ、下はジーパンという格好だ。シャツには不可視の魔法陣が織り込まれていて、ジーパンは速度強化の魔術が織り込まれている。勿論卍のロゴが入りである。元々は女性物しかなかったのだが、人気が出るにつれてメンズ系も充実しているのだ。

そして腰にはポーチと、一般人には見えないであろうホルスターが吊るされている。

「どこへ行く？ 特にルートは決められてないんだろ？」

「清木神社の方は？ あの辺りって空き家が多いし。潜伏してるかも」

「確かにそうだな。市内で一番怪しいのはこの地域だろう。それにここから歩いてい20分もかからないからな。ここにしよう」

この湊瀬市はいびつな円形をしている。そして市を囲むようにして、11の神社が存在する。その中の1つが清木神社だ。市内で一番北にあり、そこから時計回りに横地神社、せいごくじんじゃ 静楽神社、せいがくじんじゃ 黄塵神社、おうじんじんじゃ 墨潮神社、すみしおじんじ 赤煉神社、せきれんじんじ 百塚神社、ももつかじんじ あり、その中心に旅狼神社がある。

これだけでも相当奇妙なのだが、横地神社、朱灯神社、静楽神社、墨潮神社、百塚神社、旅狼神社の6つは完全に禁足地となっており、一般人の立ち入りが許可されていない。

この奇妙な神社は一時期話題になり、そこそこの観光客が訪れた

そうだ。

3人は早速歩き始めた。

「幸君、旅人伝説たひとって知ってる？」

神社へ向かう道中に、沙耶が幸にこんなことを聞いた。

「旅人伝説……ですか。知らないです。なんですかそれ？」

「この市に伝わる伝説みたいなものだ。簡単に言えば、化け物がいきなり現れて、村人を襲って、そのことを知った勇者が化け物を倒すって言うストーリーだよ」

紫音が、かなりはしょった、いい加減な説明をする。

「ま、そうなんだけど、詳しい話、聞きたい？」

沙耶が幸に聞いてくる。

しかし、明らかにその目は“聞いてほしいです！”と主張しており、幸の意見はどこへやら。多分、断っても無理やり聞かせるだろう。

そんな、紫音の考えを知ってか知らずか、

「気になります」

と幸。

「昔ね、この辺りは——」

紫音は2人を置いて先に歩いていった。

その話は、何度も沙耶に聞かされたので知っている。確かこんな話だったか。

——昔、この辺り一帯は旅村と呼ばれる、大集落だった。旅と名がつく通り、旅人達が泊まる宿場町の様なところだった。

そんなある日、1人の旅人がこの村を訪れた。その男は2泊すると、出ていくといった。そして、最終日、男は礼がしたいと、村人にあるものを手渡した。それは玉だった。宝玉と呼ばれる美しい宝石。渡された玉は漆黒だった。旅人はそれを残して旅立った。

それから10年、20年が過ぎて、その玉は村の祠に大切にしまわれていた。いまだに、くすみ一つあらず、また、傷一つなかった。そして、その漆黒は深みを増していた。それからさらに100年後、いまだに、玉は健在だった。

そして、村の祭りがおこなわれた時、悲劇が起った。突如、玉が割れ、中から巨大な狼が姿を現したのだ。狼は無差別に人を襲った。村人たちは、旅人の助けを得てなんとか山に追い出すことに成功する。だが、そこまでが限界だった。村人たちは、生贄を奉げることではなく、襲われるのを防いでいた。

そんな時、男2人と女4人の旅人が村の中に運び込まれた。なんでも、山で遭難したらしい。担ぎ込まれた時は瀕死の状態だったが、村人の献身的な看病によって無事完治した。

旅人たちは狼のことを知り、自分たちがなんとかすると言い出した。当然村人は止めたが、旅人の1人がこんなことを言い出した。「あの狼は、この村の負の感情を吸って生まれたもの。私たちは、そのような怪物を退治する退魔師なのです」と。そしてこう続けた。「私たちが、この身に怪物を封じます。そして、私たちを封印すれば、絶対に復活することはありません」。村人は反対した。折角助けたのに、命を粗末にするな、と。しかし、旅人は横に首を振ってこたえた。「これ以外に方法はありません。それに、早くしないとこの方法すら通じなくなります」。

結局、村人は旅人に頼ることにした。そして、明くる日。旅人たちは、狼に挑んでいった。三日三晩、戦いは続いた。そして、ついに狼は消えた。旅人と共に。

戦いの後には、6つの玉が残された。深い海の様な青い玉、煉獄の炎のように赤い玉、菊のように美しい黄色の玉、穢れ一つない白い玉、漆黒よりもさらに深い黒色の玉、そして、無色透明で傷一つない玉。

村人たちは、旅人たちに感謝を捧げるとともに、それらの玉を丁寧に祭った。その祭られた神社が、横地、朱灯、静楽、百塚、旅狼

神社である。

確か、こんな話だった。

噂によると、確かに、その神社にはそれぞれの色の玉が祭られているのだとか。だが、あくまで噂なので真偽は分からない。

「おい、沙耶、幸。さっさと行くぞ」

紫音は2人を促して、歩を進めた。

先ほど、沙耶が清木神社の辺りは空き家が多いと言ったが、正確には間違いだ。空き家ではなく、文化財に指定されているため、無人の屋敷や古い家などが多いのだ。

しかし、いくら文化財であっても、住む者が居なければただの空き家である。

「さて。着いたはいいが、これからどう回る？」

ここは清木神社の目の前。眼前にはうっそうと茂った森の中を貫いて、参道が横たわっている。

「そうだね……。一番空き家が多いのは……。このあたりかな」

そう言って沙耶が、手に持った地図を指さす。

そこはここから西へ少し進んだところだった。

ここならそれほど時間を食わない……。と紫音は思考する。

「分かった。そこへ行こう」

紫音がそこへ行こうかと足を踏み出した瞬間、幸が声をあげた。

「師匠！ あれ！」

小声で怒鳴るといふ器用な真似をした幸は、神社の参道を指さしていた。

よく見ると、何か銀色の物体が見える。否、ものではない。人だ。銀髪の。

「——ッ！ まさか、いきなりエンカウントするとは……。っーか、銀髪を隠しとけよ……」

紫音はふうーと息を吐くと、

「——沙耶、人払いの結界張れるか？」

と聞いた。その声には硬さはない。しかし、今までが嘘のように気迫に満ちていた。完全に戦闘態勢だと感じた沙耶は、慌てて懷から1枚の符を取り出す。

「うん。張れるよ。彼の者、彷徨いて、目的を見失わん」

沙耶はそう言つと、手短な木に符を張り付けた。

その瞬間、その木から半径200メートルの範囲に霧が満ちた。十分先が見通せるほど薄い霧だが、範囲内に居た人々は、何処か虚ろな目で去つて行く。

この霧は、魔術師や退魔師などの力を持った者たち以外を、一定の範囲から追い出し、近づけないようにするものだ。

そして、肝心の銀髪の男は、まだそこに居た。

「ビンゴだな」

紫音が呟く。

男は慌てたように周囲を見渡し、紫音たちを見つけるとキツと睨みつけた。

「You who? (貴様ら、何者だ?)」

警戒心を露わに男が問う。

「It is Exorcist. You shall not be kirifa・kasede? (退魔師だ。お前はキリファ・カセデだな?)」

紫音は気取られないように右手をホルスターに持っていく。

右手が届いた。男はまだ気づいていないようだ。

「Indeed, Has the slave of・Church・come later though it doesn

't know where information leaked...? It is probably good. Because you only have to be silenced.

(なるほど。どこから情報が漏れたかは知らんが、『教会』の狗どもがもう追ってきたか……。まあいい。貴様らを口封じすればいい事だからな。)

そう言い放つと、キリファは大きな本を取り出した。ハードカバーで大きさは縦30センチ、横40センチはあろうかという巨大な本。一体、今までどこにそんなの隠してたんだというぐらい、巨大である。

そして、何よりもその本は、無意識のうちに目を逸らしてしまうほど強烈な存在感を放っており、魔術師から見れば、とんでもない量の魔力——開放すれば、都市が一つ消し飛ぶクラス——を内包しているのが分かる。

「^{グリモワール}魔術書か……。それも禁書クラスの……。厄介なもの持ち歩いていやがる」

本来なら、キリファが何かをする前に、先手を打たなければいけないのだが、^{グリモワール}魔術書を下手に傷つけてしまうと大惨事になりかねない。そのため、動こうにも、動けない。

結果、立ち尽くすしかないのである。

キリファは、紫音達を嘲笑うように緩慢な動作で本を——^{グリモワール}魔術書を開いた。パラパラと何かを探すようにページを捲っていく。そして、目的の項を見つけたのか、ページを捲る手を止めた。

「The ruled one over eats. (司りしは暴食)」

キリファの声が朗々と響く。

「It is a desire assumed to be a taboo by seven deadly sins. Beelzebub that fell from se

raphim into satan. Manifest the
anger of the king of the dev
ildom in compliance with my ca
lling! (七つの大罪にて禁忌とされる欲望なり。熾天使より
悪魔に堕ちた『蠅の王』よ。我が呼びかけに応え、魔界の王の怒り
を顕現せよ!)」

キリファが何をしようとしているのか分かったのか、紫音がさつ
と顔色を変えた。沙耶と幸は英語がさっぱりなので、訳が分からな
いといった様子だ。

「まずい……。あいつは魔界の王を呼び出すつもりらしい……。く
そっ! まず過ぎるぞ……。! どうすればいい……。!」

紫音が呟いている間にも、詠唱は続く。そして、ついに終わりを
迎えた。

「—— Summoned・Beelzebub・! (召喚、^{ベル}蠅
^{ゼラフ}の王『!』)」

突如としてキリファの前方に大きな——直径10メートルはある
うかという——魔法陣が現れる。

そして、魔法陣が光り輝いたと思えば、いきなり黒く光った。現
実はあり得ない黒い光。

それは、自然の摂理すらも捻じ曲げる、まさに怪物の現れる前兆
だった。

辺りは黒い霧に包まれ、妙な音が鳴り始める。

女性の悲鳴のようだが、金属と金属をすり合わせたような音で、
聞いている心地いいものではない。

「ちょ、ちよつと紫音君!? これは一体どういうことなの!?!」
慌てて沙耶が紫音に尋ねる。

「あいつは、魔界の王を呼び出そ——ッ!」

紫音がいきなり科白を中断した。否、中断させられたのだ。魔法
陣から漏れる邪悪な魔力によって。

「うっ」

吐き気を催したように、地面にうずくまる紫音。同じように、幸も地面にうずくまっている。

「し、師匠……も、もう駄目……」

それだけ言うと、幸は地面に倒れこんで気絶してしまった。

魔術師と言うのは、魔力を扱う。そのため、魔力を自分の手足と同じように扱えるほど精通していなければならない。これは、魔力を感じる上でも言えることで、効率よく魔力を扱うには、どんな小さな魔力にも反応出来るようにするのがベストだ。魔術師にとって魔力と言うのは第6感^{シックスセンス}と言えるだろう。

想像してほしい。あなたの目の前には、グロテスクというものを極めたような死体が幾つも転がっている。そんな中で、あなたは吐きを抑えられるだろうか。

つまり、紫音達が体験したのはそういうことである。

魔力に適性が無い者や慣れている者は、けるつとしていられるが、魔術師にはかなり致命的なダメージを被ることとなる。

「だ、大丈夫だ……。すぐに慣れる……」

紫音は息も絶え絶えにそう言うと、立ち上がった。だが、バランスを崩してしまう。

「すー、はー。すー、はー」

大きく深呼吸すると、今度はしっかりと立ち上がった。

「もう、大丈夫だ。沙耶は何ともないな？」

紫音が沙耶に聞く。その声は先ほどまでとは違い、しっかりといて震えてもいない。

「うん。あれはな……何なのあれ!？」

沙耶が叫ぶ。

見れば、魔法陣から何かが出て来ようとしているところだった。妙にメタリックな黒い何か。そこから、3対6枚の翅が出ている。

「もう出てきやがったか……。くそっ！ 打つ手がない……!」

沙耶は驚いていた。紫音は普段、冷静沈着で何事にも動じない。それなのにこの取り乱しようはなんだ？ 紫音らしくない。

「どうしたの!? 紫音君!? あれってそんなヤバイやつなの?」
「ああ。少なくとも神話級の悪魔を召喚しているから、俺たちじゃあ太刀打ちできない」

「神話級!? どうしてそんなのが……」

「恐らく、^{グリモワール}魔術書の恩恵だろう。召喚術ってのは、基本的に術者の魔力で顕現するから、かなりパワーダウンしているだろうが……」

2人が会話している最中にも、何かはその姿を現していく。頭が現れ、ついに全身が完全に外に出る。

そこに居たのは、蠅だ。全長は5メートルは下らないだろう。背中にある3対6枚の翅が目に見えないほどの速さで動いて、キーンと言う耳障りな音を立てている。先ほどの音はこれだったようだ。
「Well, I do not have the so much time. I will briefly end it. However, relieve. It doesn't kill. The memory of meeting me is only lost.」(さて。私にはあまり時間が無い。手短に終わらせてもらうぞ。だが、安心しろ。殺しはしない。私と会った記憶を失くしてもらうだけだ。)

キリファはそう言つと、くると紫音達に背を向けた。

「——Beelzebub. Untie the anger. However, do not kill. Eat only the memory.」『蠅の王』よ。その怒りを解き放て。ただし殺すな。記憶だけを喰らえ。)

キリファはそのまま去って行く。

「お、おい! 待て!」

紫音が慌てて叫ぶ。

「Looking away is quite room at the time of fighting against Beelzebub.」『蠅の王』と戦っている最中によそ見とは、なかなか余裕だな)」

キリファがそう言った途端、蠅が動き出した。

その図体に似合わない、機敏な動きで紫音達に向かってくる。蠅の口からギギギイと言っ音が漏れる。

夕闇を舞台に、戦いの火蓋が切って落とされた。

第十話 遭遇（後書き）

いかがだったでしょうか。

次回はいよいよ戦闘シーン。

上手く書けるかな……。

まあ、ガンバリマス。

今回の更新は、未定です。

文化祭の準備＆本番があるので、かなり更新が遅れる可能性があります。
ります。

ご了承ください。

誤字、脱字、矛盾、感想、評価、批判待ってます！

第十一話 死闘1（前書き）

遅れてすみません。

お待たせしました。

本来なら、13日、遅くても14日には投稿できるはずだったのですが……。

遅れた理由については、活報をご覧ください。

それでは、第十一話 死闘1、どうぞ！

第十一話 死闘1

蠅が機敏な動きで紫音達に迫って来る。

ついに、その複眼に紫音達が映った。彼には紫音達はどう映っているのか。

[illegible]

蠅が、吠える。人間には理解不可能な言語。

その叫びと共に、**蠅の翅が一層速く動く。**

限界をぶち破るように速さを増していく翅。そこから発生する音は、すでに人間の可聴域を超え、紫音達には聞こえない。

次の瞬間、パン！ という音と共に見えない何かが射出された。轟音を撒き散らし、蠅の周りの石畳が破壊される。

「音速を超えやがった……。どんだけ規格外なんだよ……」

紫音が、バックステップで蠅と距離をとりながら呟く。

沙耶は幸を抱いて、紫音より若干早く蠅と距離を取っていた。

「紫音君！ どうする！？」

「取り敢えず、幸と一緒に離脱してくれ！ 助けを呼びに行つてくれると助かる！」

蠅が今まで以上に素早く紫音に向かって接近する。紫音はコンビ
クシヨン抜き出し、発砲した。

タァン！ タァン！

異様に静かな参道に銃声が響き渡る。

翅の付け根と前足の付け根に銃弾が当たり、僅かに外殻が凹むが、蠅は意にも介さず追撃の手を緩めない。

「紫音君！でも……！」

「いいから！ 早く！ 俺は自力でなんとかする！」

半ば投げやり気味に怒鳴る紫音。

「わ、分かった！　すぐ戻って来るから、それまで持ちこたえて！　
そう言つと、沙耶は幸を背負つて何処かへ走つて行つた。

「風よ風よ、雷となりて、我が身体に雷電の如き速さを与えよ」
トニング・ドレス
雷の衣』。風よ、千里を見通し、電光すらも捉える目となり、我を
助けよ　『ホーク・アイ
千里眼』」

一息で詠唱を二つ唱える。

魔力を掌握し、魔術を発動。

次の瞬間、世界がスローモーションになる。

今までは見えなかった蠅の翅の動きが、今では鮮明に見える。

「シッ！」

短く呼吸を吐き出すと、蠅までの距離を5秒以下で詰めた。

目の前数十センチまで、その巨体が迫る。

常人はおろか、退魔師でも目を凝らして集中しなければ見えない
ほどの速さ。

だが、蠅はまるで余裕だというように紫音めがけて前足を振るつ
た。紫音の速さより、数段上だろう。

細い腕が、まるで鞭のように撓り、紫音を襲う。途中、音速を超
えたのか、またもやパン！　という、高い音が響き渡る。

「——ッ！」

上昇した動体視力が、辛うじてそれを捉えた。

ブリッジをするように、身体を後ろに倒し、なんとか紙一重でかわす。

そのまま、勢いよく倒立、手だけの力で後ろに後退した。

「流星に見切られているか……。なら、これでどうだっ！」

紫音は、今度も同じように蠅へと走り出す。ただし、詠唱をしな
がら。

「——闇よ、闇よ。そなたの主の友がここに命ずる。そこは闇の王
が君臨する世界。何人たりとも王に抗うことが許されぬ独裁の地。
太陽の輝きが大いなる闇に紛れし時、我が魔力を糧として、常夜の
世界を作り出せ！　『ナイト・ワールド
明けない夜』」

膨大な魔力が身体の中から消費される。

薄暗い夕闇の中で、闇が蠢いた。まるで、黒い虫が何千匹もいるかのように、闇が明確な意志を持って紫音を中心に辺りに広がっていく。

紫音は、それを無視して蠅まで到達。

その無防備な翅に向かって、残りの5発をすべて撃ちこんだ。

あまりの早撃ちに、銃声が重なる。

すべての弾丸が狙い通り翅に命中した。薄い翅を切り裂いて、弾丸が空へと飛んで行く。

だが、血が出ることも無く、蠅はまるで気にしていないように宙に浮かんでいた。

その間にも、闇は新たな動きを始めた。

闇が広がるのを止め、上へ、上へと、まるで壁を作るかのように上昇していく。

「f@hfzpg」

そんな光景を尻目に、蠅が意味不明な言葉を発した瞬間。

ドゴンと、足元から何かが爆発したような音が響いた。

そして、なぜか紫音は錐揉み状態で吹っ飛んでいた。

「——え？」

目まぐるしく変わる景色。

紫音は、状況理解が追いつかないまま、闇の壁に激突した。

「カツ、ハッ……！」

激突の衝撃により、肺の中の空気が押し出される。

その息には、赤い液体が混ざっていた。

「グッ！ ペッ！」

身体の中から逆流してきた血液が、喉を塞ぐ。それらを吐き出すと、漸く呼吸ができるようになった。

「——はあ、はあ、はあ、はあ……。い、一体どうなってるんだ……？」

紫音には理解できていなかった。

なぜこうなった？ 何が起きた？

頭の中を疑問が埋め尽くす。

それらを振り払い、立ち上がろうとした時、形容しがたいほどの激痛が紫音を襲った。

「グオア！」

獣じみた声をあげて蹲ろうとするが、今度は胸からの激痛で蹲ることさえ許されない。

「ガアハッ……ハッ、ハッ……。足が折れてるのか……？ それに肋骨も……」

一度、冷静になり、客観的に状況を分析する。自身の体に神経を研ぎ澄まし、ダメージの度合いを確認していく。

「——肋骨が何本か逝ってるな……。両足は複雑骨折ってところか。内臓もこの調子じゃ傷ついてるな……。痛覚がぶっ飛んだのか知らんが、痛みを感じないのありがたい。左手の親指と、小指、薬指も折れてるな……。右手の銃を手放さなくて良かったぜ……。まあ、骨盤か、背骨が折れていないのは不幸中の幸いだな。それにしても、いったい何が起こったんだ……？」

闇は、まるでドームのように空を覆い始めた。

蠅——ベルゼブブは、紫音に向かってくるまで戦うつもりはないのか、先ほどの場所から動いていない。

その前方、わずか3メートルほどの所に、大きなクレーターができていた。

「あれが、俺のいたところだから……。あの音を考えると、爆発か。だけど、魔法陣の展開も無かったし、魔力の流れも感じられなかった。どうなってやがる？」

丁度、紫音が呟いた時、辺りから光が失われた。

闇が完全に空を覆っていて、僅かな光さえ侵入を許さない。

光が無いということは、つまり、何も見えないことを意味する。

だが、紫音にはベルゼブブの姿が良く見えた。

闇属性最上級特殊種族魔術、「ナイト・ワールド」明けない夜」。

術者を中心としたドーム状のフィールドを展開し、その範囲内に居る、術者以外の者の五感すべて奪う効果を持つ。

この魔術は、夜の一族——つまりバンパイアか、バンパイアに許可を得たものでないと行使できない。そのため、バンパイア達にとつて、最終兵器であり、最強の必殺技である。しかも、魔力を始めに消費するだけで、その後の維持に魔力は必要ない。魔力が比較的低いものでも、扱えるのである。

さらに言うなら、この魔術は、バンパイアでないものが使ったことは、有史以来でたったの5回だけである。そのため、研究が進んでおらず、どういった仕組みなのか、どうして許可を得れば使えるようになるのか、などはいまだに解明されていない。

「——発動したか……！ これからは俺のターンだぞ……！」

紫音は、血塗れの震える手でポケットから小さな瓶を取り出した。淡い青色の液体が中に入っている。

四苦八苦しながらも、瓶を開け、中身を一気に飲んだ。

相当まずいのか、顔を顰めながら口に含んだそれを飲み下す。

と、同時に紫音の身体中から、ピキツ、とか、パキツ、とか、グジュツ、とか言う気味の悪い音が聞こえてきた。

痛みを伴うのか、紫音は顔を顰めたまま微動だにしない。

ようやくその音が鳴りやんだとき、紫音は顰めっ面を和らげた。

「グウウ……。凄まじい痛みだな……。だけど、よく効く。もう、あらかた傷が治ってやがる……。しかも、血まで補ってくれるとは……。流石だな」

確かに、正視に堪えなかった両足は、ズボンが血塗れなことを除いては元に戻っていたし、上半身もシャツが血塗れなことを除けば怪我一つない。

勿論、治っていく最中が一番正視に堪えなかったことは言うまでも無いが。

「——アリカに感謝しないとな……。これが無かったら、ヤバかった……」

紫音は立ち上がると、恐らく、五感を奪われて動けないでいるであろう、と予想したベルゼブブへと目を向けて——驚愕した。

半分だけ、紫音の予想は当たった。

確かに、ベルゼブブは動いていない。

だが、翅を小刻みに動かして、宙に浮かんでいた。

五感——それも触覚を奪われたものは、平衡感覚を失い立っていない。それが空を飛ぶ者ならなおさらのことだ。

宙に浮かんでいる。

それはつまり、魔術がみじんも効果を発揮していない証拠だった。

「じよ、冗談だろ……。この魔術は、最上級魔術だぞ……。本当に打つ手がないじゃないか……！」

この魔術が効いていないということは、相手が自分の意思で動いて、追撃してこなかったということ。

それはつまり、まるで師匠と弟子が手合わせをするかのように、手加減しているということだ。

それに、相手は魔界の王と呼ばれる大悪魔である。賢王としても名高く、魔法を使うことにかけては、最強とも呼ばれるほど。それほど存在が、なぜ、魔法や魔術を使わない？

今の力で本気の10分の1以下、もしくは、もっと下かも知れない。

「だけど、諦められるか……！ 1パーセント以下の確率でも、勝てる確率があるなら、挑むまで！」

俺には、一つの信念がある。それを捻じ曲げることは絶対にしない！

思わず、口を突いて出てきたその言葉を、高らかに宣言すると、再び、ベルゼブブに挑んでいった。

絶望的な状況。勝てる見込みはゼロに近い。だが、それでも紫音は挑んでいく。

戦いの第1ラウンドが終わり、第2ラウンドが幕を開ける。

第2ラウンドは、光の無い世界の中で、生還と言う名の光を掴み取るための戦い。

その試合開始を告げるゴングが今、鳴り響いた。

走る、走る、走る、走る。

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

沙耶は、助けを呼ぶべく、境内に向かって走っていた。

靈力を足に集中させ、脚力を強化しており、そのスピードは、車にも引けを取らないほどだ。

靈力。

大まかに木、火、土、金、水、の属性があり、それを細分化する陰陽の区別が加わり、計10の属性がある。それぞれ陽、陰順に、
『きのえ甲』、『きのと乙』、『ひのえ丙』、『ひのと丁』、『つちのえ戊』、『つちのと己』、『かのえ庚』、『かのと辛』、『みずのえ壬』、『みずのと癸』となる。

これらの属性は、それぞれ特性を持っており、単体で使用したり、込み合わせたりすることで、様々な効果を発揮する。

また、靈力は、水剋火、火剋金、金剋木、木剋土、土剋水の五行相剋の関係——つまり、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝ち、という互いに弱め合う関係を持つが、一方で五行相生——木生火、火生土、土生金、金生水、水生木、という、たがい生じ合う関係も持つ。他にも、比和、相侮、相乗、等の関係がある。

五行とは互いに弱め合い、生じ合う。陽と陰は複雑に絡まり合い、

どちらか一方が無ければ成立しない。

そして、両方を同時に満たす属性を『両義』と言う。

両義は全てを司る太極から生まれたとされ、それを二分して明確にしたのが陰と陽である。

故に、すべての属性の特徴を備えている。

沙耶が現在足に纏わせているのは、火の陽である『丙^{ひのえ}』の靈力で、身体能力を向上させる効果を持つ。

だが、沙耶は『丙^{ひのえ}』は得意ではなく、それほど身体能力の向上は見られない。

本来なら、車どころではなく、F1並のスピードになるはずなのだ。

「――後、もう少し……」

この神社は、参道が長い事で有名で、その全長は1キロ以上あるといわれている。

そんな、長かった参道も終わりが見え、後、300メートルほどで境内に到達しようかと言うとき、何処からともなくあの男――キラファの声が聞こえてきた。

「Might always think letting go
surely. Mimicry that proves in
formation that I am conceal in
g myself in this city will be
not able to be done. However,
relieve. It doesn't kill. It is
only forgotten to have met me.
（まさか、逃がすとは思っていないだろうな？ 私がこの市に潜伏しているという情報を裏付けするような真似は出来ないに決まっている。だが、安心しろ。殺しはしない。私と会ったことを忘れてもらうだけだ。）」

木々に反響して、何処に居るのか特定ができない。

「どこに居るのっ!」

沙耶が怒鳴るように、返事をする。

依然として足は動かし続ける。何処からともなく、詠唱の様なものが聞こえてきたような気がしたが、無視して走った。

もうすぐで境内だ。爆走する沙耶の目に、神社の本殿が迫る。

そして、両脇の木々が無くなり、視界が一気に開けた瞬間――
|。

鋭い頭痛が頭を襲い、思考が一瞬真っ白になった。

次の瞬間、目に飛び込んできたのは、先ほどまでと何ら変わりない参道だった。

「なっ！ どう、して……」

神社の境内に着くはずだった。

先ほどまで、神社が見えていたではないか！

どうして？ どうして？

疑問が沙耶の頭を支配していく。

「何をしたっ！」

沙耶の前方、10メートルほどの所に立っている男――キリファに怒鳴る。

その、敵意と殺気を孕んだ目線を軽くないし、キリファは答えた。

「It is easy. I am a summons master. Then, there must be mystery even if the grammar in the metastasis system is skillful. - Ah this moppet was not to have understood English. (簡単なことだ。私は召喚師。ならば、転移系統の魔術を得意としていても何ら不思議はないはずだ。――ああ、このお嬢ちゃんも英語が分からないのだったな。)」

英語で答えようとするが、沙耶が英語が分からないのを思い出したのだらう、今度は日本語で喋り始めた。

「――召喚師が、転移を得意とするのは当たり前だろう？ 君の気

が緩んだ一瞬を狙って、転移させただけのこと。簡単なことだ」

外国人とは思えない流暢な日本語。独特のイントネーションもない。その、深いバスの声は、俗に言う美声と呼ばれるものだろう。容姿も相まって、さぞかし女性にもてるだろう、と言わざるを得ない。

沙耶も一瞬、顔を赤らめるが、これは敵、これは敵、とキリファを倒すことだけに集中する。

「ここが参道なら、幸君はどこへやったのっ!？」
そう。

沙耶の背中には、先ほどまでいた幸の姿はなかった。まだほんのりと暖かく、幸が居なくなっただけでそれほど時間がたっていないことを沙耶に知らせてくれる。

「まあ、流石に分かるか……。どうせ記憶を失うのだから、この際本当のことを話そうか。ここは私の精神世界だ。バーチャルスペース幸君とやらには悪いが、君だけを対象にさせてもらった。安心しろ。君たちの命は奪わない。記憶を少々弄らせてもらうだけだ。あの少年や、幸君とやらも例外ではない」

キリファは諭すように沙耶に語りかける。

だが、沙耶はそれを無視して、キリファに跳びかかった。それほど強化されていないといっても、生身で車並みのスピードを出すのだ。その力を溜めて、一気に開放すれば、凄まじい瞬発力が出るに決まっている。

まるで、虎の様な跳躍。力強く、それでいて流れるように優雅。

沙耶の戦闘スタイルは、徒手空拳である。

四肢に靈力を纏わせ、キリファ強烈な一撃を見舞う……はずだった。

次の瞬間、キリファの姿が掻き消え、沙耶はバランスを崩す。

だが、沙耶は空中で一回転すると、無難に着地した。

「どこに……そこかっ!」

沙耶の丁度真後ろ、10メートルほどの所にキリファは立っている。

た。

弾かれた様に振り返ると、そのまま大きく跳躍。
地を這う様にして、跳ぶ。

紫音の動きよりも数段速いそれは、あっという間に両者の距離を
詰め、ゼロにした。

「はあっ!!」

裂帛の気合と共に、下から救いあげるようにアッパーを繰り出す。
惚れ惚れするほど美しいフォームから放たれた拳はしかし、キリ
フアにあたることはなかった。

またしても、当たる直前に、姿が掻き消えたのだ。

「くっ、そっ!」

2回連続で攻撃をかわされた事に苛立つ沙耶。

そんな沙耶に声が掛けられる。

「無駄だ。ここは精神世界パーソナルスペースだからな。私の思い通りになる。ほら、

たとえばこんなことも」

そういうと、キリフアの姿が6つに分裂した。

「————まあ、こんなことができるのは私自身に関してだ
けだな。それに私は召喚師サモンマスターだから、自分自身の攻撃力はないに等
しい」

6つの口が同時に喋るので、耳がおかしくなりそうだ。

「信用すると思う?」

そんなことをおくびにも出さず、沙耶が言う。

「————まさか。まあ、信用しようが、信用しまいがどちらで
も構わない。私はただ君を倒せばいいだけだからな。ああ、それと
私を倒せばこの異界から——精神世界パーソナルスペースから抜け出せる。信用するか
信用しないかは君次第だ」

それだけ言くと、口々に詠唱を始めた。

「————Son of stormy god Typhon
and Echidna. (嵐の神テューポーンとエキドナの
息子。)」

「——Watchdog that protects hell. (地獄を守護する番犬よ。)」

「——Watchdog of bull of Geryon. (ゲリユオンの雄牛の番犬よ。)」

「——Excellent watchdog that doesn't let the dead who run away even people how many pass.

(何人たりとも逃げ出す亡者を通しはしない優秀な番犬よ。)」

「——Pitiful watchdog killed foolishly with speed at which it cannot catch up in everyone.

(何者にも追いつけない速さを持ちながら、愚直故に殺された哀れな番犬よ。)」

「——Watchdog's brother. Appear in compliance with my calling! (番犬の兄弟よ。我が呼びかけに応え、姿を現せ!)」

「——」

「——」 (召喚!) 「——」

「——」 (ケルベロス『三連頭の番犬』) 「——」

「——」 (オルトロス『神速の双頭犬』) 「——」

キリファの前に魔法陣が2つ現れる。

それぞれ中心には、2つの頭を持つ犬と、3つの頭を持つ犬が描かれている。

沙耶は本能的に危険と感じ、無意識のうちに大きく距離を取っていた。

視線が下に固定されているように、上に向かない。

「——えっ?」

沙耶は自分の行為に愕然とした。

自分が気圧された?

まだ本体すら出て来ていないのに?

ありえない。そんなこと。

あつてはならない。

パン！ という音が響いた。

それは、沙耶の頬を叩いた音。沙耶自身が頬を叩いたのだ。

「しっかりしろ！ あたし！ こんなのに負けてたら、みんなに顔向けできないじゃないか！」

今度は、しっかりと前を——キリファを見据える。

魔法陣から、闇が——否、漆黒の色をしたナニカが盛り上がるようにして出てくる。

次の瞬間、思わず膝をつきそうになるほど強い重圧が、沙耶を襲った。

「ぐっ……」

だが、沙耶はそれに屈しなかった。

膝が若干震えているものの、しっかりと前を見据え、その視線には揺らぎは無い。

「——負けるもんか……。負けてたまるか……！」

震えを取り払うかのように、大きく足踏みをする。

再び前方を睨みつけるのと、漆黒のナニカが出てくるのは同時だった。

「「グロオオオオオオオ！……！」」

三連頭の犬が吠える。

「「ラオオオオオオグー！」」

双頭の犬が吠える。

戦いが始まった。

第十一話 死闘1（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

今までで、最多の文字数ですね。

消えた分も合わせると、計1万5千文字以上書いてることになります。

よくやった私！ と自分を褒めたい。

次の更新は、未定です。

出来るだけ早く更新するので、見捨てないでください。

ホントお願いします。

誤字、脱字、矛盾、批判、辛口批判、感想、辛口感想、評価、辛口評価、お待ちしております！

第十二話 死闘2（前書き）

お待たせしました。

新しく書き始めた小説と、見切り発車の企画（？）に執筆時間を奪われながらも、なんとか更新まで漕ぎ着けました。良かった……。

さて、それでは第十二話 死闘2、どうぞ！

第十二話 死闘2

「ハアアッ!!」

吠える二頭の内、沙耶から見て右側、双頭犬——オルトロスに向かって走り出す。

先手必勝。

走る勢いをそのままに、跳躍し、勢いを殺さないように蹴りを繰り出す。

沙耶の足の裏に衝撃が走り、確かに命中したことを感じ取れた。

「何っ!!」

しかし、肝心の相手が居なかった。

本来なら、今の飛び蹴りで吹っ飛ばされているはず。

そう思い、前方を見るが何もいない。

インパクトの瞬間までいたはず。今の感触は、確かに命中した時のものだった。

着地すると、慌てて辺りを見回す。

その瞬間、総毛立った。アドレナリンが脳内を駆け巡り、本能が今すぐ跳べと警鐘を鳴らす。

「くっ!!」

全力で左に跳ぶ。ここまでにかかった時間は1秒にも満たないもの。常人の目、いや、並の退魔師の目にも捉えきれないほどの速度だが、それでもギリギリだった。

数瞬前まで沙耶がいた場所を、黒い何かが挟った。

石畳が破壊されたことにより、下の砂地がむき出しになり、砂煙がもつもつと辺りを覆う。

警戒を怠らず、沙耶はその場所を注意深く見る。

だが、またしても全身の毛が逆立つ感触。生存本能が警鐘を鳴らし、沙耶の身体は、無意識の内にそれに従っていた。

今度は真上へ跳ぶ。軽く15メートルは跳んだだろうか。

沙耶の遙か下方を業火が焼きつくす。あれを受ければ、一瞬で消し炭になってしまっただろう。

その影響が若干砂煙が晴れ、業火を生み出した者の正体が暴かれる。

そこにいたのは、先ほどまで全くのノーマークだったケルベロスだった。

3つある頭の内、一番上の頭が炎を吐いたようだ。その頭は、今現在、沙耶の方向を向いて、やや首を反らしている。

「ヤバッ！」

あれは、ブレスのための予備動作。そう判断した沙耶だが、ここは空中。逃げ場はない——ように思われた。しかし、常識を打ち破り、沙耶は空を踏みしめてさらに跳躍する。

月島流歩法参の型・空踏^{すういふみ}。

足の裏に『庚^{かのえ}』の霊力を纏わせ、そのうえで、そこから『丙^{ひのえ}』の霊力を放出する。『丙^{ひのえ}』の霊力とは、即ち膨張する火。それを一点に集中させ、放出すればどうなるか。急速に酸素と結び付いた火は、自身の膨張する性質も手伝い、一気に巨大な炎へと変化を遂げる。

要するに、爆発するのだ。

相克により、『庚^{かのえ}』の霊力はやや削られるものの、『庚^{かのえ}』の霊力が強すぎるため、身体に影響を及ぼさない。

「破アッ！」

足の裏で起こった爆発により、さらに上空へと跳び上がる。

業火が先走り、先ほどまで沙耶のいた場所を焼きつくす。ケルベロスからその場所まで、20メートル近く離れているはずだが、悠々と届いている。相当射程距離が長いようだ。距離を取ってかわすよりも、方向をずらしてかわした方がいいだろう。

空踏で一気にケルベロスに接近する。

沙耶から見て、左側の頭に蹴りを見舞おうとしたが、その頭も、何やら首を反らし、ブレスを放とうとしている。

「ちいっ！」

沙耶は慌てて方向を転換。ケルベロスの正面に着地する。急激な方向転換と着地で足にダメージが蓄積するが、気にしている余裕など無い。

左の頭がブレスを吐く。その口から放たれるのは、毒々しい紫色をした霧状のブレス。

恐らく、見たとおり毒のブレスだろう。

触れた地面が溶けているので、強力な毒だろうが、当たらなければ意味がない。ブレスを吐いている今がチャンス。決定的な隙を見逃すほど、沙耶は甘くない。

沙耶は、ケルベロスの左半身に回り込むと左足を支柱に、右足を回転。

「ハアアアッ！！」

気合と共に、完成されたフォームから回し蹴りを放った。

ドゴンッ！！

まるで、巨大な岩を、地面に高所から落としたような音。とても肉体と肉体がぶつかって出た音とは思えない。

「グガア……ア！！」

ケルベロスの身体が、まるでクレーターのように凹み、数瞬遅れて、吹っ飛びわきに生えている木にぶち当たる。だが、それでも止まることはなく、2本3本と立て続けにへし折って、漸く止まった。

「グロオオオオオ！！！！」

怒り狂うケルベロス。

立ち上がり、沙耶に憎しみの視線を投げかける。視線で人を殺せそうだというのはこのことを言うのか。

だが、その様子は明らかにおかしい。まず、左前脚があらぬ方向へ折れ曲がっており、さらには、姿勢も、若干ながら左に傾いている。恐らく、肋骨の3、4本は逝っているのだろう。よく見れば、口の周りが血に染まっている。内臓も傷ついているようだ。

もう動けまい。

沙耶がそう思った矢先、ケルベロスは吠えた。

「クオオオオオン！！」

今までの唸り声とは明らかに違う、遠吠え。

その瞬間、ケルベロスを黒い闇が包み込んだ。

その数秒後、黒い包みが解かれ、ケルベロスが姿を現す。

「う……そ……」

そこには、全くの無傷のケルベロスの姿。

いや、この場合は双頭犬オルトロスと呼ぶべきか。

何故なら、3つあった頭の内、右の頭が無くなっていたのだから。ややバランスが悪くなっているものの、体の何処にも傷は見られない。

茫然としている沙耶だが、三度、危機が襲いかかる。

「くっ……！！」

全力でバックステップ。

頭上に黒い影が落ち、そして、漆黒の獣が落ちてきた。

その地面に着地するまでの僅かな時間。

闇夜を切り裂く白銀が、幾度も閃く。

次の瞬間、ズドドドドッ！！と周囲の石畳に無数の切れ目が入った。それどころか、参道のわきの木が切り倒されている。

木の軋む音がして、周りの樹木にもたれかかる。だが、その木も深い切れ目が入っており、まるでドミノ倒し様に次々と倒れていく。そして、幾許いくほくか遅れて突風が吹き、その余波で沙耶の頬が薄く切れた。

しかし、それだけではない。

防刃の糸を使用していたはずのブラウスやパンツは、至る所を切り裂かれ、いささか扇情的な衣装へと様変わりしている。さらに、引き裂かれた部分には、血が滲み、数か所はやや深い傷となっていた。

ただ、傷口がきれいなので一部の傷はくっついており、戦闘に支

障をきたさないのが唯一の救いか。

風に鮮血が舞う。

一瞬にして満身創痍となった沙耶だが、その目に諦めの色はなかった。

それどころか、闘志に満ちているように見える。

そして、黒い影は音も無く着地した。

これほどの威力を叩きだした武器は、双頭犬——オルトロスの長く伸びた爪だった。

猫の様に出し入れできるのであろうその爪は、まるで剣つるぎの如く、大業物の刀の如く、鋭利な空気をその身にまとっていた。

神速で振るわれた爪は、真空の刃を生み出し、すべてを切り裂く。他の追隨を許さない速さと、岩をもバターのように切断する鋭さを併せ持つて初めて実現する、神業。

瞬間的に、縦横無尽に振るわれたであろうその爪は、至る所に、まさしく爪痕を残していた。

本来なら、沙耶の身体は千切りにされていてもおかしくない。

ならなぜ無事なのか。

答えは単純だ。

真空の刃とは、風。風とは即ち木行。そして、金剋木から分かるように、木行は金行に弱い。沙耶は、防御性に優れた『かのと辛』の靈力で出来た壁を自身の前方に作り出したのだ。

これにより、破られて攻撃を受けたものの、致命傷を避けることができたのである。

「——シッ！」

オルトロスに接近し、その頭目掛けて上段回し蹴りを放つ。

鋭い蹴りが頭部を襲うが、少し後退されるだけで避けられてしまった。

しかし、沙耶は、そのまま独楽のように回転しながら、2撃3撃と回し蹴りを繰り返していく。

少しずつ後退していくオルトロス。

それを、まるで舞っているかのように追い詰めていく沙耶。

そして、オルトロスは、痺れを切らしたように唸ると、次の瞬間には沙耶の真後ろに回っていた。

「——ッ！　しまっ……………ガッ——！」

回転が付いた沙耶は、容易には止まらない。

成す術も無く、後ろからの一撃を受けた。

苦し紛れに、『^{かのこ}辛』の霊力を背中に集中させる。が、衣類諸共あっさり引き裂かれた。

鮮血が吹き出し、沙耶の顔が苦痛に歪む。

「くうう……………」

沙耶は激痛に苛まれる身体をおして、跳躍。オルトロスから距離を取る。

しかし、激痛で頭が回らないのか、丁度ケルベロスとオルトロスの真ん中、両者に挟まれるような形になってしまふ。

「——まだ、戦える……………！　この程度の傷でへばってどうする……………！」

沙耶は、回復力を高める働きをする『^{みずのえ}壬』の霊力を傷口に集中させる。沙耶は、水の陽である、『^{みずのえ}壬』が得意なので、このまま数分じつとしていれば傷は完全に再生するだろう。

しかし、オルトロスやケルベロスがそのまま黙って見ていてくれるわけがない。

沙耶は、必要最低限の霊力を傷口に回し、そのほかの霊力を身体能力の向上に回す。

特に、重点的に足に霊力を纏わせ、強化する。

「グラララア——！」

「くっ」

後方からケルベロスの吠え声が聞こえてくる。

沙耶は、それを耳にした瞬間、弾かれた様に左へ身を投げ出した。傷口が地面にぶつかり、激痛が走るが我慢する。

直後、沙耶の居た場所を業火が舐めつくした。

石畳がドロドロに溶け、それをもつてしてもあり余る熱は、容赦なく沙耶を襲った。

「ぐっ……！」

傷に熱風がかかり、思わず顔を顰める。

数秒後、炎の奔流は漸くその動きを止めた。

視界の隅で、オルトロスが動くのが見えた。

もはや黒い残像しか見えないものの、数瞬後には、沙耶をその爪が襲うだろう。

「はっ！」

沙耶は、慌てず右へ、元の場所へ戻るようにして跳ぶ。

予想通り、白銀の煌めきがその場所を切り裂き、地面を切断した。沙耶は、内心安堵のため息をつくが、危機はまだ去っていないかった。着地した刹那、視界の右端に、業火が迫っているのを認識する。

「しまった……！」

ほんの一瞬の油断。本来なら、隙にもならないような一瞬を捉えたのは、素晴らしい連係プレーだった。

凄まじい勢いで、火炎が迫る。

絶体絶命。避ける体勢を整える時間が足りない。体勢が不安定になる一瞬。それをケルベロスたちは突いたのだ。

二頭の赤眼が、勝利を確信したように細められる。

しかし、沙耶は、まるでスローモーションのようにそれを捉えていた。

周りがとても遅く感じる。今までは、黒い残像しか見えなかったオルトロスも、これならばはっきりと捉える事が出来るだろう。

これは、“長考”と呼ばれ、死ぬ寸前にあると見ることがある走馬灯と同じ原理である。脳が活性化し、処理能力が段違いに上昇する。それにより、1秒を何十倍に引き延ばすことができるのだ。

鍛え方によつては、任意で発動することも可能だが、脳を活性化させているため、糖分を補給するなりしなければ、低血糖になり非

常に危険である。

無論、この時点で沙耶が知るはずもなく、のちに聞かされて知ることになる。

そんなことを知る由も無い沙耶の脳裏を、何故……？ という疑問が過る。^{よき}

しかし、沙耶は、それを務めて無視した。

これは千載一遇の好機。戸惑ってはいけない。自分にそう言い聞かせる。

そして、足から空踏と同じ要領で靈力を解放した。ただし、規模を小さくして、であるが。

爆発的な速度で、飛ぶ。もはやそれは“跳ぶ”ではなく“飛ぶ”の方が正しいだろう。

「じゃあっ！！」

知らず知らずのうちに、堅く閉じられた唇の隙間から、押し殺したような呼気が漏れる。

月島流歩法拾の型・速踏。^{はやびみ}

空踏と同じ要領で靈力を爆発させ、強力な推進力を得る技である。それにより、直線的な運動だけであるが、かなりの速度を得ることが可能になる。しかし、空踏と違う点は、地上で行うのが速踏であり、空中で行うのが空踏であるという点だ。

空踏から派生したものが、この速踏である。

ただし、空中のように障害物が無い状況ではないため、少しでも加減を誤れば自身が怪我を負うという危険な技なのだ。

そのままの速度で、オルトロスに迫る。チャンスは今しかない。あの神速に一撃を入れるチャンスは、後先を考えても今しかないだろう。

オルトロスの巨体が眼前に迫る。

その僅か一瞬の間に、^{かのと}「辛」の靈力を有りつつ、右足に注ぐ。

恐らく、これでも使い物にならなくなるだろう。出来れば捨て身の攻撃はしたくなかった、と沙耶は限られた思考の中で嘆息した。

そんな思いとは裏腹に、沙耶は、勢いを殺さず、左足を一歩踏み込み軸足とし、そのまま身体を左に傾け半身にする。

そして、遠心力に身を任せ半回転。

強烈な後ろ回し蹴りを、オルトロスの頸椎に叩きこんだ――。

第十二話 死闘2（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

いかがでしたでしょうか。

これを読んで、かなり無理したなって思った方。
その通り。

本来なら、ケルベロス一頭だけのはずが、書き直したりしているうちに何時の間にやらオルトロスと兄弟出演。

なんとかなるだろう……と思っていたのですが、まあ二頭同時に動かすのが難しい事難しい事。

心が折れそうになりました。

それでも何とか、折れかけた心に添え木をして、なんとか、なんとか更新です。

注意深く読めば分かりますが、殆ど二頭同時に動いていない。

ターン制のバトルみたいになってしまいました。

ご勘弁ください。

何時かりベンジを果たしてやる〜！

誤字脱字・矛盾・感想・指摘・アドバイス・評価待ってます！

（辛口也大歓迎。私が泣いて喜びます）

次回の更新は未定。

チマチマ書いてますので、10月中には……って当たり前か。

取り敢えず、放置は無い（多分）と思いますので、更新していたらぜひとも覗いてやってください。

それでは。

第十三話 死闘3（前書き）

本当にすいませんでした。

1ヶ月も空くななんて言語道断……。

次は、次こそは！ なるべく早く仕上げます。本当です。

さて、この話は、前話からではなく、前々話からの繋がりになっています。

ご注意ください。

それでは！ 第十三話 死闘3、どうぞ！

第十三話 死闘3

光の無い世界の中で、紫音は疾走する。

と、同時に弾丸の再装填。地面を空の薬莖が転がっていく。

ベルゼブブの眼前まで迫ると、サイドステップ。鮮やかな足さばきで、ベルゼブブの側面に回り込む。

タアン！

ほぼゼロ距離での発砲。しかし、その弾丸は、甲殻を僅かに凹ませるだけにとどまった。

だが、紫音は気にする様子も無く、残り6発を撃ち込んでいく。

タン！タン！タン！タン！タン！タン！

寸分変わらず、同じ場所に命中。その甲殻は大きく凹んだ。

だが、その程度。ベルゼブブは特にダメージを受けた様子はない。

「チィッ！」

紫音は舌打ちをすると、バックステップ。

次の瞬間、その場所から石でできた、鋭い槍の様なものが生える。ぬるい。

紫音はそう感じていた。

今の攻撃もそうだ。余裕で避けられる程度のスピードだった。

あからさますぎる手加減。

確かに、一撃貫えは致命傷とまではいかないものの、戦闘不能になる攻撃だ。だが、遅すぎる。視覚してから行動しても避けられるほど遅い。そして――。

「どういうことだ？」

呟いたその言葉に、答える者はいなかった。

――そして、追撃を行わない、ということ。

自分を馬鹿にしているのか。はたまた、挑発しているのか。

前者であれば、その慢心に漬け込むだけだ。だが、後者であれば、下手に接近するのは不味い。

「くそっ……。まあいい。どの道、通常の弾丸だけだと効果が薄そうだしな。アレを使うか」

そう言つと、紫音は再び空になった薬莢を排出。

地面に落ちた薬莢が、乾いた音を立てる。

紫音は、ポーチから深紅の弾丸を1発だけ取り出すと、それを装填した。

そして、銃口を真つ直ぐベルゼブブに向ける。

両者の間に、緊迫した時が流れる。

そのまま、引き金を引いた。

ドン！

通常の発砲音とは、明らかに違う音。

今までの音とは重さが違う、重厚な音。

その弾丸は、銃口を跳び出した瞬間、燃え盛る業火の弾丸となり、その体積を何倍にも膨れ上がらせると、ベルゼブブに向かって突進する。

亜音速で駆け抜ける弾丸。1秒にも満たない時間で、ベルゼブブに到達した。

甲殻と弾丸が衝突する。

その瞬間、火球は瞬時に膨れ上がり、爆風と共に轟音を響かせた。空気がびりびりと振動し、紫音の居る所にまで強烈な爆風が吹き荒れる。煙が舞いあがり、ベルゼブブの姿を隠してしまった。

「やったか……？」

視界が利かない状態で、紫音はベルゼブブが居るであろう一点を見つめる。

煙が不自然に動いていない。どうやら、動いていないらしい。

煙が晴れ、ベルゼブブの姿が露わになる。

そこには、甲殻が大きく凹んでいるものの、そのほかはほとんど無傷のベルゼブブの姿があった。

「やっぱりか……。この『爆炎弾』^{フレア・ブレット}は後2発。他にも、魔術弾は持ってきているが……。しかし、これが一番威力が高いし……。さて、どうするか……」

そう呟きながら、頭を高速回転させる。
考える。そうすれば、活路は開ける。

自身にそう言い聞かせた。

「——今、俺が持っている手札の中で、もっとも高威力なのは、アレだ。だが、隙が大きすぎる。ならどうやって隙を作るか……」

紫音は頭の中でプランを練る。

数秒後、不意にニヤリと唇を歪めた。

「これでいけるな……」

紫音は、ポーチから今度は新緑の弾丸を6発取り出し、装填。そして別のポーチから、同じ新緑だが表面に複雑奇怪な文様が彫り込まれている弾丸を取り出すと、弾倉の一番最後に発砲される部分に装填した。

「——行くぞ……！」

それだけ言うと、紫音は走り出した。

半分ほど距離を詰めると、発砲。

パシユン！ とまるでサイレンサーを着けたような音がする。

コンビクシヨンから放たれた新緑の一発は、目に見えるほどの風を螺旋状に纏い、先ほどまでのどの弾丸よりも圧倒的に早い弾速でベルゼブブに迫る。

^{クシヤナ・ブレット}『穿風弾』。それがこの弾丸の名前。風属性上級魔術『^{トルネード}竜巻』を封入した弾丸で、その効果により、他の追隨を許さない圧倒的な弾速と、貫通力を有する弾丸である。

この弾であれば、あの強固な甲殻も貫ける。中まで貫通すれば、かなりのダメージを期待できるだろう。

必殺の弾丸が、ベルゼブブに向けて放たれた。音を置き去りにして直進する弾丸。

「ggg¥」

しかし、ベルゼブブが短く、人間には発音できない言語を発した瞬間、突如として無くなった。

そう、消滅したのだ。跡形もなくとはこのことを言うのだろう。

紫音の鋭敏になった目ですら消失した瞬間を捉えられなかった。速すぎて目に映らなかったのではない。文字通り消滅したのだ。

「チツ……」

紫音は舌打ちをひとつすると、そのままベルゼブブの左側に回り込む。

紫音は特に驚いた様子ではない。目の前で弾丸が消失したというのに、である。

確かに、魔術ならば消すことは可能だが、とてもではないがこの速度で魔術を発動できる者はいないだろう。ベルゼブブですら不可能であると断言することができ。それに、魔術が発動すれば、魔力の流れを感じることができずだ。それすら感じていないということは、魔術が行使されていないということである。

以上を踏まえると、跡形もなく消滅したと言えるだろう。こんな不可解な現象が起こったにも拘らず、^{かわ}紫音は眉一つ動かさずに見届けたのである。

何故か。

答えは至極簡単。

予想通りだったからである。

別に、紫音が驚きすぎてリアクションを取れなかったとか、戦闘になると鉄扉面になるとか、そう言うことではない。

ベルゼブブが魔術を行使せずに紫音にダメージを与えたこと、そして先ほど、同じく魔術を行使せずに地面からとげが生えたこと。

この2点から、導き出せる回答は1つ。

ベルゼブブは、魔術以外のかかなり応用可能な能力を持っている。この能力は、一瞬で地面を爆ぜさせたり、物の形を変えることが可能はず。

先ほど、紫音が手加減していると感じたのも、これが原因だ。

恐らく、かなりの確率で予想通りの能力を有しているはず。ならば、その能力を使えば紫音など一瞬で消し去ることが可能なはずである。にも拘らず、そうしてこない。

「――だが、『クシヤナ・ブレット穿風弾』は効果があるみたいだな……」

今までの、『フレア・ブレット銃弾や『フレア・ブレット爆炎弾』は避けることすらしなかった。だが、この弾は能力を使って回避した。

つまり、この弾はベルゼブブに効くということである。しかし、当たる可能性は極めて低いと言わざるを得ない。ベルゼブブの力量から察するに、不意打ち同然に発砲したとしても、能力で消されてしまうだろう。

「まあいい。その為の6発だ」

元々紫音にはこの弾を当てる気はなかった。この後に控えている、奥の手を確実に命中させるための布石なのだから。いや、正確にはこの後のあの弾丸さえも、布石にすぎない。

左に回り込んだ紫音は、続けざまに3発発砲。

気の抜けたような音が、静寂の闇に^{こだま}訝する。

しかし、その弾丸もベルゼブブによってあっけなく消滅した。

紫音はそれには気にも留めず、時計回りに動き、ベルゼブブの真後ろへ移動。

そこで、一発撃つ。

またしても紫音は、命中したどうか確認せず、流れる様な動作で右側へ。

その途中、紫音の目が、キュツと細められ、まるで獲物を狙う鷹の様になった。纏う雰囲気^{きふき}が刃物のように鋭くなる。

右側面へ到達した瞬間、紫音は今までとは段違いの速さで、発砲。一発目は、ベルゼブブに向けて。二発目はベルゼブブの足元へ放たれた。

手元がぶれるほどの速度。銃声^{しゅうせい}が一つに重なる。

そして、消えたのは一発目だけだった。

紫音は、ベルゼブブに悟られぬよう、顔を隠してニヤリと唇を歪

めた。

「第1段階……成功……」

ベルゼブブには聞こえない音量で、ボソリと呟く。

紫音は、バックステップで後退し、漆黒のドームの側面にびたりと身体を密着させた。

空になった弾倉から、薬莢を排出。今度は、美しい氷水晶の様な淡い水色の弾丸を、同じく6発、取り出した。

それらを装填した時、奇妙な音が紫音の耳に聞こえてきた。

まるで、導線が切れて、微弱な電流が大気に放出された時の様な……。

ジジジッ！ ジジジッ！

バツと、ポーチを探るために下げていた頭を上げると、そこには、この光の無い空間を、すべて照らすほどの光源となりうるような発光する球体が、ベルゼブブの大きな複眼の前に形成されている光景が。

「——ッ！——！！！」

それを見た瞬間、紫音の全身の肌が泡立った。

今までの攻撃の比ではない危機感が、紫音を支配する。数々の死線をくぐりぬけてきた紫音でさえ、これほどの“ヤバイ”物は見たことが無い。

どんな物事にも、冷静に対処する自信があつたが、一瞬で脳内をパニックに支配される。

「っはあ、ちく、しょう！！」

血が滲むほど、拳を握りしめる。その痛みで漸く我に返った。

我に返ったはいいいものの、気を抜くと、すぐにまた逆戻りしそうになる。

「——落ちつけ……落ちつけえ！」

殆ど叫ぶように自分に言い聞かせる。生存本能が鳴らす警鐘は、最大級。実際には何も無いはずなのに、その音で頭ががんがんする。紫音は、全く動こうとしない己の足に活を入れ、よろよろと走り

出す。と同時に、震える手を必死に静めて、弾倉に入っている、6発の弾丸を抜いた。

弾が地面に落ちて、そこだけがまるで別次元の様に澄んだ音を響かせる。まだ使える弾丸だが、それを拾っている暇は無い。

ポーチから、ベルゼブブの足元に撃ったあの紋様と同じものが彫り込まれた、真紅、水色、茶色の3つの弾丸を取り出す。それらを装填しようとするが、手が震え、なかなか弾が入らない。

漸く、装填を終えた紫音の目に、さらに肥大化した球体が飛び込んできた。

もう、一刻の猶予も無い。

「いける。大丈夫だ……。成功する！」

またしても自分に言い聞かせる紫音。

あああああっ！！ と自身の口から洩れる声も厭わずに、球体の横をすり抜け、ベルゼブブの左側面へ。

そこで1発発砲。

バンッ！ と何かが破裂するような音。真紅の弾丸が、空中を駆ける。同じように足元を狙った弾は、途中で掻き消えることも無く、無事着弾した。

紫音はそれを見届けると、今度は、真後ろに走る。

早く！ 早く！ 早く！ 間に合うように！ 心の中で念じながら走る。ほんの数秒間の出来事だが、紫音には、到達するまでの時間が、異様に長く感じられた。

漸く到着した矢先、今まで辺りに響いていた、ジジジッ！ という音が、突如としてジジジジジジッ！ と連続した細かい音に変わった。

ヤバイ！ 何が起ころうとしているのか分からないが、今まで感じてきた生存本能の警鐘も、あの球体から感じる威圧感プレッシャーも、今までとは段違いに跳ね上がったのだ。立ちくらみの様な症状が、紫音を襲う。

しかし、紫音は獣の様な雄たけびを上げ、それを振り払い、再度

足元に発砲。

ズドンッ！　と言う太鼓の様に腹に響く音を聞きながら、紫音は着弾したか確認する暇もなく、ベルゼブブの正面——あの発光する球体のもとへ駆け寄った。

もうすでに、球体はベルゼブブに並ぼうかと言うほどの大きさで、先ほどまでの位置よりも上——ベルゼブブの斜め上前方に形成されていた。

湧きあがる恐怖心を押し伏せ、突進する。

近寄れば近寄るほど、ジジジジジジジッ！　と言う音は大きくなり、もうすでに、自身の足が石畳を蹴る音すら聞こえない。恐ろしいほどの恐怖感と、全身を硬直させる緊張感。何も聞こえない状況で、体内に響く心臓の音だけが、嫌に大きく聞こえた。

「破あああああつ！！！！」

聞こえない声を振り絞り、絶叫する。そうでもしなければ、この恐怖心に勝てそうにもなかった。

そして、地面に、ベルゼブブの前方の石畳に発砲。音は聞こえなかった。着弾は無事成功。これで舞台は——布石は整った。

紫音は、自身の声が聞こえない状況で、精一杯叫んだ。

「風よ！　水よ！　火よ！　土よ！　四象を包括する虚無に吞まれ、^{ヘルカネス}混沌を守護せし力となりて、罪人を縛り束縛する檻と成せ！　^{エレメ}四象封印^{リズン}！！！」

聴覚が発揮できないこの状況で、はつきり発音できているか疑問だが、しっかりと発音できていたらしい。ベルゼブブの足元に撃った4つの弾丸。そのすべてが発光し出したのである。

それぞれが、ひと際強く光ると、弾丸に刻まれていた紋様が石畳の上にも展開された。円柱に彫られていた所為で分からなかったが、それらは魔法陣で、中心にそれぞれ、風、水、火、土があしらわれている。その大きさは、隣接する2発の弾丸と丁度重なる程度で、重なり合い、中心は複雑な紋様と化していた。

さらに、次の瞬間、その中心の点から、4つの頂点が内接するよ

うに大きな魔法陣が展開された。ベルゼブブをすっぱりと覆ってしまふほどの大きさを持つそれは、その円周から、半透明の壁を構築。天まで届きそうなくらい高く伸びてゆくその壁は、発光する球体を分断し、なんと、それを消してしまった。

突如として無くなる威圧感と恐怖感。紫音の顔に、生気が戻った。ベルゼブブが結界を消そうと腕を壁に打ち据えるが、びくともしない。

紫音は、それを見てニヤリと笑い、崩れ落ちそうになる膝に活を入れながら、後ろに跳びすさる。

「さあ！ 始めようかつ！」

脅威が無くなった為、紫音の声に張りが戻った。そして朗々と歌い上げるように詠唱を始めた。

「破壊と焼失でしか自身の存在を現すことのできぬ者たちよ！ 今、
仮初の器に依り、その内なる暴力を解き放て！！ 精霊召喚！
『ラマンダー火蜥蜴』！」

紫音は詠唱を終えると、いきなり、コンビクションから銃把グリッブを取り外し、投げた。そして、体内に残ったすべての魔力を有りつ丈、そこに注ぐ。

酷いめまいが紫音を襲い、視界が大きくぶれ、紫音を闇へと誘う。しかし、紫音は踏ん張った。倒れこみそうになる足を突っ張り、耐え忍ぶ。

その間にも、石畳に転がった銃把グリッブから、魔法陣が展開される。中心に炎でできた蜥蜴が描かれたそれは、一瞬、炎を噴き出すと、銃把グリッブに吸い込まれて消えた。すると、銃把グリッブから炎が噴出。噴き出た炎が銃把グリッブに纏わり、見るも熱そうな姿になる。

それを目の端で見届けた紫音は、若干ふらつきながらも、銃把グリッブに歩み寄り、炎を気にすることも無く、素手でそれを拾い上げた。

人肉が焼ける嫌な音が響き渡る——のではなく、まるで炎など何もないかのよう熱くなさそうだった。実際、やけどを負ってなどいないし、紫音の表情にも変化が無い。

紫音は、銃把を元の位置に戻すと、空の莖莢を排出。真紅の弾丸

「『爆炎弾』を1発装填した。」

「『爆炎弾』・セットアップ。精霊憑依弾、『焼夷弾』」

紫音がそう呟いた瞬間、銃把に纏っていた炎が、一気に銃身まで覆った。まるで火山から噴き出す炎の如く、銃全体が炎に包まれる。その後、弾倉にある『爆炎弾』にすべての炎が集束した。

まるで揺らめく陽炎のように、時折輪郭を滲ませる弾丸。

紫音は、そんな様子を見て満足げにうなずくと、結界内のベルゼブブを見据えた。

先ほどと同じような球体を出現させ、結界に当てようとしているようだ。しかし、まずびくともしないだろう。

そんな確信を胸に、紫音は銃口をベルゼブブに向けた。

そして、引き金に指を掛ける。

ドクン。ドクン。ドクン。

心臓の音が聞こえる。緊張が高まる。次に行くことを失敗すれば、今までやって来たことがすべて水の泡となる。さらに、打つ手もなくなり、絶体絶命の状況まで追い込まれることとなる。

銃口がぶれる。紫音は、銃を——コンビクションを握る右手に、左手をきつく添えた。

スウーッと深呼吸。気持ちを落ち着かせる。だが、高ぶった気はなかなか静まらない。

何度も何度も深呼吸。漸く気分が落ち着いてきた。

そして、最後の要となる言葉を発する。

「『四象封印』解除」

震えた声で紫音がそう呟いた瞬間、パリン！と硬質な音がして、結界が粉々に砕け散った。

緊張が最大に高まる。ぶれそうになる銃口を左手で修正し、緊張を紛らわすために歯をギュッと食いしばった。

突如として解放されたベルゼブブは、紫音の方向にすぐさま突進しようとした。

が、しかし。

それを遮るように、破壊音が響き渡った。

音の発生源は紫音の手——コンビクション。

瞬間、銃口から炎の塊が飛び出した。——否、塊ではない。

それは炎で形作られた、蜥蜴^{ダイ}だった。炎の蜥蜴——まさしく火蜥^{サラマン}蜴と呼ぶべきそれは、空中をすべるように、ベルゼブブに一直線に進んでいく。決して遅いスピードではない。むしろ早い部類に入るだろうそれは、音速の壁をやすやすと突破した。

破裂音。

しかし、紫音にはそれを見届ける余裕はなかった。蹲る彼の手は血塗れ。傍には、銃把^{グリッブ}が粉々に砕け散ったコンビクションの姿が。火蜥蜴^{サラマンダイ}が発する炎を、銀の銃身^{バレル}が鈍く映し出している。

発砲した際、銃把^{グリッブ}が粉々に砕け散ったのだ。幾百にも分かれた細かな破片は、紫音の両手をズタズタに引き裂き、鮮血で染めた。

あまりの痛みに、蹲ったまま動けない紫音だが、最後の力を振り絞り、叫ぶ。

「行つけええ！！！！」

その言葉に後押しされたかのように、火蜥蜴^{サラマンダイ}のスピードがグンツと上がった。

ベルゼブブが反応する間もなく、炎を司る精霊は衝突した。

閃光。

無音。

轟風。

熱風。

それらを耐えた紫音の目に飛び込んできたのは、視界を埋め尽くすほどの炎。ベルゼブブを中心としているだろうそれは、紫音の手前1メートルほどまで迫っていた。紫音に容赦なく降り注ぐ熱波は、彼の残りわずかな——有って無いようなほんのわずかな体力を完全に削り取った。

意識を失い、硬い石畳の上に崩れ落ちる紫音。その双眸は、ベル

ゼブの死亡を確認する前に、完全に閉じられた。

意識を失う刹那。

紫音は、揺れ動く視界の中で、炎に包まれた人影を見た気がした。

第十三話 死闘3（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

いかがだったでしょうか。

紫音の必死さとかが伝われば幸いです。

次話位で『死闘編』に片が付くと思います。

前書きでああ書いたものの、学校が本格的に忙しくなる為、ペースが落ちる可能性があります。

それに、新作もチマチマ書いているので、一層のこと遅れがちに…。

が、ガンバリマス！

誤字・脱字の指摘、感想、指摘、待ってます！（甘口から辛口までドーンと来い！な作者ですので、気がついたことがあれば遠慮なく感想に書き込んでください。一言だけでもOK。作者の励みになります）

章管理ってわけわかんね〜。

第十四話 死闘4（前書き）

どうも、こんばんは。

更新遅滞常習犯、夕顔でございます。

とうとう一ヶ月以上間が空いてしまいました。

申し訳ありません。

取り敢えず、二ヶ月更新停止状態にならずに済んでほっとしております。

以前からお読みいただいている読者の方々は、もう内容なんて頭の中から消えてしまっているかと思いますが、軽く粗筋だけでも載せておきます。

この街に国際指名手配者である、魔術師キリファが潜伏しているとの情報を受け取った紫音達は、警戒のために、巡回を始める。

市内北部にある神社へと立ち寄った際、そこにキリファを発見。すぐさま交戦を始める。

召喚魔術の使い手であるキリファは、七つの大罪・暴食を司る魔王ベルゼブブを召喚して対抗する。

その過程で紫音の弟子、幸が気絶。ベルゼブブ相手では勝ち目が薄いと考えた紫音は、沙耶に幸を連れて助けを呼びに行かせた。

しかし、助けを呼びに行った沙耶も、キリファに見つかり、止むなく交戦する羽目に。

キリファは、ケルベロス、オルトロスという神話クラスの怪物を召喚する。沙耶は、これらを相手に善戦。

ついにはオルトロスを倒すことに成功する。だが、その代償として、片足に酷い怪我を負ってしまう。

残るはケルベロスのみ。しかし、沙耶は重症。どう戦うのか？

一方その頃紫音は、此方もベルゼブブ相手に善戦していた。そして

ついに、必殺の一撃を放つことに成功する。
だが、そこで力尽き、気絶してしまう紫音。果たしてベルゼブブを
倒すことはできたのか？

第十四話 死闘 4

ここは、とあるマンションの一室。

ほぼ最上階に位置し、辺りの景色を一望できる。

夜の帳が下り、闇に包まれたばかりの街を眼下に、金髪碧眼の美少女はため息を漏らした。それほど大きくは無い街だが、歓楽街のネオンが夜の街に彩りを添える。

だが、そんな彩りさえも超越してしまうような、圧倒的な現象が街に起こっていた。正確には街にはない。町の北部にあるちよつとした森からだった。

その森の一区画から、赤い柱が何の前触れもなく地面から生えたのだ。否、赤い柱ではなく、それは炎だった。ありとあらゆるものを、一瞬にして灰塵に帰す、恐るべき“赤”が高度を上げ、上昇していく。

あつという間に雲を突き抜け、遙か上空まで立ち上る。

そんな、一種の幻想的ともいえる光景を、その少女は何の感慨も顔に浮かべずに眺めていた。

「高度の認識阻害。そしてこの紫音の魔力。極めつけは、我が一族の秘術の発動、か」

少女は再びため息を漏らした。まるで、長い年月を生きた老人の様な、ある種の諦念を含んだため息。少なくとも、この少女には似つかわしくないものであった。

スツと腕を上げて何かを掴む様な動作をする。身に着けた肌着が僅かな衣擦れの音をたてた。

彼女が身に着けているのは肌着のみ。扇情的な衣装ではあるものの、彼女が着れば、劣情よりも畏怖を与える衣装となる。

「のう、紫音。お主は厄介事に巻き込まれるのがよっぽど好きらし

い。……全く、心配する存在が居ることも考えもしない癖に……。いや、妾の存在など、端から頭にないのであるうな。」

明かりが付いていない暗い室内で、抜けるような白さの素顔に引かれた真紅の唇が弧を描く。そこに自嘲の意を見いだせる者は、この室内には居なかった。

「まあよい。それでも妾は行かねばならんのだろう。自身の為に」
行かなかったら、終わりのなき自身の生の最後の瞬間まで後悔するだろう。そう、自身で完結させると、そつと呟いた。

「ふん。精々誇るがよい。紫音よ。この“夜の絶対王”^{ヴァンブロード}、アリカ・ル・フェルナを動かしたのだからな。そして、恐れるがよい。紫音に仇成す者ども。妾は、今、機嫌が悪い。生きていられると思うなよ……？」

最後に凄惨な笑みを残して、夜の王者はその場から消えた。

ここは、とある神社の参道。

夕方と呼ぶには日が暮れ、夜と呼ぶにはまだうつすらと夕焼けの名残が残るころ。

そこには、不気味な暗色のドームが横たわっていた。

明らかにおかしい現象が起こっていると言うのに、誰一人として、その場に居合わせている人はいない。そして、遠目にでも、その光景を目撃した人物はいなかった。

そんな、日常から切り離された非日常に、微細な変化が訪れた。ドームの天井に、僅かな罅が入ったのだ。

その罅は、次第に周囲に広がって行き、ある瞬間、何かに耐えきれなくなっただかのように粉々になった。まるでガラスが砕け散った時のような、澄んだ破壊音が非日常に響き渡っていく。

そして、その後を追うように、灼熱の炎が天高く吹き上げた。さながら火山の噴火を連想させる炎の柱は、やがて雲を突き抜け、果てなき空を突き上げていく。

しかし、眼下の街の住人に、その炎を見た物は居なかった。誰一人として気付いた者はおらず、何事もなく1日が終わろうとしている。

炎は、我関せずとばかりに、上へ上へとただひたすら上昇していった。上空は風が吹き荒れているのか、炎柱がところどころで身をくねらせる。しかし、その先端部の勢いは衰えることを知らない。月に届かんと身をくねらせるその姿は、神々しい龍神を彷彿とさせた。

だが、龍神の思いが叶うことは無かった。遙か上空まで上り詰めた炎は、急速に勢いを減少させ、ついには霧散してしまう。

後には、龍神の存在があったことを証明する、円形に切り取られ

た雲が漂うのみであった。炎が消滅した瞬間、役目を終えたかのように漆黒の半球が粉々に砕け散り、跡形もなく崩れ去っていった。その破片は風に乗り、運ばれていく。

空に黒き風が舞った。

そのドームの跡地。

その中でも炎柱があつた所は、人知を超えた高温に石畳が蒸発し、地面が顔をのぞかせていた。

その焦土と化した場所と、そこからわずかに離れた場所に人影があつた。本来なら有り得ないはずの現象。非現実の住人である退魔師でさえ、ほんの一握りしかこの炎に耐え切れる者はいないだろう。1つの人影は、男だった。

壮年とも言うべき年齢だろうか。灰色の髪で、かなり大柄な体格、煤一つ付いていない紺のローブを着ている。そして、人を威圧し、平伏させる王の威厳を纏っていた。長年玉座に座り、人を使つてきた者にしか身につかないであろう覇氣。自然に発散される覇氣に、周りに木々もおし黙り、静寂を保っている。

もう1つの人影は、石畳に氣を失っているのか、ピクリともせず横たわっている少年だった。

黒髪の、まだ少しあどけなさを残す顔立ち。硬く閉じられた目は、何か苦痛に耐えているように見える。平素であれば、どこにでもいそうな好青年、と言った感じで、この場には似つかわしくないだろう。しかし、その少年の手は血塗れで、そのそばには、銃と思しき残骸が転がっていた。それだけが、唯一、少年が非日常に身を置いていることを証明するものだった。

男は、顎に蓄えられた灰色の髭に手をやってそつと独白する。

「流石……と言ったところか。スピリッツパレット精霊憑依弾……。精霊を弾丸に憑依させていたのか……。だが、単純に憑依させるのは困難。だからあえて銃把グリップに憑依させるという手順を踏んで、作業の難易度を下げたのか。だからこそそのリボルバー式拳銃グリップ。オートマチックであれば、リボルバー式よりも威力は高いが、銃把の部分に余裕が無い。時代

錯誤の銃使いかと思つたが、なるほど、きちんと考えられている……

「……」
まるで、誰かに言い聞かせている様な口ぶりだが、周囲に人はいない。

この男の癖なのだろうか。

「——しかも、単純な威力なら“風の申し子”^{シルフ}を憑依させた方が高
いにも関わらず、“火蜥蜴”^{サラマンダー}を憑依させた。確かに、威力ではそれ
なりの物を持つが、“風の申し子”^{シルフ}ほどではない。先ほどの現象か
ら察するに、狼煙の役割も担っていたということか。我が認識障害
の結界を張らねば、確実に、外の退魔師に知られていた……。如何
に我であっても、これほどの高度な認識障害と、精霊の炎を防ぐこ
とを両立できない……。認識障害の結界を張った以上、右腕を犠牲
にせねばならなかったか……」

男は、左腕で、ダランと力無く下げたままの右腕をそつと撫でる
ように触れた。触れたそばから、サラサラと黒い粉が右腕の裾から
こぼれおちていく。

その時、一陣の風が吹いた。風は零れ落ちる粉を乗せ、遙か遠方
まで運び去っていく。そして、下げられたままのローブの右腕が、
その風に煽られ、はためいた。

「右腕は完全に炭化したか。後1週間は使い物にならん。……」

……しかし、人の身で、この魔界の王、ベルゼブブの身体に傷を付け
るか。たとえ我が全力の1割程度しか力が振るえぬとしても、快拳
であろう。誇るがよい、名も知らぬ小僧よ。そなたは、魔界の王に
一太刀浴びせかけたのだ。後世まで誇れる偉業である」

自らをベルゼブブと名乗った男は、目の前に横たわっている少年
に、語りかけるように呟く。

そして、少年の傍らまで歩くと、残った左腕で軽々と少年を抱き
上げ、肩に担いだ。

まるで、気を失っている少年をいたわるような、ゆっくりとした
動作だった。気絶している少年は、深い眠りにについているのか、目

覚める気配が無い。

少年を担いだまま、神社の境内の方向へ、悠然と歩いていく。
そのまま、闇の中へゆっくりと姿を消していった――。

「くううう………はっ、はっ、はっ、はっ………」

少女は、石畳の脇に生えている木にもたれかかりながら、襲い来る痛みと必死に戦っていた。少女の顔は苦痛に歪み、端正な、整った顔立ちを台無しにしている。

どれほどの苦痛に耐えているのか、その様子から容易に窺い知ることができただろう。

「——があ！　ぐおお……。はっ、はっ、はああ……。……」

辺りには、もうもうと砂煙が舞い、全く視界が効かない。

少女の口から洩れる、くぐもった悲鳴が最高潮に達してから数秒。彼女は、何処か安堵した表情で、限界まで吸い込んでいた息を吐き出し、自身の右足にあてがっていた両手を離れた。

「流石に、完全に、折れてしまった足を、元の位置に、戻すのは、骨が折れるね……。……」

息絶え絶えに呟く少女。彼女の右足は、健康的な小麦色の肌を血が汚し、さらには赤黒くはれ上がっていた。左足と比べても、相当腫れ上がっているのが分かる。

少女は、懷をこそごと弄ると、長方形の和紙を取り出し、右足に貼り付けた。良く見ると、和紙には、墨と筆を使った草書体でびっしりと文字が書き込まれているようだ。

「生きとし生ける者どもに、一時の回復の加護を与えん」

少女が呪文を唱え終ると、柔らかな光を出しながら、まるで空中に溶けるようにして紙が姿を消した。と同時に、少女が立ちあがる折れた右足を庇う様子も無く、自然な動作だった。

少女の足は、先ほどまでの無残な様子ではない。あたかも、傷そのものが以前から存在しなかったように、傷一つない状態でそこにあった。

「効果時間は、約5分……。それまでに決着を付けないとね……。……」
段々と、砂煙が晴れてくる。

うつすらと見えた先の光景に、首があらぬ方向へ押し折られた、巨大な犬の姿があった。否、ただの犬ではない。その首は、完全に折れているものの、その付け根の部分が二股に分岐しており、それぞれに独立した頭部を形作っていた。

双頭犬—— オルトロスは、完全に、その息の根を止められていた。

少女—— 沙耶は、晴れてきた砂煙を振り払い、物言わぬ屍となったオルトロスのもとへ向かう。

「出てきなよ。そこにいるのは分かってる」

沙耶は右斜め前方——沙耶から見て、2時の方向——に声をかけた。

しかし、答える声は無い。そのまま、3秒、4秒と過ぎ去っていく。その間に、沙耶は、何時でも反応出来るように腰を軽く落とし、靈気を両足、そして両目に集中させた。両目に靈気を集めているため、周囲の光景が、薄い緑に色づいていく。

そして、ある一定の濃さまで緑色が達した時、不意に、世界が変わった。

沙耶は、ゆっくりと目を閉じる。もはや、視覚など不要。沙耶には、周囲の光景が360度認識できていた。さらには、障害物によって遮られて見えないはずの林の先まで、認識できている。

それは、視覚しているが、視覚していない。もはや、物を見る、と言っ行為を超越しているのだ。

月島流奥義五感禁術・犠牲天眼。

両目に『木』の陰である『甲^{きのえ}』の靈力を集中させることで、視覚を広範囲に分裂、拡散させ、周囲のありとあらゆる場所を見通す技である。

しかし、奥義、と題されている通り、靈力の細やかなコントロールと、かなりの量の靈力を必要とするため、非常に難易度が高い。

さらには、高濃度の靈力を両目に集中させるため、目に掛かる負担が大きく、使い続ければやがて失明してしまう。また、短時間発動していただけても、一定時間がたてば回復するものの、その直後は視力が大幅に下がってしまうのだ。その為、月島流の技の中でも、禁術に指定されている。

非常にリスクが大きい技であるが、その反面、恩恵も大きい。実に使いどころが難しい諸刃の剣なのである。

沙耶は、その場で1つ大きく深呼吸。

「シッ……！」

そして、跳んだ。

真上に跳躍、その後足の裏に靈力を集中、爆発させ、ケルベロスの居る場所へ、さらに跳躍する。木々の枝の隙間を縫うように跳び込んだ。

地面に激突する直前で、一本の太い枝に掴まる。勢いをそのままに、ぐるりと逆上がり様の様に、一回転。腕が千切れそうになるほどの衝撃が襲いかかるが、耐える。勢いを殺して、ケルベロスの目の前に音も無く地面に降り立った。

まだ、ケルベロスはそこにいる。そう確認した沙耶は、今まで全方位100メートル近くまで向けられていた天眼の対象を、自身の周囲3メートル程度に集中させる。

今まで脳に流れ込んできていた情報が、一気に詳細な物へと切り替わった。周囲の木々の一本一本の葉まで明確に認識できるほど、事細かな情報が沙耶の脳に流れ込んでくる。

頭がパンクしそうだ。

脳髓を駆け巡る鈍痛に、沙耶は僅かに顔を歪めた。

情報の量的には、今までのものとさほど差は無いのだが、情報が細かくなったため、脳の負担が倍増したのだ。

「グロオオオオル!!」

3つあった首の内、1つが無くなり、いささか不格好になったケルベロスが吠える。だが、それでも威厳十分。一般人なら、この動作だけで気絶してしまうだろう。

まあ、その程度で退魔師が気絶していれば、退魔師の名折れと言うもの。沙耶は、顔色一つ変えずに、凌ぎ切った。

「破アッ!」

この時、ケルベロスとの距離は、約2メートルほど。沙耶は、ケルベロスが吠え終わると同時に、勢いよく大地を蹴ってその懐へと飛び込んだ。

間髪入れずに半身になり、ガラ空きのケルベロスの胸部に肘を突き立てる。ドスッと言う鈍い音がして、肘は深々と突き刺さった。

「グオア!?!」

怯むケルベロス。クリーンヒットした肘鉄は、ケルベロスにそれなりのダメージを与えたようだ。

だが、沙耶は、そのまま連続で攻撃を加えようとはせず、バックステップで距離を取った。会心の一撃を放った筈なのに、顔色はあまり良くない。

「さっきの犬つころもそうだけど、やっぱり、こいつら滅茶苦茶硬いね……」

沙耶が、肘をさすりながら呟く。骨折していたり、罅が入っていたりしていないものの、あまりの衝撃に肘から先がしびれて感覚が無くなっているのだ。

どうやら、先ほどの一撃の際、命中の一瞬に^{インパクト}靈力を纏わせ強化したが、それでも強度が間に合わず、ダメージが此方にも跳ね返って来たようだ。

しばらくさすっていると徐々に感覚が戻って来たようで、手を開いたり閉じたりして感覚を確認した後、腰を落として戦闘態勢に入った。

一方ケルベロスの方とは言うと、先ほどの一撃のおかげか、沙耶に向かって来ようとはせず、じつと警戒して、動向を窺っているのみである。

再び、^{ケルベロス}漆黒の番犬と^{退魔師}被いし者は対峙する。

「——スウウウ……………ヴオオオオオ!!」

先手を打ったのはケルベロス。有りつ丈の空気を胸にため込み、己の肺活量を最大限に利用し、強烈な勢いで吐き出す。吐き出された呼吸は、大きな口を飛び出した瞬間、その身に紅蓮の^{ほむら}焰を纏い、ありとあらゆるものを焼き払う殺戮兵器となった。

ケルベロスは、炎を吐き出しながら、その首を薙ぎ払う様にして振った。当然の如く、炎も薙ぎ払われる。

薙ぎ払うようにして振るわれた炎の奔流が、容赦なく周りに密集して生えている木々に襲いかかる。木々に燃え移った火は、瞬く間に辺りに蔓延し、大規模な森林火災となってケルベロスを包み込ん

だ。

だが、ケルベロスは全く堪えていない。さらには、炎を浴びることを楽しむようなそぶりまで見せた。本来なら、何物をも焼きつくす業火も、地獄の番犬には何の効果も発揮しないようだ。

「ウオオオオン！」

ケルベロスは吠えた。

周りを炎に包まれ、遠吠えをするその姿は、この世のものとは思えないほど壮絶な光景である。正に、地獄の番犬に相応しい。

しかしその咆哮は、自身を鼓舞し、相手を委縮させる類のものではない。苛立ちから来るものだった。勘の鋭い者が聞けば、その中に僅かな苛立ちが混じっていたのが感じ取れただろう。

では、ケルベロスを苛立たせるものは一体何なのか。

言うまでも無く、沙耶——敵が炎に巻き込まれていない事である。

ケルベロスが炎のブレスを吐くために、予備動作——肺に最大まで息を溜める動作——をした時、否、その前の段階で、もうすでにケルベロスとは十分な距離を取っていたのである。

何故そのような、予知じみた行為が可能だったのか。

無論それは、この短時間でケルベロスの動きを完璧に理解し、次にどのような動作を取るか手に取るように分かるから、では無い。

秘密は、先ほど天眼の対象を自身の周囲に集中させたことにある。集中させた時の天眼の精度は、天眼の範囲内にあるすべての木々の葉、一枚一枚が鮮明に見えるほどだった。これは、常識を逸脱した、とんでもない精度だと考えてよい。

さて、天眼の範囲は、自身を中心として半径3メートル程度だった。当然ケルベロスもすっぽりとその範囲内入っているはずである。天眼の精度が、常識を逸脱した、化け物じみたものであるならば、ケルベロスの体毛の一本一本まで詳しく見ることが出来るはずである。さらに言うなれば、その体毛の下、皮膚、そのさらに内側に存在する、はち切れんばかりに発達した、強靱な筋肉の動きまで、皮

膚の動きを通じてつぶさに観察できるはずである。

生き物が、ある動作する場合、特別な動作で無い限り筋肉を使い、身体を動かす。また、動かす際に使用する筋肉は、縮むことしかできないという性質上、別の器官を使わない限りは代用することができない。

ならば、その筋肉を観測することが出来、尚且つその動きを瞬時に細かく分析出来るのであれば、その観察対象の動作を予測することが可能である、と言える。

勿論、こんなことをしようと思えば、スパコン並の性能を持った機器と、全身に電極なりを付けた被験者が必要になって来るので、実戦で使うことは、まず不可能だと考えていい。

しかし、理論上は、対象の筋肉をどんな形であれ正確に観測できること、観測結果を元に瞬時にその先の行動を予測できる演算機構がある、と言う条件をクリアしているのであれば可能であり、また、演算能力に多少の問題があつたとしても、ある程度までなら可能性を絞ることが可能である。

さて、沙耶の使用する天眼は、正確な観測が可能である。そして、問題は演算能力であるが、天眼の情報を、情報過多による鈍痛に悩まされながらも処理しきっていることを鑑みると、演算能力には問題が無いと言えるだろう。

つまり、沙耶は天眼を使用すれば、相手の行動を予測することが可能なのだ。

そして、この行動予測こそが、天眼の真骨頂。1対1の戦闘において、相手の行動を予測できることは強力な切り札になる。

沙耶は、ケルベロスが息を吸い込んだ瞬間、それを予知し、石畳のある参道の部分まで後退したのだ。

「ウオオオオン！！」

再びケルベロスの遠吠えが聞こえてくる。直後、燃え盛る木々を薙ぎ倒して、参道に飛び出してきた。

沙耶は、全く慌てることなく半歩下がる。

その瞬間、ガチン！ と音を立てて必殺の牙が空を噛んだ。

「せいっ！」

沙耶は、噛みつきが空振りに終わったことで出来た隙を見逃さず、ケルベロスの上の頭の顎に跳び膝蹴りを食らわせる。

「グオツ……！」

顎の下に直撃した膝は、一番上の頭に軽い脳震盪を引き起こした。目を回した事によって、頭が自重を支えきれなくなり、首がダランと垂れ下がる。

これまでにない好機！ これで終わらせる！

無防備な頭を横殴りに蹴りつけ、さらに蹴りつけた勢いを利用して後ろ回し蹴り。さらにまた回し蹴りの回転を利用したストリート。身体の回転と捻りを最大限に利用した渾身の一撃は、深々とケルベロスの顔面へと突き刺さった。

だが、沙耶の演舞の様な連撃もそこまでだった。

沙耶がストリートを決めた瞬間、残っていた左側の頭が、噛みついてきたのだ。

渾身の一撃を決めた直後であるため、沙耶には僅かな隙が出来ていた。本来ならば、無抵抗の相手を攻撃するのには問題ない程度の隙。しかし、沙耶は残ったあと一つの頭を忘れていた。

攻撃をあつさりと許してしまうような、致命的すぎる隙。

沙耶は、成す術もなく左肩を噛みつかれた。

柔らかい皮膚を突き破って、牙が体内へ侵入する。

ブチブチブチ！ と筋繊維が断ち切られるおぞましい音が体内に響く。そして、骨に当たった時の、ガツンという音と共に漸く止まった。

その瞬間、激痛が脳内を駆け巡り、目の前で火花が盛大に散った。一瞬意識が遠ざかり、周囲が暗くなったが、さらに後から来た苦痛に気絶すら出来なくなる。

「ア、ア、ア、アッ……！」

激痛に、思わず叫び声が口から迸る。

熱い熱い熱い熱いイイツ！！

噛みつかれた肩が急速に熱を持ち、まるで焼き鏝を当てられたようになった。

どう考えても、噛みつかれただけの痛みではない。退魔師と言う戦闘経験が豊富な職業についている沙耶なら、この程度の怪我なら2、3回は経験している。

経験があるのと、我慢できるのとはイコールではないが、それでも、未経験と経験済みでは我慢が効く程度が異なってくる。

経験しているはずの沙耶でも我慢しきれないような痛み。

その原因は、牙にあった。

ケルベロスの3つの頭の内、左の頭は毒のブレスを吐いた。毒のブレスを吐くならば、その牙にも毒腺がある可能性が高い。

そして、この牙には毒腺があった。

その毒の種類は神経毒。血液に直接注入しなければ効果を発揮しないタイプだが、一度血液内に入ってしまったえば、10秒ほどで身動きが取れなくなってしまう様な、かなり強力な毒だ。しかも、性質の悪い事に、苦痛を倍増させるという効果もあった。

この面白くもないおまけのせいで、沙耶はこれほどの苦痛を味わったのだ。

ズボツと音を立てて牙が抜かれた。血と牙の先から滲み出た半透明の毒で、牙がぬらぬらと光を反射している。

牙を抜かれた反動に耐え切れず、沙耶は、糸の切れた操り人形のように地面に崩れ落ちる。崩れ落ちた沙耶は、身じろぎ一つしない。

否、出来ない。もう完全に毒が回ってしまったのだ。

それを見たケルベロスの瞳が、まるで愉悦を感じているかのように、スウウツと細くなる。

そして、大きく口を開け、食らいつく。目の前が暗闇に包まれる。それが沙耶が最後に見た光景だった……………。

第十四話 死闘4（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

私としては、良く書けました。

ですが、死闘編がこの話で終わると言っていたのに、もう後一話ほど続きそうです。

冬休み中に更新できたらいいなあ……。

感想、批判、指摘、誤字脱字の指摘、その他もろもろ待ってます！
（辛口でもオッケーです。また一言だけでも大丈夫。作者の励みになります）

それでは皆様。

良いお年を！

第十五話 死闘5（前書き）

どうも、大変お久しぶりです。

更新が、またもや遅れてしまいました……。

申し訳ありません。

ですが、次回から少しずつ更新期間を縮めていききたいと思います。

具体的に言うならば、次回の投稿は3月末までに。

一ヶ月以内に投稿したいと思いますので。

どうか見捨てないでやってください。

それでは、第十五話 死闘5 どうぞ！

第十五話 死闘5

コツ、コツ、コツ、コツ。

もはや夕暮れではなく、夜の闇に包まれた空に、靴が立てる乾いた音が沁み渡っていく。

肩に担いだ人の重みに、いつもより大きな音が出た。

風が木々を揺らし、葉の擦れる音が靴音にアクセントを加える。

コツ、コツ、コツ、コツ。

不変のリズムが辺りに響く。一度も乱れることの無いそれは、彼の厳格な性格の表れだろうか。

コツ、コツ、コツ、コツ。

雲が切れ、薄暗かった辺りが淡い月光に晒される。光に映し出された彼の姿は、纏っているローブが幽鬼のようで、この世の物とは思えなかった。

死人を肩に担いで地獄へ連れ去る死神。傍から見れば、そんな風に映るのかもしれない。

あながち、間違いとも言いきれないが。

だがそれも一時のこと。すぐに月は雲に隠れて、死神の姿を隠してしまった。

再び闇に包まれた彼は、そんなことを気にする素振りもなく、不変のリズムで闇の奥深くへと消えていった。

「ここかの……」

目の前には鳥居。その奥は参道で、両脇が林になっている。

そんな神社の入り口に、突然、少女が現れた。何の前触れもなく突然に。

少女は明らかに丈のあっていないダボダボのコートを着ており、相当の長さでズルズルと地面を擦っていた。

金髪に、コートからわずかに覗く肌は雪のように白い。まだ年齢は幼そうで、将来は相当な美人になるだろうと予感させる容姿。

少女は現れるなり一言そう呟くと、そのままスタスタと参道の中を歩いていく。

「この奥におるのか……。ふむ。相手は相当な実力者の様じゃしのうち……。ちいと気を引き締めていかんと、殺るどころか殺られてしまつかもしれんの。久々に全力を出してみるか……」

殺るやら殺られるやら、物騒な言葉が少女の口から飛び出す。一般人から見れば奇妙の塊であろうが、少女にしてみれば、これが日

常である。

少女——アリカは、しばらく無言で歩いた後、唐突に口を開いた。「ここが紫音のおった場所か。少々時間が経っておるが、未だに酔いそうなほどの魔力が漂っておるわ……。この状態はちと不味いの」ここまで途切れることなく整備されていたはずの石畳は、黒い塊になってあちこちに鎮座していた。どうやら、超高温でドロドロに溶かされた後、冷えて固まったらしい。

周囲の地面も黒く炭化しているし、どういう原理なのか、この辺りの木々だけ黒く炭化した切り株だけになっているが、その向こう側の木は無傷で何事もなかったように生えている。

そして、吸血鬼のアリカでさえ魔力酔いしてしまいそうなほど、この辺りは魔力に満ちていた。

魔力。

魔術は、魔力を糧に発動する。——それはつまり、魔力がエネルギーを内包している事に他ならない。

そして、魔力と言うエネルギーが全くない状態では、すべての生き物は生存不可であり、しかし、逆に過剰に存在しても、生き物に悪影響を及ぼす事が確認されている。勿論、このことは裏の世界の人間しか知らないことだが。

しかも、厄介なことに、魔力がヶ所に過剰に存在したまま時間が経つと、やがて魔力は淀み、濁り、変質し、瘴気と呼ばれるものに変化してしまう。

瘴気は、生き物に悪影響を……。なんてレベルじゃないほどの影響を与えてしまう。生命そのものを作り変えてしまうのだ。

瘴気に長時間蝕まれ続けた生物は、やがて魔物と呼ばれるナニカに変質してしまう。魔物は、どんなレベルのものでも、“まきよう魔業”と呼ばれる特殊な魔術を扱えるほどの魔力を持ち、それを無意識下で行使することにより、人知を超えた能力を持つようになる。

驚くべきことに、最低クラスの魔物でも、ライオンなどの大型肉食動物を軽く屠ってしまえるほどの力を持っているのだ。

当然のことながら、瘴気によって影響を受ける生物は、動物だけではない。植物だって、魔物化してしまうのだ。おかしいことに、植物は元来自我を持たないが、魔物化してしまうと、何故か自我を持つようになり、周囲の生物を手当たり次第に襲うようになる。

想像してみてほしい。瘴気に覆われた森を。森の植物すべてが、魔物化し、手当たり次第に周囲の生物に襲いかかっている様子を。

真に恐ろしいのは、動物型の魔物ではなく、植物型の魔物だと言えよう。

しかも、厄介なことに、そんな魔物たちを生み出す元となる瘴気は、一度発生してしまうと、中々浄化することができない上、放っておけば徐々に勢力を拡大して広がっていくのだ。

その為、『教会』や『寺院』の退魔師たちは、高濃度の魔力を見つけた場合、浄化可能ならば、その場で即浄化を、不可能であれば、即刻『寺院』か『教会』に連絡することが義務づけられている。勿論、瘴気を発見した場合も同様だ。

そんな訳で、現在アリカには二つの選択肢——自分でこの魔力を浄化するか、それとも、『教会』に連絡するか——が存在する。

勿論、今現在の最優先事項は、紫音の救出であり、一刻の猶予もない。なのだが——

「じゃがのお……。これを機会に、妾にいちやもんを付けられても、後々面倒じゃしの……」

元々、魔物——吸血鬼であるアリカと、『教会』は折り合いが悪い。そもそも、アリカと『教会』は最初、敵対関係にあったのだから。本来なら、未だに敵対関係でもおかしくなかったのだが、ある出来事がきっかけで、アリカも退魔師になることになったのだ。

そのため、未だに『教会』の上層部はアリカに反感を持ち（それはそうだ。ほんの少し前まで敵対関係、しかもアリカは吸血鬼の真祖と言う大物だったのだから）、事あるごとにアリカを『教会』から追放しようとしてくるのだ。

神聖な『教会』に汚らわしい魔物など要らない、と言う訳である。

勿論、上層部の中にも、アリカに友好的な者は何人かいるが、大半がアリカが退魔師であることに否定的な者ばかりだ。

勿論、アリカが退魔師でいられるのは、『教会』のトップがアリカに友好的なものと、アリカ自身の力が大きいことが起因しているため、直接的な手段で追放しようと言う様な輩はほとんどいないが。

しかし、アリカが何かをすることにはいちゃもんを付け、酷い時などは、罪をでっち上げられたりするのだ。

はてさてどうしようか。

逡巡は一瞬だった。

「――仕方が無い。悩む方が愚策じゃしな。さつさと浄化するとしようかの」

そう結論付けると、アリカは丈のあっていないコートの中から、一抱えほどもあるうかと言う、巨大なまろい水晶を取り出した。表面には傷一つなく、向こう側が見通せるほど透き通っている。

そんな水晶を何処から取り出したんだ、と言う突っ込みはなしだ。アリカに常識など通用しない。

アリカはその水晶を地面に置くと、声を張り上げ、まるで歌うかのように詠唱を始めた。

「This is a crystal of all the crimes . (これは、あらゆる罪の結晶なり)」

体内で練り上げた魔力を、声に乗せて高々と“詠う”。

「Become a vicarious victim and undertake defilement that brings the manitou to this ground to expiate the committed crime . (犯した罪を償う為に、この地に魔をもたらす穢れを、身代わりとなつて引き受けよ)」

高密度の魔力を纏ったその声は、辺りに充満する魔力に掻き消されること無く、隅々まで沁み込むように響いていく。

「The crime is too heavy . (その業は

あまりにも重い」

「――However, repose that it is eternal that the crime is permitted it is a day in what time, and it is sent by the god will be obtained if keeping complete nsating. (されど、償い続けたならば、何時の日かその罪は許され、神より送られし永遠の安息を得るであらう)」

その声に反応して、徐々に、最初は緩やかに、少しずつ大気の魔力が鳴動していく。

「Expiate the crime. (罪を償え)」

やがて魔力の鳴動は、物理的な干渉を可能にするほど大きくなっていく。

辺りの木々が、強風に曝されたかのように大きく揺れる。

「Crystal of atonement」 (“贖罪の水晶”)

一瞬の静寂。

その次の瞬間、鳴動が最高潮に達した魔力が、爆発的な勢いで水晶の内部に流れ込んだ。

それに伴って、風も水晶へと吹き付ける。四方から吹きつけられた風は、擬似的な竜巻を形成し、辺りを暴風で蹂躪していく。

「くっ……！ 予想よりも、魔力が多かったか……！」

あまりの暴風に、飛ばされそうになる体を魔術で必死に繋ぎとめる。それでも尚、持っていかれそうなほどだ。

数秒？ 数分？ 数時間？ 永遠とも感じられた時間が終わり、漸く風が弱まった。

実際には数時間も経っているはずが無いので、数十秒程度だったのだろう。

「ふうー……。流石に肝を冷やしたわ……。まあ、無事に封入出来たから、よしとしようかの」

地面に置かれた水晶に目を遣ると、透き通るほどの無色透明から、艶のある漆黒の水晶へと変貌を遂げていた。

アリカは水晶を拾うと、再びコートの中に入れ、何事もなかったかのように歩き始める。

「これで、魔力を封入した水晶は、30個目か。そろそろ纏めて処分せねばならんのお……。まあいいか。それよりも、今は紫音の救出が先じゃな。しかし、かなり先に気配があるしのお。ここはひとつ、転移して登場と洒落こもうかの……」

そう呟くと、アリカは先ほどと真逆、唐突にその姿を消した。

。

「……この……を頼……」

「御……この……度……神……だけで……分だな」

何処か遠くから、人の話し声が聞こえてくる。感じるものすべてが、擦りガラス越しの様な曖昧さで感じられた。

苦痛や疲労なども存在しない、まるでふわふわと虚無の空間を漂っている様な……。満ち足りた幸福がそこにはあった。

だけれど、その幸福は、とても危ういものだった。夢と現、両者の均衡が少しでも崩れたなら、あっという間にまどろみの世界は崩壊してしまう。

——そして、たった今、その均衡は崩壊した。

「ううん……」

坂を転がり落ちるように、比重が現に傾いていく。水の底から、力強い腕で引つ張り上げられるような感覚。

急浮上した意識は、現実と言う名の水面を越えて覚醒した。

「ここ、は……何処……？」

ふわふわと浮かぶ解放感は何処にもない。あるのは、息苦しいほどに重い、自身の身体だけ。

まだ薄ぼんやりとした視界の奥に、目を引く銀髪の男と、壁の様な威圧感のある大きな男、2人の姿がぼんやりと映し出される。

「確か……師匠が……。そう、だ。キリファとか言う魔術師が、何かを召喚しようとして……」

そこまで記憶をさかのぼった時、霧が立ち込めたかのように曇った思考が、一気に晴れて明確なものに変わる。

そして、自分とやや離れた所に、銀髪の魔術師の姿を認めて、危うく声をあげそうになった。

「——ッ！ 大丈夫……。まだ気づかれてない」

彼とは少し距離があり、幸いにもまだ気づかれてはいないようだ。自分は今まで気を失っていて、いつの間にかここまで運ばれてきたのだと、少年——幸が理解するまで、さほど時間がからなかった。

「あの銀髪……多分キリファだな。でも、あの大男は誰だ？」

あの大男には見覚えは無い。誰だろうかと首を捻っていると、不意に全身に悪寒が走った。

「癒せ」

大男が、短く、よく通る声で言う。たった1単語、しかしその中に、暴れまわるエネルギーを一点に無理矢理おし留めた様な、少しでも何かが起こればそのエネルギーが辺りを蹂躪しそうな、そんな危うさを感じた。

そして、その言葉と同時に、悪寒もより強くなる。

「うつ……。これってあの時の……」

全身を無数のナニカが這いまわっていく様なおぞましい感覚。それは、幸が気絶した時の、あの強烈な感覚と全く同じだった。

「そうか……。あいつは、召喚されようとしていた奴か……！」

ちらりと、一瞬、大きな背中で見えなかった向こう側が見えた。

「え……？」

本当に一瞬だけ。だけどその一瞬で見えたのは――。

「し、師匠……？」

あの黒髪、あの顔。地面に倒れ伏したその顔は、あまり良く見えなかった。しかし、あれは間違いなく、師匠――紫音だった。数時間前まで一緒にいた者の顔を忘れるはずもない。

思わずその喉から迸った大声に、キリファ達が振り返る。

しまった、と思う間も無く、身体は無意識にその場から逃走を図ろうとしていた。

しかし、紫音達でも敵わなかった相手に、幸が逃げ切れるはずもなく。

「動くな」

たった一言で、その身体を地面に縫い付けられていた。

「ぐっ……」

あまりにも絶望的な实力差。すっぱんが月を動かそうとするがごとく、その場からの逃走は、万が一にも不可能。

「やれやれ、もう起きてしまったのか。先に記憶を消しておくか……」

…。面倒だが、もう一度眠ってもらうとするかな。ベルゼブブ。やれ」

こつこつと乾いた足音を鳴らしながら、悠然と此方に向かってくる、ベルゼブブと呼ばれた大男。幸はベルゼブブが近づいてくる前に何とか逃げ出そうともがくが、まるで糸で縫いつけられたかのように、起き上がることができない。

こつ、こつ、と乾いた音に絶望を乗せて、一步一步ゆっくりと近づいてくる。その遅い歩みは、余裕の表れか、はたまた、より強く絶望を刻み込もうという嗜虐的な思考の表れか。

「くっそ……！　こんなのなんか……」

あらん限りの力で、見えない鎖を振りほどこうともがく。しかし、本人はもがいたつもりでも、傍から見れば、指一つ動かせていない。遂に、ベルゼブブが幸の目の前にまでやってきてしまった。

「悪いな……。このようなことは私の好く行為ではないが、致し方ない。諦めてもらおう」

聞く者を安心させる様な、腹の底に響く重厚な声。厳しさの全くない、少なくとも、敵に向けるものではない声が、幸の抵抗を止めた。

呆けたように見つめていた幸だが、すぐにハツとして、再び動き始める。だが、その表情は先ほどまでと比べて、何処か諦めの色が窺えた。

ベルゼブブはそれを何処かなしげな眼で見降ろしながら、幸を深い眠りへ誘う一言を呟く。

ああ——もう……。どうか……誰か助けて！

幸は抵抗を止め、祈るようにギョツと目を閉じた。

「さあ、眠——ぐうつ！」

しかし、来る筈の眠りは訪れなかった。

何かがぶつかる鈍い音がしたと思えば、ベルゼブブの言葉がうめき声と共に中断される。

「ふむ。タイミングは完璧、じゃのお。どうじゃ、幸。待ちに待っ

た、ヒーローの登場じゃ」

この声は。この声は！

「アリカさぁん……！」

自分でも笑えるほど、情けない声が出た。

目を開ければ、涙で白く霞んだ視界に、自分よりも小さな少女の姿。だけど、今はとてつもなく大きく見えた。

「待て待て……再開を喜ぶのは後じゃ。少し、こ奴らを捻って来る
としようかの……！」

そう言つて、アリカは幸に背を向け、キリファとの間に割つて入るように歩き出した。

「そうそう、巻き込まれんように出来るだけ下がっておくがよい。

そなたを縛る力は解除しておいたからの」

幸は慌てて、手足を動かして確認する。

本当だ、確かに動ける。

幸は言われた通りに、そろそろと後ろへ下がった。

当然、黙ってベルゼブブが見逃すはずもなく、彼は幸の動きを止めようと口を開く。

「待て！ “動く——”させまいて！——ッ！」

ベルゼブブが、再び幸を縛る言葉を口にしたその時、アリカが一瞬で特大の火球を形成。彼女は、自身の数倍になるうかと言つそれを、プロ野球の投手も真つ青なフォームで投げた。

ベルゼブブに迫る、火炎の剛速球。

アリカとベルゼブブとの距離はそれほど離れていない。先ほど、アリカが幸を救うために彼を蹴飛ばした為、7、8メートルほど離れている程度。

自動車並のスピードで迫って来る、直径3メートル以上はある超巨大サイズの火球を避けるには、それではあまりにも近すぎた。

絶体絶命。助かる手段はもう何処にもない。普通ならば。

……そう、普通ならば。彼はしかし、あまりにも普通とはかけ離れた存在だった。

「チイツ！ “消える”！」

また、一言。命令形で放たれたその言葉は、絶体絶命の危機を、
いとも簡単に覆した。

まるで初めから存在すらしなかったように、突如として火球が消
えうせる。

彼は魔界の王、ベルゼブブ。

その一言一言は、世界に影響を与えてしまうほどに重いのだ。

「……………」

「……………」

夜の絶対王と魔界の王は、お互い無言のまま、にらみ合う。
アリカ ベルゼブブ

火花散る目線だけでの戦いは、張り詰めた空気を周囲に漂わせ、
重苦しい重圧感となつてあたりを支配した。草木一つ音を立てるこ
となく、静寂を保っている。

2人から離れた所にいる幸も、その張り詰めた緊張感に声が出な
い。緊張のあまり喉がからからに乾く。唾を飲み込む音さえ、周囲
に響く気がした。

こんな拮抗がずっと続くのではないか。そう幸が思い始めた時だ
った。

パチパチパチパチ。

そんな静寂を強要された空間に抗うように、乾いた拍手が響いた。
予想外の乱入に、2人は音のする方を振り返る。

その発生源は——キリファ。重苦しい空気を払うように、キリフ
アは軽い口調で言った。

「流石、流石です。まさか、ただの退魔師と戦っていたら、貴女の
様なビクネームが現れるとは思わなかった。弱体化しているとは
いえ、魔界の王を前にしてひるむことなく、さらに睨み返すとは……
。流石は“教会の先兵”、ヴァンブロード“夜の絶対王”——アリカ・ル・フェ
ルナ殿だ」

茶化す様な、相手の神経を逆なでする様な見え透いた挑発に、ア
リカはやや渋い顔になった。

「ふん。妾もこんなところに『極彩色』という大物国際指名手配者があるとは思いませんかったわ。魔界の王とか言っただけ……ベルゼブブか。どうやら、前にあった時よりも力を付けているようじゃしの……。そう言う訳で、じゃ——」

——全力で行かせてもらうぞ。

そう宣言するアリカを、キリファは笑いながら遮った。

「いや、流石に吸血鬼の真祖とやり合うのはぞつとしないのでね。此方も、ベルゼブブを召喚したせいで魔力を少なからず食われている。そう言えば、貴女がどうやら懇意にしているあの退魔師……確か、名は紫音と言いましたか？ 貴女が目をつけただけあって、ベルゼブブも相当の手傷を負ったようです。……ああ、話が逸れたようだ。その紫音君ですが……此方の手元にあることをお忘れなく。それと、もう1人、退魔師の少女ですが。此方もかなり善戦したようです。ケルベロスとオルトロス相手に一歩も引かなかったみたいですよ」

アリカは訝しげな眼でキリファを見つめた。

「まさか……お主、この転移のエキスパートたる妾に、人質を取ろうと？ 2対1であろうとあまり関係が無いぞ。並列思考の1つや2つ、訳無いに決まっております。ベルゼブブを牽制しながらでも、十分2人を転移させることは可能じゃぞ？ それが分かっておらぬお主でもあるまい。一体何を考えておるのじゃ？」

「勿論、貴女が考えているように、人質を取ろうと考えているのですよ。貴女こそお忘れですか？ 私は召喚師^{サモンマスター}。転移魔術もお手の物です。まあ、前回貴女とあった時は、それほど熟練していたわけではありませんでしたが。今は違いますよ？ あまり、昔と同じだと見くびってもらっては困りますね。……ああ、また話が逸れてしまっただけです。転移魔術が得意なら、その逆も然り。妨害も得意と言うことです。私が今ここで戦闘を初めて、この2人を巻き込まない自信は無いでしょう？」

「……………」

この場では、無言は即ち肯定を意味する。そうでなくても、彼女の苦々しい表情を見れば、一目瞭然だった。

キリファはそれを見て満足げに微笑みながら、言葉を紡ぐ。

「そこで、1つ提案です。私としても、こんなところで立て続けに戦っている身が持たない。もうここから先はお分かりでしょう？ 見逃して頂く代わりに、この2人を解放しましょう。勿論、私達の存在を他の退魔師に伝えて頂いても構いません。どうやら、見つかる前に知られていたようですからね。……さあ、どうします？」

さらに笑みを深めながら、キリファは尋ねる。

「——ああ、そうそう決めるなら1分以内で頼みますよ。増援が来られ「分かった」……この思い切りの良さと言うか、決断力も流石と言うべきでしょうね……」

アリカが割り込むようにして了承を伝えると、また満足げな笑みを浮かべた。だがその笑みは、悪戯が成功した時の様なものだ。

「なら、2人はここに置いておきますよ。いくぞ、ベルゼブブ。……では、さようなら。どうやら、また会いそうな気がします……。再会を心待ちにしておきますよ？ レディ？」

最後に、完璧な一礼をして、背を向け歩いていく。後ろから襲われる心配など端からしていない様だ。

そんな2人を見送りながら、倒れている2人を診る。

2人とも特に目立った外傷はないようだ。アリカはホッと胸をなでおろした。

「アリカさん！ 師匠たち、だ、大丈夫だったんですか！？」

後ろから走って来る幸の声を聞きながら、アリカは1人、ため息を吐いた。

「ふん……。最後まで食えん奴じゃ。幼き頃の影も形もありはせんわ……。ずいぶんとひねくれて育ちよって……。まあ、その割には優しさも残っておったようじゃが」

「アリカさん！」

いつの間にか、アリカの所まで到着していた幸は、心配のあまり

涙目になりながら2人を見つめる。

「なに、心配無い。特に怪我はしとらんよ」

そうアリカが告げてやると、ワツと堰が切れたかのように泣き出しながら、紫音に抱きついた。相当心配だったのだろう、しゃくりあげながら何度も何度も、「よ、がっだ……！」と連呼している。

アリカはその様子を、何処か複雑な表情で見つめていた。

「紫音、お主は中々弟子に慕われておるようじゃの……」

クククッ！ と何故か込み上げてくる笑いを噛み殺しながら、夜空を見上げて呟く。

その姿は、普段のアリカからは想像できないほど、弱弱しく、儚かった。

そのさびしげに呟かれた声は、誰にも聞かれること無く、夜空に溶け込んでいく。

「——幸！ 2人とも見た目は傷は無いが、分からぬ所に手傷を負っているやもしれぬ。一旦、家に帰るぞ」

だがそれは一瞬の事。次の瞬間には、今まで通りのアリカがそこには居た。先ほどのまでの弱弱しさを見事なまでに振り払い、幸に声をかける。

「は、はいつ！」

慌てて目を擦って返事をする幸に、アリカは笑みを浮かべながら頷いた。

「“転移”」

一瞬で展開された魔法陣は、2人を容易く飲み込み、その姿を消し去った。

こうして、紫音とキリファとの第一接点^{ファーストコンタクト}は、一旦の幕引きを見ることとなる。

別れた彼らだが、2人の歯車は噛み合ったのだ。2人が再び出会うのも、そう遠い未来の話ではない。

もう止まらない。止まらない。

がっちりと噛み合った2人の歯車は、連動し、巨大な運命の歯車を動かしていく。

他の歯車を巻き込みながら……。

第十五話 死闘5（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
いかがだったでしょうか。

後半が若干駆け足気味なのは、仕様です。

それはともかく、これにて無事、死闘編を終えることができました。
次回は日常編、それも紫音達抜き、日常パートになるかと思ひます。

次回投稿予定は、3月末。

感想、批判、誤字脱字・文章表現の指摘、その他もろもろお待ちしております！

（辛口でもドーンと来い、な作者ですので、遠慮なく送っていただければな、と思います。あ、一言だけでもOKです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6987m/>

秘密の退魔師

2011年3月5日14時40分発行